四書新釋

# 中庸

全

123
a
CN16

Ⓜ

123
a
CN16

始

文學士久保天隨著

# 四書新釋 中庸 全

東京　博文館藏版

井川

123
CN16

2322

四書新釋

# 中庸

文學士　久保天隨　著

## 總說

中庸は子思の作る所なりといふ。子思名は伋、伯魚の子、孔子の孫なり。史記に曰く、年六十二、嘗困於宋、子思作中庸と。孔叢子には、子思適宋、宋大夫樂朔攻之、圍子思、子思撰中庸之書四十九篇とあり。子思の行事經歷に至りては、今その詳を知るに由なし。蓋し逸話の數條、諸書に雜出すと雖も、概ね信を措くに足らざればなり。子思の時、孔子を去ること已に遠く、種々の學說並び起りて、殆ど統率すべからず、儒家の道、將に正傳を失はむとせり。子思、諸侯に遊說して志を得ず、世道の衰を憂ふるの餘、平生師父より傳へ聞きたるところを蒐め、この書を作れりといふこと、一般の通說なり。

然れども此に反する異說を立てむと試みしもの亦た之なきに非ず。或は曰く、此書は何人の手に成りしか、愚謂へらく、必ず子貢の手に成りしならむと。若し子貢に

非ずとすれば、必ず曾子に在り、何を以て之を言ふ。この書說くところ、多端なりと雖も、其要は、性と天と一とに出てず、而かも子貢皆之を聞くことを得て、他の門人は與からず。子貢の他は、唯だ曾子、一貫を聞くを得たれども、その性と天道とを聞くを得たるかを知らず。故に曰く、必ず子貢の手に成ると。これ論語に在りて、明明證すべきもの、之を舍いて他の書を引くもの、吾信せざるなり。且つ夫れ、孔門の道義を論ずる、論語及び禮記中の諸篇、多く諸子の言を雜引して之を證す、獨り比書のみは、一言諸子の語を引かず、その援いて以て證とするところ、單に孔子の言に在り、是れ必ずや、獨り夫子に聞くところにして、諸弟子未だ敢て言はざりしが故ならむ、夫れ諸子の未だ言はざりし所にして、この人獨り之を夫子に聞き、以て之を書す。その高弟に在りしこと、知るべし。高弟は、首に顏子を推す、而かも顏子は孔子に先つて死せり。その顏子及び孔子に後れ、顏子の生時、顏子と才德を比すべきもの、子貢一人のみ、故に夫子之に問ふに、孰れか賢なるを以てせり、この問、未だ嘗て諸子に及ばざりしなり。子貢の才德、知るべし。故に曰く、此書必ず子貢の手に成る、と。且つすでに、諸子の言を引かず、その孔子の歿後百餘年に在らざること、亦た從て知るべし。その子思、中庸を作るといふものは、錯亂を正し、以て之れを全文に復せし者ならむのみ。孔子魯史を用ひて、春秋を定め、之を作といふ。蓋し古しへ聖賢の是正を經て、因て以て世に廣むるもの之を作といふ。この書、之を稱して作と爲す、以て見るべし。漢書藝文志を考ふるに、その禮古經の下、中庸說二篇あり、その儒家者流の部、子思二十三篇あり、これ中庸を以て子思の作と爲さず、中庸の外、子思二十三篇あるなり。蓋しその明かに作者を知るもの、皆その名を著すは、先儒の名、隱沒せむを恐るゝなり。中庸若し子思の作に係らば、何の忌むところありて、其名を著はさゞる。名の著はさゞる、子思の作に非ざるや必せり。漢時古說、尙ほ明かなりといふべけれども、必ずしも理なきに非ざるも、その論證なほ不十分といはざるべからず。況んや史記の撰述、漢書の出でざる前に在り、明かに中庸著作のことを書せしに於てをや。而して假りに說者の言を是とするも、この書すでに子思の手訂に成りしものなれば、居然たる孔門傳授の心法、子思學問の根抵たることは、論を俟たず。故に中庸に述ぶるところを以て、子思の學說を論定する、固より謬と爲すを得ざるなり。

この書、舊と專行す。漢書藝文志、隋書經籍志に見て知るべし。漢の劉向、輯めて禮記中に入れ、馬融、鄭玄、編して四十九篇の第三十一と爲せり。後に程頤、之を抽いて、其舊に復せしことは、曩に大學の總說中に論せしが如し。禮記の諸篇、駁雜信すべからざ

るもの多く、之を其中に雜ゆるは猶ほ管仲をして士中に伍せしむるが如く、孰れか能く、その才器を識らむ。是に於てか程子の功、頗る嘉すべし、而して古義を傳ふるもの、幾もあらず。前に擧げし中庸說二篇と、梁の武帝の撰ぶところ中庸講疏とは、唯だ名を備ふるのみにして、今考ふべからず。宋より以後、近世に至るに及び、儒者之が注釋を作るもの、滋す多しと雖も、或は中字を釋するに、不偏の義を以てするが如き、似て未だ盡くさず、或は以て子思、老聃と抗爭せむが爲に著はせし者と爲すが如き、妄にして誣なり。其他の諸家多くは是類、徐かに其說を究むれば、論すでに本を失ひ、義率ね支乖す。要するに、經文の本旨を失すること遠し。わが此書を著はす所以のものは、經文大義の蒙蔽を救ふが爲にして、條理析すれば可なり。諸家の說の如き、僅にその十一を擧げ、聊か是非を識別する所あらむのみ。他岐傍徑、こゝに深く之を究むるの暇あらざればなり。

然れども、余は他に言ふ所なかるべからず。問題は、本書果して子思が作りし其儘の者なりや否やといふこと、是なり。而して古しへ學者の中、疑議を着けしもの、實に少しとなさず。

邦儒伊藤仁齋曰く、首章の結、喜怒哀樂之未發謂之中、發而皆中節謂之和、中也者天下之大本也、和也者天下之達道也、致中和、天地位焉、萬物育焉の四十七字は、本と中庸の本文に非ず、蓋し古しへ樂經の脫簡誤つて中庸の書中に攙入せし者のみ。何を以て之を言ふ。その說止に六經語孟に叛くのみならず、之を一書の中に推して、亦た相矛盾す。第だ宋明諸儒、多く禪を以て儒に附し、孔孟の旨に合ふと否とを察せず、故に其言の孔孟に叛きしを知らず。今十證を發して以て之を明かにす。學者これを審かにせよ。曰く、その六經語孟に叛くものを以て之を言へば、未發已發の說の如き、六經以來、群聖人の書、皆之なきこと、一なり。孟子業を子思の門人に受く、當に其言を祖述すべし、而して又言はざること、二なり。虞廷及び三代の書、皆已發を以て之を言ひ、而して此處ひとり未發を以て之を言ふこと、三なり。典謨に謂ふところ、中の字、皆發して節に中るの地を說き、これは反つて和を以て之を名づくること、四なり。若し未發の中を以て言となすときは、六經語孟、皆有用無體の書たること、五なり。その一書の中、自ら相矛盾するものを以て之を言へば、此書本と中庸を以て篇に名づく、當に專ら中庸の義を論すべし、而して首として中和の理を論ずること、六なり。中の字、後章しば〳〵出て、皆已發を以て之を言ひ、未だ一の未發を以て言ふものあらざるなり、且つ和の字の如き、子思當にしば〳〵之を言ふべくして、終篇復た之に及ぶものなき

こと、八なり。こゝには、喜怒哀樂發して皆節に中るを以て天下の達道となし、而して後には君臣父子夫婦兄弟朋友の交を以て天下の達道となすこと、九なり。こゝには大本達道を並稱して、後には單に天下の大本をいふ、偏して備はらざること、十なり。この十證は、皆中庸の本文及び六經、語、孟に據つて之をいひ、予が臆說に非ず。且つ喜怒哀樂の四字及び中和を以て連言するものは、獨り樂記に見ゆ。蓋し禮樂の德を贊して、然か言ふのみ。故に曰く、古しへ樂經の脫簡なり、と。先儒察せず、遂に未發の中を以て道學の根本準則となし、今に到つて千古學問の深害を爲す。辨せずんばあるべからず、と。この言、甚だ當れるが如し。亦た若し實際、子思の所說に係るとするも、後章に關係なく、强いて解すれば、技捂を生ずるもの、全く删り去るを可とすべきに似たり。

首章より十五章に至るまでは、特に云々すべきもの無し。その下、第十六章、鬼神の德を論ずるところ、儒家の書に似ざるやの嫌あり。第十七、第十八の兩章、大舜、文王を稱する、專ら孝を以てし、語勢自ら孝經に類するものあり、中庸の義に於て相關せざるに似たり。要するに、禮記に收めし春秋時代雜書の脫簡なるべきか。第十九章に至りては、宋の三山陳善また論ずるところあり。曰く、脩其祖廟、陳其宗器より以下の一段、恐らくは漢儒の雜記ならむ、と。蓋し此章、郊祀宗廟を論ずること詳なりと雖も、要するに傍徑に入りしもの、前後章法の上より考ふるとき、繁簡取捨、頗る當を失ひしに似たればならむ。而して第二十章、哀公問政の一段は、家語に哀公問政篇として出づるもの、或はこれ一篇の書、誤て攙入したるに非ざるか。中庸の一書、僅々四千二百餘字、而して此章實に七百八十字の多きに上り、殆んど五分の一を占め、體裁の上より見て、前と相副はず、章段の齊整を缺くの嫌なき能はず。然れども實に孔子の言學問の本末に於て、盡さゞるなく、前段と相聯關して、秋毫も戾るところ無きが故に、之を存する、亦た妨けず。その下、二十一章以下は、魯齋王氏、定めて誠明書と爲す、無證の言、未だ信據するに足らずと雖も、推して卓見となすに足る。その下、第二十四章、禎祥妖孽を論ずる一段は、前段第十六章鬼神を說くと相並んで、斷じて孔子の語に非ざるに似たり。何となれば、論語に子不語怪力亂神といひ、未能事人、焉能事鬼といへるが如く、凡そ鬼神の事たるや、詩書載する所を見れば畏敬奉承の暇あらず、豈に敢て間然する所あるべけむや。而して今見るところ、或は人の異を好む心を啓くの虞なきこと能はず。之を惑世誣民の說に比して、亦た甚だ遠からざるに似たればなり。之を要するに中庸の一書は漢儒の爲に誤られしもの、頗る多く、全く子思の筆とおも

はるゝは、前半十數章のみ、その言、皆鑿々として據るべく、論語、孟子と相表裏して、大に世教に補益あり、然れども、要するに不完の書のみ。

漢書には子思二十三篇といひ、文獻通考には子思子七卷といひ孔叢子には中庸之書四十九篇といひ、孔子家語の後序には中庸之書四十七篇といひ、子思の筆に成りし者、蓋し頗る多かりしなるべく、今傳ふるところの中庸は、その一部分に過ぎざるや必せり。されば、今の書に於ても、甚しき矛盾を爲さざる限は、盡く之を存するを可と爲さむか。而して余は文に隨て意を繹ぬるに先ち、中庸に見えたる哲學體系の大略を叙述し、讀者をして豫め領知する所あらしむるを得む。

これを概觀するに中庸の書たるや、形而上的思想に富み、文字また頗る簡潔にして、自ら高遠玄妙の姿致あり、然れども歸着するところは、倫理學の範圍外に一歩を踏過せず、蓋し其學の根抵は、易に在り、これより轉化し來りしを以て、姑らく此の如き觀を爲すのみ。而して性論は、卽ち其論の端緒を開くものにして、開卷第一の三句は、性、道、教の何者たるかを說明したる者に外ならず。曰く、凡そ天の命は一般人間の性中に存するを以て、性に率ひ行動を爲すは、卽ち天命を行ふものにして、人間道德の極致たりと。之と併せて道その者の絕對的存在をも認知したり。而して性は何者ぞと云ふに就ては、善といはず、また惡といはず、さながら歸着する所なきが如しと雖も、大體の傾向より推せば、勿論その善たるを豫想するが如く、性善說の萠芽は、遠く古代に於て發見し得べければなり、余は敢て之を傾向といふ、何となれば、子思の性は善惡の差別を生ずる前の心理的根底を指すものに外ならざればなり。その後、孟、荀二子あり、各之を極處に導き、一は善となし、一は惡となす、漢代の揚子雲に至りては、善惡混焉といひ、子思の古に復せむことを圖りしに似たり。是に於てか、儒家の性論自ら循環して發達進捗せし跡、亦た容易に認知すべきなり。

一般人類の性は、唯だ善の傾向を有するものとすれば、之を同一といふこと、固より不可と爲さず。故に子思は一歩を進めて、道德の法則を客觀的に一定したる者と論斷せり。而して實際に於て、その除外例の頗る多きは何の故ぞ、試に子思に代りて答ふるところあらむか。時處位の關係に拘束せられ、止むを得ずして然るのみ。詳言すれば、社會的感化と地理的影響と人種的差異との三者あり、各自相異なりたる歩趨を取りしが故に外ならず。然れども、之を統一合同せしむる規畫は、必ずしも絕無といふに非ず、そは普遍的人性に基礎を定めし吾が儒家の道あるのみ。かくの如きは、縱ひ自ら公言せずと雖も文字の裏面に隱見する根本的精神たるに似たり。

されば、理想的聖者は、生れながら、この道に就て明知するところあり、勉めずして求め、思はずして得、從容道に中るものなり。但し普通の人に在りては、天資未だ足らざるを以て、戮力勉強、以て之を求めざるべからず。かくの如くして、堯舜文武周公孔子等の聖者は、人類に道義の標型を公示せしものなり。中庸の書、すでに人性の同一を云ひ、こゝに又聖者と凡人との區別を設く、確かに矛盾せるが如しと雖も、其間解釋の求め難きに非ず、他なし、その第一は、人間に普通なる性の外に享くるところ、諸種能力の不同を免れざることにして第二は、社會の惡感化と遺傳とが、眞正の人間を腐敗し來らしむるに最も力ある者なること、是れなり。人類一般、不完全なる社會に野蠻的生活をなす間に於ては、自ら道義的精神の修養を缺き、縱ひ之を退歩せしむることあるも、發達せしむべき機會に乏しく、仍て此に至りしのみ。故に吾人は聖者の敎を受けて、自己の何者たるかを知り、以て道義的生活を成すを得むのみ。かくの如きは、子思の言はざるところなれども、その聖者を稱揚したる言語の末をたどり、本を究むる者の必ず斷定し得べき結論たるが如し。誰か、子思を以て放任主義といふぞ、下に引用する一條の言の如き、余が見を以てすれば、全く匡正すべからざる誤謬に滿ちたる無責任の放言に外ならず。曰く、

人は何人たるを問はず、飾らず、直ほさず、自性自然に放任せば可なり。勉めずして自ら道に中り、思はずして自ら道を知るといふものにして、子思の任性論は放任主義に終らざるを得ざるなり。而して若し放任せりと雖も、その結果は決して惡たること能はず。否、萬人盡く生知安行の聖人ならざる可からざる筈なり。又天下の人は之を敎ふること無くとも、自然にみな善人たり、知者たるべき筈なり。これ性に率ひたるものなればなり。天命を行ひたるものなればなり。又離るべからざる道を吾人は有するものなればなり。これ子思の議論の歸着する所たるなり。然るに世上實際の事實は、必ずしも然らざるなり。生來の善人ありと雖も、亦た生來の惡人あり、知者あり、愚者あり、生れながらにして知を有せる者に至つて、蓋し一人もこれあること無し。この事實は子思の所說を破るものに非ずや。しかのみならず、吾人は又子思の所說より論進して、一切人間の行爲は性の發表なるを以て、吾人の所謂惡も亦た善にして、宇宙の道德的組織を成すものなりと云ふを得べし。嗚呼、これ全く善惡の區別を去り、道德を廢棄するものといふべし。(木村鷹太郎氏著東洋倫理學史上卷三三七―三三八)

これ率性之謂道の一句中、率の一字が、如何なる意義を有するかを尋繹せざりし者

にして、少くとも粗讀の誚を免れざる者也。げにや中庸の書は、性の同一をいへり、然ども必ずしも實行的能力の同一を說かざりき。故に天下至誠を以て聖人を形容し、其次致曲を以て大賢以下を形容し、その間に區別を設けしと固より論理の缺陷と爲すべからず。論者は中庸の書に聖人を形容せし語を以て、一般人類を形容せし者と曲解し、乃ち呶々の言を費すのみ、是れ斷じて沒條理の事に屬すと謂はざるべからず。而して又、生れながらにして知を有するもの一人も無しと謂ふか。然らば、論者は天才の何物たるかを知らざるなり。堯舜文武周公孔子、必ず傳ふる如き者なりしと否とは、兎に角、儒家は之を以て理想的聖者、換言すれば道義的天才(若し言ひ得べくむば)と看做せしのみ。且つ夫れ、善惡は行爲の結果に就いて價値を評量したる言のみ、人を殺すは多くの場合に於て惡なりと雖も、民衆の爲に亂賊を殺すは、善の大なるものなり。すでに道義的天才といふ、靈慧の作用は、そが總ての行爲をして自ら結果の善に向はしむ。率性之謂道の語を單獨に考ふれば、或は論者の言の如き缺點を生せむも料られずと雖も、理想的聖者の實例を擧げて、之と相待たしむるに於ては、決して道德を廢棄する者に非ざるを知るべし。子思の意は、人をして、自己に對する利害の評量を爲すなく、自然に道義的生活を爲さしめむとするに外ならず。余は子思の說を以て頗る至れるものと爲すに躊躇せざるなり。

子思の性、大體の傾向善に在り、故に中庸の書は誠を以て、その實體と思惟せしが如し。人間誠あり、以て其性を盡くすを得、かくの如くして向內的思索を成し遂ぐる能力と相伴ふことあらば、翻て又外界の事物に對し、幾分の意味を附與するを得べきなり。すでに內外を合せて、物我を調和すれば、やがて天我契合の聖境に到達すること、必ずしも難きに非ざるべし。否、實際に於ては、頗る難かるべきも、これ人間道義の理想と爲すべきに非ずや。苟くも、一たび天我契合の聖境に到達せむか、人は永劫に亘りて泯滅せざる價値なくむばあらず。中庸の書に可以與天地參矣といひしは、この幺小微眇の一裸蟲たる人類に宇宙的大價値を與へたる者にして、兼ねて人間の品位を高めし者なり。かくの如きは、兎にも角にも、余輩の心意に快く感する新說にして、大なる常識より開展し、やがて其極に達したる議論なること、辯を俟たず。而して宇宙は、人類と同じく道義的にして、果して相合するところあるべきか、そは固より確知するに由なしと雖も、支那上代萬有神敎の觀念を以て、宇宙の現象に意義を附與し、全く道義的の者と思惟したりしや、疑を容れず。されば、今日の實驗的科學と相容れず、之を嘲て「吾人之を獨斷と云ふの外なし」、而して又その議論の性質より

之を形而上學の妄信となす、人間の天地に於ける位置は、吾人之を所謂倫理家に聞かずして、博物學者に聞くを以て正當となす」といふは、精確なる論理的頭腦より出でし言なるべけれど、吾人が賴つて以て命となすところの信仰は、思索經驗の外に數歩を超越するを常とし、到底言說すべからざるものあり、妄りに議論を挾むを要せず、余は中庸の作者が、かゝる信仰を立し得べき社會に生れしを羨むと同時に、現今の日にありても幾分の補正を加へ、かゝる立言をして全く相異りたる礎石の上に、同一價値を保たしむることの、必ずしも不可能に非ざるを思ふこと無きに非ず。之を要するに、中庸の書に開展したる倫理學は、その極處に於て殆んど宗教の性質を帶ぶるに至らむとす、而して是れ儒教その者の特性のみ。

中庸の書に謂ふところの誠は、宛然宇宙の精靈にして、神秘的大勢力を有する者の如し、覆載の間に存する一切思惟すべき事物、形あると形なきとを問はず、盡く誠の作用より出でしものにして、萬物は其性として誠の一部分を分有し、相感通することを得、されば人間の心身も亦た誠にして、天實に之を賦與し、性中に包內的存在をなし、以て其性を定むべし、此點より言へば、性の傾向の善なること、愈よ明白なるべし、中庸の一書は、唯だ人間の善をいひ、罪惡の存在と不倫の行爲の說明とは、實に之を欠けり、他なし、子思は必ず之を言ひしならむと雖も、泯滅して考ふる能はざるに因る、余をして代りて答ふるを得せしむれば、敢て言はむ、世に所謂非道義的行爲は、性中に於ける誠の發動、その本來の作用を失ひたる病的現象にして、一般人類は學問の力を以て誠の何者たるかを意識し、確固完全なる步趨を以て進行せしむべし、唯だ無意識にして性のまゝにするは、率性の眞義に非ざるなり、と。

誠の發動は、卽ち中庸なり、故に首章に見えたる喜怒哀樂云々の四十七字を、樂經の脫簡、攙入せし者に外ならずとすれば、子思の說は、一の困難を見ずして、此に開展することを得べし、若し中庸の書に傳ふるところを必ず存せむと欲せば、未發の中に含ましむるに、中庸の中を以てし、其間に靈慧の作用を認めざるべからず、又中と和とを一致せしめむと欲せば、神秘的觀念を以て附加せざるべからず、かくの如きは、宋儒の事にして、餘りに高遠に過ぎたる感なくむばあらず。

中庸の中は心靈の動機に關し、庸は活動の行爲に關す、故に便宜上之を合して中となすを可とすべく、單に中といふと中庸といふとは、大に逕庭あるを忘る可らず。中の字義、古來諸儒多く深考を缺き、或は過不及なきを以て中と爲し、或は不偏不倚を以て中と爲す、蓋し中は兩端に就いて言ふものにして、剛柔大小厚薄深淺之を兩

端といひ、この兩間の中を指して中といふ。所謂その兩端を執つて其中を民に行ふるもの、是なり。されば、剛ならず、柔ならず、穩當平正の意と見るも不可と爲さず。凡そ長短を評量する者にして、初めて其中を求め得べし。中は必ず權を待て後に當を得、若し中を執つて權なきときは、柱に膠して惡を彈ずるものと同じく、一定不變の弊を免れず。孟子曰く、執中無權猶執一也と、舜湯の中を執るが如き、特に權を言はずと雖も、權自ら其中に在り、權を用ひて其當を得るの後にあらざれば、過不及なきを以て、中と訓するを得ず。不偏不倚の如きは、中の字の義に於て益す遠し。程子曰く、一廳を言ふときは中央を中となし、一家は廳中に非ずして堂を中と爲す、一國を言ふときは堂中に非ずして國の中を中と爲す。此類を推して見るべし、と程子の說の如くすれば、一の中字にして足れり、更に權を用ふるを待たず、何ぞ足れりと爲すを得む。中庸の第二章、君子而時中の時中の如きは、自ら權の存するあり、若し時の字を去れば不可なり。學者中庸の義に於て、字意透徹すべく、決して泛々理會すべからず。變通の妙は、道を行ふ爲に缺くべからざる者にして、三年父の道を改めずといひつゝ、屋漏の雨滴に濡れて病を獲る如きは、決して儒家の道に非ざるを知るべし。

かくの如くして、中はその精神に於て長しへに變化なきものとするも、その行爲に顯はれしものは、機に臨み變に應じて、各異ならざるべからず、すでに中を權すといふ、標準なかるべからず、而してその結果の容易に見はれざる場合に於ては、終に適從するところを知る能はず。自ら以て中となせる者、案外に極端なりしかも知れず。唯だ卓越せる知力、もしくは神秘的靈慧を有するものにして、始めて中の規矩に合ふを得む。然れども、かくの如きは、すでに評量の位地を踏過したるものにして、こゝに論ずべき限に非ず。要するに、中は簡單なる場合、狹小なる範圍に於て、所說初めて明晰なるべきものなり。是が故に唐虞の時、その言、中に及ぶものその多きに堪へざることは、書經に考へて知るべし。而して孔孟の書、僅に一兩言に止まる。孔子は曰く、不得中行而與之、必也狂狷乎と。孟子は曰く、中也養不平と。皆人の氣質に就いて之を言ひ、或は堯湯の事を論ずるが爲に之を言ひしのみ、見るべし。中は唯だ幼穉なる社會の道德說に過ぎず、複雜なる社會に在りての道德は、更に詳細なる目を設けて、敎へらるべき者なるを、孔孟の間、專ら仁義を以て宗と爲し、中に至りては緊密の功となさず、孔門禮をいふて中と曰はず、蓋し中は泛然據るなきの患あつて、禮は秩然紊すべからざるの理あり、中は一を執つて百を廢する弊あつて、禮は事に遇ふて變化するの妙あればなり。故に曰く、恭而無禮則勞、愼而無禮則葸、勇而無禮則亂、直而無

禮則絞と又曰く、博學於文、約之以禮、亦可以弗畔矣夫、と。故に顏子が仁を問ふに方りても、亦た特に禮を擧げて之に告げ、未だ嘗て中を以て言と爲さゞるなり。然らば、孔子の教、斟酌するところありて、必ずしも三代聖人の舊套を襲はざること明なり。これ夫子の德、獨り群聖を超出して、萬世に師表たる所以ならずと曰はむや。

如上の歷史的攷察は、支那古代倫理思想の發達を歸納するに足るものと謂ひ得べし。孔子すでに中の用ふるに足らざるを知り、諸種の德を詳說し、その性の適するところに由り、之を群弟子に敎ふ。而して子思ひとり中を說くものならむには、これ疑もなく古に復せしめむとするものにして、退嬰主義を奉ずる者に非ずと曰ふを得じ。然れども余輩は飽くまで中庸の一書が、子思述作の一小部分に過ぎざることを忘却すべからず。おもふに、子思の述作は整然たる體系を以て成立せしものならむ、即ちこゝに存する中庸を首卷とし、上に論じたる如く史的觀念の尊重より出でて、人性の本源特質に端を發し、その道德を汎稱して中となし、更に孔子が口にせし諸種道德の目を擧げ、他に己が見聞したる道德模型の實例など附記したるものなりしならむ而して後者、即ち子思自身が一新機軸を出したりと思はるゝ部分は、泯滅して傳はらざるを以て、中庸の書に載するところ、叛思特見は幾もあらず、中を說くの諸條、大抵また孔子の言を引用したるのみ、さばかりの價値を認むるを得ず。之を一言すれば、子思の如き不幸にして傳はらざる一大儒家と稱すべきに非ざるか。中庸全體の規畫と價値と、略ぼ此の如きのみ。

朱熹の中庸を說くや、その根本に於て、頗る誤れるものあり。中庸章句の序に曰く、

「蓋し上古聖神、天に繼いで極を立て、道統の傳ふる、自ら來るところあり。その經に見はるゝ、允執其中といふは、堯の舜に授けし所以なり。人心惟危、道心惟微、惟精惟一、允執其中といふは、舜の禹に授けし所以なり。堯の一言、至れり、盡せり、而して舜復た之に益すに三言を以てしたるは、夫の堯の一言、必ず是の如くして庶幾すべきを明かにする所以なり。と。又曰く、子思かの愈よ久しくして、愈よ其眞を失ふを懼るゝや、是に於てか堯舜以來相傳の意を推本し、質すに平日聞くところ、父師の言を以てし、更互演譯、この書を作爲し、以て後の學者に詔ぐ。蓋しその之を憂ふるや深し、故に其之を言ふや切。その之を慮るや遠、故にその之を說くや詳。その天命率性といふは、道心の謂なり。その擇善固執といふは、精一の謂なり。その君子時中といふは、執中の謂なり。世の相後るゝや、千有餘年にして、その言の異ならざる、符節を合する如く、前聖の書を歷選するや、綱維を提携し、蘊奧を開示する、かくの如く其れ明かに、且つ盡せる

はあらざるなり、と、大禹謨の一語を以て、聖門道統の根本と爲す、その之を重んずるや甚しく、以て加ふる蔑からむのみ。然れども、大禹謨は、書經中に於て、最も歴史的價値に乏しく、信憑するに足らざる一篇にして、元と古文尚書に收むるが故に然り。そも古文尚書は、漢より已來、隱沒して傳はらず、晩に晉隋の間に出づ、その言疑ふべきもの、一にして足らず、吳臨川、梅鷟の諸儒、皆之を疑ひ、朱子と雖も、亦た全く信據せしに非ず、而して特に此篇に序するに方りて、その傳統と爲すが如きは、之を重くせむとして却て貶したるものに非ざる無きを得むや。余は、朱子が前後其見を同うせざる理因を知るに苦しまずむばあらず。且つ論語に、堯舜の授受を叙するや、唯だ次に爾舜、天之歴數在爾躬等の二十二字あるのみ、而して、舜、亦た以て禹に命ずといへり。見るべし、舜の禹に授くる、亦た只だ堯の舜に命ずる如くして、少しも增減することなかりしを、而して此に三言を益すといひしは何ぞや。竊かに思ふ、唐虞の間、世醇に民朴に、その君臣敎戒の言、惟だ人倫政術日用常行の間に止まり、心性命理高遠微妙の說に及はず、然らば此語唐虞間の言に非ざること、彰彰然として明かなり、且つ人心道心の言、その要は最も危險の二字に在り、然れども、道心は本と顯然見易き者にして微に非ず、人心固より欲に流れ易しと雖も、然れども人には義理の心あり、專らこれを危といふべからず、何となれば、道心は即ち仁義の良心なればなり。孟子曰く、今人乍見孺子將入于井、皆有怵惕惻隱之心と。又曰く、嘑爾而與之行道之人弗受、蹴爾而與之乞人不屑也、と。子路曰く、未固而言、觀其色赧赧然、非由之所知也、と。仁義の良、その顯然として見やすきこと、此の若し。而して、梏亡の甚しきと雖も、未だ嘗て斲喪せず、猶ほ山木伐ると雖も、萌蘖の生ずる無き能はざるが如し。此に由て之を觀れば、危微の二字、孔孟の旨に合はざること、斷じて見るべし。而して荀子の解蔽篇には、人心之危、道心之微の二語あり、道經曰と稱す。この語、本より書經の言に非ず、蓋し後人剽竊、以て大禹謨一篇を僞撰したるのみ。知らず、所謂道經は果して何等の書なるか、豈に莊子に謂ふところ、墨經の類なるか。朱子中庸を以て聖學道統の傳となすは惡しからず、而して書經といはずして、特に僞作の嫌ある大禹謨の一篇に限りしは、何の故ぞ。

朱子の注、その未發の中を論ずるところ、全く自己の哲學的見解にして、毫も子思と關せず。その他、形而上方面に涉るもの、私說多くして取るに足らず。然れども、其書は、幸にも顚倒改竄の厄を蒙らず、章段の分截、やゝ瑣碎に過ぐと雖も、却つて初學に便なる者あり、故に余が此書を釋するや、大學と異にして、通常世に流布するところ

の朱注本を取り、姑らく定本と爲せり。然れども、讀者必ずしも之に拘はらず、脈絡貫通、詳略相因り、巨細畢く舉ぐるの筆致を玩味し、曲暢旁通、各その極を默會せむこゝを期せざるべからず。

## ◉第一章

**天命之謂性。率性之謂道。脩道之謂教。**

こゝに謂ふところ天なるものは、固より蒼蒼の天を謂ふに非ざるなり。凡そ事、人意の外に出でゝ、人必ず從はざるを得ざるもの、内は我が情の發に於て、外は我が形の變に於て、並びに皆之あり。古しへ、皆之を稱して天と曰へり。されば天は思索を超越したる宇宙の本體に喻せし稱呼、是れのみ今夫れ、理は必ず明に著はる、而かも明は上より下を見るに易く、下より上を見るに難し、上の下を見るや必ず明かなり、故に上に在りて尊尚なるものは、理の著はるゝところ、理の著はるゝところは道の存するところ、道の存するところは人の必ず從ふべきところ、故に或は正理を以て天といひ、或は尊尚を以て天といひ、或は上に在るを以て天と曰ふ、その指すところ異なりと雖も、その實は一なり、而して物の在るところ、識別すべきもの、未だその形體なきはあらざるなり。天は審かに我が上に在り、而かもその形體を索むるに、殆んど得べからず、形體得べからざれば之を無と謂はむか、惑焉として我が中に在るもの、自ら相似たるあり、四肢百骸の用を爲す、未だこの使令を

稟けて動かざる者あらざるなり、夫れ一身の眇小を以て、此物を藏する幾何にして、その百物を驅使する、敢て此の如くなる、況んや、其物にして太虛に盈つるに於てをや、天は已に、宇宙の本體にして、絶對なり、此を以て物を制せは、何物か制すべからざらむ、千聖違ふ能はず、百王距る能はず、子思人の性を說かむとして、首に先づ天の一字を着けしもの、掀天揭地の力あり、獨り道義の序次を示すのみに非ざるなり、且つ夫れ、大學は初學入德の門、論孟は聖賢の粹言、詩書は義の府、禮樂は德の則、春秋は經世の書、周易は聖人の奧祕、固より皆經天緯地の典、然れども此は人道すでに立ち、人すでにその從ふ所を知る後に非ざれば通せず、絶域殊方、未だ始めより學の就くべく德の尙ぶべきを知らざる者に對し、遽爾之に語るに仁義の學習を以てするも、彼れ何の迫るところありて之に從はむ、子思聖人の道を傳へ、大に之を發揮せむとす、是に於てか、敎學の本旨、道義の根源を論じ、普遍的原理を定むるの至當なるに想及せり、故に此書は天より、之を始めたり、天は前にも言ひし如く、百物の逃避する能はざるところ、是非利害を指示するに及ばずして、早くすでに開見するものをして從はざるを得ざらしむ、これ他經と異にして、專ら形而上の議論に趨向せし所以、讀者第一に之を領知せざるべからず、命は諸註單に猶ほ令の如しと訓したれど、未だ盡さず、三略に曰く、出君下臣名曰命、施於竹帛曰命、とこゝに令と謂はずして、命といひしは、獨り著明を主とせしのみならず、復た親切を主としたるなり、命は、彼れ我を以て向後之を受くる物となし、以て之を我が內に訓する義なり、元と二義あり、其一は單に命令の命となす、命事命位の如き是なり、其一はこゝに出でたる天命の命にして、頗る意義あり、分明また二義を存す、一は死生禍福の命となし、一は性命の命となす、この性命の命にも、亦た二義あり、其一は一身の中、生機の在るところを呼ぶものにして、其一は人の中心に感じて自ら動發するもの、詩の小雅正月篇に云ふところ、天之抗我といふ如き、是なり、かくの如くして、自然に感動し中心より發するもの、亦た或は稱して天命と云ひしことあるを知るべし、この天命の人心に行はるゝや、隱顯固より一ならず、單に動機その者を指すに過ぎざれば、未だ截然たる善惡の差別を設くるに及ばず、邪も亦た正に似、正も亦た邪に似たることあり、故に學、天人を究め、智、幽明を通ずるものに非ざれば、その何物たるかを知ること能はず、むかし孔子の聖を以てして、年五十に及んで、始めて天命を知るといへり、その事の至難、知るべきのみ、詩の大雅抑の篇に、之を知り得べき道を示して曰く、訏謨定命、遠猶辰告、また左傳成公

十二年劉子の語に、吾聞民受天地之中以生、所謂命也、是以有動作禮義威儀之則以定命也、能者養之以福、不能者敗以取禍、といへり。これ亦た定命の法をいふものにして、此に謂ふところの天命は、其旨實に亦たかの中心に發して動作禮義威儀定則を設けしむる所以の者と自ら合ふところ無くむばあちず。性はかの中心の發動循ふところの道、自ら常紀を存し、我に於て識定し得べき主體を指せしものなり。性に二義あり。其一は血氣の性にして、民庶氣稟の同じからざる千差萬別たるもの、其一は性命の性にして、古人汎ろく民庶を觀察し、知愚となく、賢不肖となく、その好惡是非するところ一致に歸する所あり、相差ふを得ず、以てかの天命と相配せしめし者これのみ。孟子に曰く、有命焉、君子不謂性也、有性焉、君子不謂命也、と。これが故に、古しへ君子の性を言ふや、必ずかの命と相配すべきところの者にして、始めて之を稱して性と曰へり。この性は、道に從ふを以て其情と爲すものにして、性善說の萌芽は、明かに個中に存在するを察知すべし。人は學で以て是性を成すべく、成性存在、道義之門といへるも、亦た實に此に本づく。朱子が性卽理也といひしもの、如上の意義なれば大に取るべし然れども「天、陰陽五行を以て萬物を化生し、氣以て形を成し、理亦た賦す」といひしは、漢儒の說を其儘繼承せしものにして孝經說に性者生之質命、人所稟受度也といひ、左傳に天有六氣、降而生五行、至含生之類、皆感五行生矣、唯人獨稟秀氣、故體道、といひしを牽强せしに過ぎず。その五行を以て五常に配し、木神は仁、金神は義、火神は禮、水神は信、土神は知といひし如きは、頗る嗤笑すべきのみ。子思豈に五行の說を爲すものならむや、否、直に深奥なる抽象的議論を着けむとしたるものにして、決して區々の附會を爲し、其巧を誇らむとするものに非ず。注者の言の如くすれば、大に子思の價値を減却せし感なき能はず。こゝに又、天命之謂性と書し、謂之といはずして、故らに之謂といひしも、修辭の工夫、卽ち然るに非ずして、別に頗る意義あり。蓋し其旨、天命その者を指すに非ずして、天命の從つて流行する處を指したるなり、故に之を訓讀するには「天の命せし儘にする」と爲すを以て、至當と爲さむ。率は循なり、孟子に率西水之滸とある率の如し卽ち身以て其遵ふべきところを受け、以て進むるの稱なり。道は其中物をして由て行ひ、以て必ず其達を得せしむる者の稱なり。今夫れ性すでに必ず遵ふべきの常途ありて外に存す、民身を以て之に率へば、その常途と之に率ふ者との間に、禮義威儀の則ありて自ら見れ來るべし。これ行ふて以て其達を得るものゝ、必ず由るべきものにして、率性之謂道といふ一句を着けし所以なり。

は、周禮天官膳夫の注に、加薑桂煇治者謂之脩とあり、この脩は肉の凝成したる者なり、凡そ物凝成すれば見やすく、知りやすし、道は形なくして、教は形あり、無形よりして、有形に就く、猶ほ肉脩せざれば消敗し、脩すれば凝成の形、見やすきを爲す如きなり、脩、古注に治也といひ、朱注に品節之也といひしは、固より誤に非ずと雖も、頗る漠然たる感なくむば非ず、之を平易に解せば、始初の道とする所を失はずして、將來仍ほ之を著はさしむるの稱なり、教は材に隨て訓を施すの稱なり、凡そ道の成るところを脩して、其形をして見はさしむべきもの、皆教なり、常人の知見を以てするとき、理は知り難くして形は見易し、故に聖人道を脩して形と爲し、常人をして見易からしむ是に於てか未だ道を離れて教を爲すものあらず、灑掃應對より禮樂射御書數に至るまで、凡そ教の在るところ、道の其中に存せざる者あらず、孝弟忠信は、道始めて性に率ひしもの、直に之を形して以て教と爲せしなり、禮樂の如き、其次に在るものにして、禮は人の愆に因て制し、樂は人の慝に因て制せしものに過ぎず、人、誰か理義を悅はざる心あらむ、桀紂と雖も亦た之あり、何となれば、彼の桀紂、己を處する暴なりと雖も、その人を責むるや、必ず理義を以てせむとす、これ理の人心に在る、誣ゆべからざる所以にして、人あるところ教ある、固より當さに然るべきなり、易の說卦にいふ、昔者聖人之作易也將順性命之理、是以立天之道曰陰與陽、立地之道曰柔與剛、立人之道曰仁與義、とこれ道理を以て立て理外に道なく、教の由て來るところを推及し得べきに非ずや、

以上三句十五字、先づ性道教の三者を立し、其物たるところの實を明かにし、以て下文の論端を發せむとす、朱子曰く、蓋し人、己の性を有するを知りて、その天より出でしを知らず、事の道あるを知りて、その性に由れるを知らず、聖人の教あるを知りて、その吾が固有するところに因て之を裁するを知らざるなり、故に子思、此に於て首に之を發明す、而して董子謂ふところ、道之大源出於天、も亦た此なり、と、解說頗る明晰を推すに足る、世、或は血氣の習、常を成す者を指して性といへども、君子彼を以て性を謂はず、唯だ天下衆庶の心中、別に天命流行して以て之に抗するあり、その動くや乃ち一致の常ある者を指して性と曰ふなり、民身を以てこの一致の常に率ゐ、以て行ふもの、之を謂ふて道と爲すなり、衆庶の愚なるや、己が性と爲せる血氣の習に從ふを常とし、天命の性に率ふに際し、或は蒙蔽損壞を致すこと無きに非ず、聖人その或は然ることあらむを懼れ、詩書禮樂の教を設く、一言以て之を掩へば、教は他に非ず、かの性に率ふの道を修めむと欲するの設たるの

み、故に君子は終に學ばざるを得ざるなり。若し夫れ、性を知て教を知らざるもの、佛氏の說これのみ敎を知つて性を知らざるもの、荀子の學これのみ。學者、それ愼思明辨、以てその歸趣を究めざるべからず。なほ一言すべきは、性道の關係なり。性は己の有するところ、道は天下の通ずるところ、子思は性に率つて行ひ以て道と背馳せざるを期せよといふのみ、道、性より出づといふに非ず。道は絕對的存在を有するもの、性を重ずるの極、道を輕ずるに至れば、位を換へ序を失ひしものにして、議論頗る艱澁に陷るべし。子思の語たるや、やゝ明晰を缺き、語弊なきに非ざれども、實際は如上の義なりしならむ。淮南子「循性而行謂之道」といひしは、聊か古義を失ひしもの、この沿襲の誤を傳へて自ら覺らざる者、其愚及び易からざるなり。

**道也者。不可須臾離也。可離非道也。是故君子戒愼乎其所不睹。恐懼乎其所不聞。莫見乎隱。莫顯乎微。故君子愼其獨也。**

也者は、前に並列して言ふところの者に就いて、特にその一物を擧ぐるの辭なり。古文の法、屢ば見るところ、讀者十分知悉するを要す。須臾は、通雅に從容の轉とあれど、說き得て未だ精からず。郝敬曰く、不久之意、須は待なり、臾は曲なり、速なれば直、遲ければ曲、と。按ずるに揚子法言に云ふ、陳魏楚宋の間營を謂ふて臾と爲す、と。荀子に流言止於瓯臾、注に謂ふ、地の拗坎、瓯臾の如きなり、と。これに據れば、須臾は蓋し物の間隙、稍や小を容れて安きを謂ふなり。離は、物の中間、著相別異なるを稱す。可は、その詭合の愜適あるを許すの辭、可離といふは、人身その道を離るゝの愜適あるを許すをいひ、不可須臾離也といふは、人あり須臾離れむと欲すと曰ふも、すでに不可なりといふ義。是故は、起首より非道也に至るまで、二十九字の旨を擧げて、下文君子戒愼恐懼に接せしむ。戒は之が界限を後日行ふところに設くるの象、愼は思その過失なからむ爲にするなり。睹は彼の體するところの者を以て、我が內に之を認め得たるなり。恐は我が內、彼を慮つてその或は此設あらざる處に至らむことを思ふなり。懼は其來るに當つて、その至ることの禦ぎ難きを思ふなり。其の字は、ともに同一君子の身を指す。郝敬曰く、戒愼は惺惺の意、恐懼は寂寂の意、睹は目に屬す、目は火たり、その神外に朗なり、故に戒愼は外防の意あり。聞は耳に屬す、耳は水たり、その精內に明なり、故に恐懼は內歛の意あり、と。多少の附會は免れざる者とするも、內外表裏を分說する處、頗る簡明、初學をして其意を領せしむるに足る。戒愼恐懼は、要するに書の盤庚に云ふところ、分欲念以相從、各設中于

爾心の趣旨に外ならず。莫は、其他には有ること無しといふ辭。見は現と同じく、人目の睹る處に當て、物形自ら彰認さるべきをいふ。隱は、物に屏して處るもの、存して見難きをいふ。顯は、物衆目の共に觀るところに當るの謂。聞以て辨ずべく、目以て別つべきなり。詩に天維顯思といひ、荀子に衡聽顯幽といひ、素問に其令鳴顯といひ、如き以て其義を知るべし。微は無と相近くして、辨析し難きをいふ。獨は、內に自ら照すをいふ。朱子、人知らざる所にして己獨り知るところの地といひしも、結局に於て甚だ異なるを見ず。

上段性に率て行ふべきところの者を觀て之を命ずるに道の名を以てせり。その意、蓋し謂ふ、凡そ人は造次顚沛、必ずその性に率ふの方に由るべし。然らざれば、必ず天の咎を受けむ。譬へば行者の路に於けるが如し。若し吾しばらく離れむと欲す、といへば、到底行者たること能はざるなり。人も亦た然り。誤つて血氣の習を認めて性となし、聖人の定めし大道を離れむと欲することあらむには、遂に人たるを得ざるべきなり。人の一息未だ絕えざる間は、君以て臣たるべからず、臣以て君たるべからず、その仁に止まり、敬に止まり、慈に止まり、孝に止まるの道、亦た以て易ふべからざるなり。是に於てか知るべし、閒居獨行、一舉一止、亦た離るべからざる者あるを。たとへば樹の土に於ける、魚の水に於けるが如し。若し之を離るべしといはゞ、是れ性に率て行ふ者に非ざるが爲にして、乃ち聖人に戾るもの、楊墨の道に過ぎざるのみ。楊墨の道は、周末に至りて始めて著はれ、其前には之を言ひしものあらず。一人の私にして天下の公に非ざるなり。世の道たるものは、堯舜の道これのみ。而して世の儀則となるべきもの、亦た實に茲に在り。その後、異端雜出、各私說を逞くし、虛無これ尙び、橫議これ肆にし、能く之を統一するなく、監戒排黜すべきもの、頗る多し。學者その惑はす所と爲らずむば可なり。道の離るべからざるや、此の如し。故に人は平日事に應じ物に接する間と雖も、その心內の蘊存するところ、常に戒愼恐懼の意を忘るべからず。蓋し天命の物たるや、中、吾が心の幽深に動いて、其義の發見するところ、乃ち外、聖人の文敎に合ふ。これを人性の正となす。人その正に率ふものは、乃ち道なり。唯だ此命の當るところ、至て識認し難く、其物の動くや、至隱に在り、實に吾が目の睹ざるところ。響くや至微に在り、實に吾が耳の聞かざるところ。君子心を存する、常に此に戒愼して敢て自放せず、此に恐懼して敢て自恃せず、且つ身心を用ふるの善惡の如き、その處隱れ、その機微なりと雖も、心誠に之を知る。故にその知るところの情、物に見はれ、天に顯はれ、又直ちに人

に見はれ、世に顯はれ、その應ずるや、桴鼓の如くにして、榮辱存亡、此に由て分るべきなり、且夫れ、一は數中の最も隱微なるものにして、千萬は數中の尤も見顯なるものなり、然れども翻て思ふに、見著なるものは認め易く、顯明なる者は辨し易し、故に認め易きものは見なり、辨し易きものは顯なり、一の認辨し易きは、千萬の數へ難きに孰れぞや、然らば、一は千萬に比して見顯なるものと謂ふを得べし、これ、莫見乎隱、莫顯乎微の明證と爲すべきに非ずや、されば、人は徒に外に走らず、先づ之を其内に省るべく、末に向はずして本を忘れざるべきなり、かくの如くして、後に善く其方を謬らざるを得む、孔子の人を誘ふて仁に入るゝや、必ず孝弟忠信に由つて之を導く、所謂孝弟忠信は仁と同一物にして、毫も仁の外に出でず、然れども、仁の一字以て人を導き難く、之を孝弟忠信に分てば、從ひ易きに由るのみ、聖門教學の方、かくの如く親切、實際的教理としては、殆んど加ふべからざる者あるを知るべし。

**喜怒哀樂之未發謂之中發而皆中節謂之和中也者天下之大本也和也者天下之達道也致中和天地位焉萬物育焉。**

これ樂經の脫簡なりといふ異說ある一節なり、然ども舊注に從て姑らく解釋を試みむか、喜は樂の一心にあるもの、樂は喜の衆と俱にするもの、凡て天下の理勢、必ず少より多に至る、故に喜は始にあり、樂は後にあり、事物一たび生ずれば、必ず對を生じ、決して其獨を以て終らず、天あれば必ず地あり、寒あれば必ず暑あり、萬物皆然り、喜の對は怒、故に喜心一たび生ずれば怒あり、怒は作なり、憤怒、怒飛、怒生の怒の如き、皆同じ、蓋し喜は平心たり、而して人は平心を以て終る能はず、必ず動いて作す、これを怒となす、而して動作する者は、其勢必ず衰亡す、衰は衰亡の心なり、喪服を衰といふ如き、以て見るべし、故に怒に繼ぐに衰を以てす、衰亡また必ず變じて初に復す、故に衰に繼ぐに樂を以てす、これ皆已發の跡に就いて言ひし者なり、發は之を顏色言行に發するをいふ、易の繫辭傳に、行發乎邇といふと同じ、喜怒哀樂にして未だ發せざれば、渾渾淪淪、偏倚する所なく、以て上に與みすべく、以て下に與すべく、以て彼に與みすべく、以て我に與みすべし、之を中といふ、堯典に允執其中といひ、盤庚に各設其中于乃心といひ、左傳成公十三年劉文公、民受天地之中以生といひしもの(解釋の方法如何によりては)並に皆この喜怒哀樂の未だ發せざるを指して之を言ひしものと爲すべきに似たり、節は、物その分宜に當て

限を作すの處なり、和は彼此相合するところ、善く順適して、各その止を失はざるの稱、大本は、天命の性、天下の理皆これより出づるをいふ、達道の達は、通透せざる無きの意、致は之を其立てる所に施して、推極するなり、位は其所に安ずるの謂、育は物自ら滋長するを得て其生を遂ぐるなり。

喜と怒とは相反し、哀と樂とは相反す、而して我が情の發、能くこの二者を兼ぬるもの、是れその未だ發せざるところ、乃ち天地中の在るところと相合ふべきが故に非ずや、已發未發の別は、視る所に從て其位を殊にす、心は已發にして、性は未發なり、身は已發にして、心は未發なり、人は已發にして已は未發なり、時世を以て之を言へば、堯は未發にして、舜禹は已發なり、孟子に謂ふところ齊王釁鐘の牛を見るに忍びざる心、孺子の將に井に入らむとするや、皆怵惕惻隱の心ありといふ如き、心に就いて未だ發せざる者の例となすべし、蓋しその忍びざる心、其中に在て未だ發せず、發すれば必ず中を得、其宜しきに應すべきの理にして、未だ發せざる者なり、夫れ孺子の將に井に入らむとするを見て、怵惕惻隱の心あるは、交を孺子の父母に內れむとする所以に非ず、譽を鄉黨朋友に要する所以に非ず、其聲を惡んで然るに非ず、かくの如くして一點の不正なきもの、之を呼んで中と爲すべし。

その未だ發して外に至らず、隱然として其中に在るもの、これ所謂未發に非ざるか、人苟くも、その將に喜怒哀樂を發せむとするの際に方て、心常に之を其中に失はざれば、天下の善に於て用ふべからざるところ無きを得む、今夫れ天下の不善は、血氣その中を援すの謂に非ざるは無し、故に君子は自ら其中、心に設くることを爲す、君情を發して能く君たり、臣情を發して能く臣たり、父情を發して能く父たり、子情を發して能く子たるの類、卽ち和なり、人にして允に其中を執り、血氣をして之を援さしめざれば、その情を發するや、位分と相當り、禮文自ら其中に行はるゝを得む、齊王釁鐘の牛を見て、すでに不忍の心あり、之をその九族に發すれば齊家必ず其節に中らむ、之をその百姓に發すれば、治國必ず其節に中らむ、然り而して齊王の否ざりしもの、之を牛に發せしのみにして、他に發せしとき、却て節に中らざりしが故のみ、聖人に在りては、卽ち然らず、身に在れば身修まり、人に在れば人治まる、論語に修己以安百姓といひ、孟子に有大人者、正己而物正といへる如き、卽ち是なり、喜怒哀樂の發して節に中るもの、之を邦家の大に就いて見れば、賞罰禮樂の四者に相當するを見む、かの舜が考績陟明、五服五章といひしは賞と爲すべく、四凶を放竄せしは罰と爲すべく、伯夷に命せしは禮を制せし者にして、夔

に命せしは樂を制せしに外ならず。如上の四者、舜の制して以て天下に及ぼせしゆゑにして、即ち和なり。更に之を易に對比せむに、未發は元にして、和は利なり。利は元を失はずして以て節に中る謂のみ。故に文言には利者義之和といへり。和を以て利を解す、未だかつて當らずむばあらず。中と和と、固より缺くべからざること、亦た贅するを要せざるなり。且つ夫れ中は天地性の存するところ、是が故に君子苟くも中を其心に設くれば、天下の道義、此に由て立つべく、故に呼んで天下之大本といふ。大本すでに立つ、因てかの愼獨の心を以て庸言庸行の善なるものを擇ぶ、その之を擇びて能く可否を辨ずるところの者は、皆知の効なり。其準を取るところは、中節の和なり、すでに和なれば、天下の民に於て其宜しきに愜適せざることなし、故に之を天下の達道といふ。中和の貴きこと此の如し、これ達道なり、天地極めて大なりと雖も、其形を以て稱すれば必ず道立つの後に在るべく、萬物亦た固より然るべきなり。故に中和の道、天地の先にあること明白なり。文言に曰く、先天而天弗違、後天而奉天時と。以て見るべきなり。天は高高以て上に在り、明明以て下に臨む、眇たる人身を以て之に比すれば、その尊卑明闇、大小先後、豈に遐に九牛の一毛のみならむや。然れども、人の立つるところの道は、均しく其先に在り、故を以て天地尊大と雖も、鬼神高明と雖も、必ず指すべき名あり、道は即ち生物の本にして、生物の本は中なり。天下の物すべて生じ易しと雖も、一日之を暴し、十日之を寒して、能く生ずるものはあらず、而かも寒暴の中を得せしむれば、必ず勃然として生ぜむ。陰のみ存するものはあらず、陽のみ存するも物を生ずる能はず、唯だ中のみ以て物を生ずべきなり。道立つところ、天地と雖も包括して剩すなし、況んや鬼と神と人とに於てをや。此の如くして、道の存するところ、天人相通ずるを得べく、君子の中を執り、善を擇ぶや、毎ねに之を其極に致さざること無く、以て物の至和を成すを得、是れ君子の至誠にして、固より以て天地の化育を贊すべし。天地の事すでに亂れず、その萬物性の中、以て天となるべく以て地となるべきもの、各その位を得べく、萬物の生、妨げられずして、各その育を遂げむ、中和の至効、かくの如きのみ。

以上第一章、終の四十七字存否如何に關せず、凡そ三節、はじめに性道教の三言を掲げ、道の本原、天より出でゝ易ふべからず、その實體已に備はつて離るべからざるに說き及ぼす、これを一篇の綱領と爲す、次に君子身を修むるに道を以てする義、即ち存養省察の要を說く、全篇の體要、全く此に盡きたりと謂ふべし。

第一章の解說すでに終る、而して余は此に餘論の數條を附記するを得む。前に總說中に述べしが如く、子思の性を說くや、明晰を欠と雖も、その善を指すものなることは、不言の中に明かなり。凡そ古の聖賢性を設くや、撲言するものあり、文言するものあり、然れどもその歸趣を要するに、百慮して一致するものと謂ふべきのみ。孔子は性相近といひしが、また人之生也直といひ、知仁勇三者天下之達道也といへり。ともに善なるを言ひしものにして、全く善惡を言はざるものと爲すを得ず。他に易に一陰一陽之謂道、繼之善、成之者性といひ、左傳に民受天地之中以生といひ、家語の禮運には、人者其天地之德、陰陽之交、鬼神之會、五行之秀氣也といひ、列子に沖和氣者爲人といへり。これを子思が天命を說き、孟子が性善を道ひ、且つ四端を說きしと併觀すれば、其義甚だ明なるものあるを得む。凡そ直といひ、中といひ、善といふもの、人性の本體に就いて之を撲言せしものに外ならず、而して知仁勇といひ、仁義禮智といひしは、天地の明德に見るあり、以て性の表德となし、人をして資して以て誠を立てしめむとするに意あり、即ち文言せし者なり。先秦時代、學者の性を說くや、かくの如く其れ簡なり、漢儒に至りては、五德五行を以て解となし、宋代の理學者、また之に從ひ、天理氣質、中偏清濁等、種々の名目を立つ。其意性中たゞ五德あり、この五德根株にして、餘は枝葉に過ぎずといふ如く、誤僻譎迂に流れしもの、亦た少しとなさず。今夫れ孝弟仁義、百行萬善、一として人性自然の分にあらざるは無し、五德以て性を感ずるは、非なり。而して、かの荀子の性惡、揚子の善惡混、韓愈の三品、蘇子の無善惡の如き、いづれも、論理上の進步は明かに之を見るべく、半面の眞理として多少取るべきものあり、子思の說の如きは、要するに思想開展の源頭に立つものにして、其簡なるは、固より當然の事といふべきのみ。

古しへの敎、禮樂以て主となす。禮は之を節し、樂は之を和ぐ、君子禮を以て此心を存し、樂を以て此性を養ひ、之を天下に達して、天地位し萬物育す、仁の至、義の盡といふべく、之を古訓に稽へて亦た其然るを見るべし。然れども、子思の戒懼恐懼、所謂向內的思索を意味する者ならむには、直に禮樂の本源に就て言を立てしもの、[illegible]に超越する所ある者といふべし、而して之を孰れにするも、子思は禮樂を含いて單に存養を語り、綱常を離れて獨り省察を設くものにあらず、禮樂綱常を立てしめむには、存養省察、必ず缺くべからざるを論せし者なり。存養省察、すでに至れば、禮樂の効、愈よ著明、德を積むこと愈よ厚かるべく、曾子の戰兢以て證となすべきに非ずや。動容周旋、一として道に離れず、唯だ聖人之を善くす、存養省察、安んぞ

廢すべけむや。而して存養省察は一念未發の際に就いて言ふのみに非ず、之を念々の發に察すべきこと、言を俟たず。儒學が一種の道德教として、實行を主とした る以上、此事あるは、毫も異とするに足らざるなり。

## ◉第二章

**仲尼曰。君子中庸。小人反中庸。君子之中庸也。君子而時中。小人之反中庸也。小人而無忌憚也。**

この篇、孔子の語を引くもの、率ね皆稱して子といふ。而して此を其初となす、その子と稱するもの、何人たるかを疑はれむを恐れ、此に特に字を標して仲尼といへり。用意頗る周匝。庸は人世を通じて誤らざる行爲を汎用するの稱。忌は、其幽を敬して自ら止まるの稱。憚は其難を先にして先づ縮する稱。こゝに中庸といふは、中を體と爲し、以てその間の用となすの意。朱子が「中庸は、偏せず、倚せず、過不及なくして、平常の理、乃ち天命の當に然るべきところ、精微の極數なり」といへるは、中庸其物の解釋として、理義高きに過ぐ。凡そ物、大小長短、善惡邪正等の名たるもの、皆先づ中正を立てゝ、常準と爲し、之に因て信縮出入離合、以て萬物の變化を生ず、これ中の常、人に庸ふるの一大明證なり。中庸の義、最も平易に解すれば、自ら其躬を虛うし、時と相對し、以て中を其心に執り、相宜しきの庸言庸行、自ら其中より出づるをいふ。

君子の德、唯だ中庸に道して、敢て違はず、而して小人の行ふところは、常に中庸に反す。すでに君子なり、能く戒愼恐懼し、能く獨を愼むと雖も、其中を立つところの者、時に隨て變じ、天地の中と同じきを得ざるに至らむとす、之を以て時宜に隨ひ以て其中を立つべし。故に君子而時中といふなり。而して君子の中する所以、乃ち天を畏れ、以て戒愼恐懼するに由れども、小人の無知頑陋なるや、天人の道相通じ、鬼神常にその幽隱に監臨するを知らず、是を以て其心に忌憚なくして、その言行、常に中庸に反するを免れず。小人之反中庸、古しへ反の字なし。その文あるは、王、肅の校訂にはじまる。或はいふ、此一字を加へし爲に、上の二句剩語となる。故に鄭、玄の舊に從ひ、反の字なきを是と爲すと、之に由て解をせば、君子小人各その中庸を擇ぶ。而して君子の中庸のみ誠に然り。その時に隨ひ中に處し、變動適宜なる、豈に學修の効に非ざらむや。小人の中庸、任意妄行、忌憚する所なし。故に之に反す、德義の經に合はざる所以なり、とげにや反中庸といふは結果にして、單に中庸といふ

は動機を示す者なり、故に後者は意義やゝ深長なれども、前者は却て簡切なり、而して教誨の義を標榜する點より見れば、こゝに普通に從ふに若かざるを覺えずむばあらず。

これ第二章、君子小人を兩舉して、人の道を行ふや必ず中庸に從はざるべからざるを極論す。次章以下、散じて之を言ふの張本なり。かくの如くして、子、思夫子の語を類聚し、以て言を立て、意を達す。文、時に屬せざるに似たりと雖も、意は實に相承けたるを見るべし。これ乃ち古人修辭立誠の方にして、呼んで屬辭比事といふ。屬辭比事は、獨り春秋のみならず、讀者當に意義の斷續を察し、以て各章を分別し、多少に拘はるなきを要す。一の子曰に遇ひ、輒ち裂いて一章となせしは、語脈の如何を顧みざる誚を免れずと雖も、前に總說中に述べしが如く、唯だ之を明晰ならしめむが爲のみ、善く讀むものは、連讀一過、大賢屬辭の文精彩自ら見るべき者あるを察知せざるべからず。

## ◉第三章

子曰。中庸其至矣乎。民鮮能久矣。

至とは、之を末路に擬して之を既くすの稱なり。古書に至を以て德を稱するもの、率ね皆人事の及び雖き者を以ていふ。論語泰伯の至德といふ如きは、民得て稱するなきを以ての故に言ひしなり。易に坤を稱して至哉と稱せしものは、その天を承くるを以て言ふなり。また易其至矣乎といひしは、その天を効し地に法るを以て言ふなり。民は人、その分つところの一を指しては人といひ、その衆庶とするところを總稱して民といふ。鮮は罕、久は永、我よりして前に長ずるを久といひ、我よりして後に長ずるを永といふ。この能久の字は、周易恒の卦、象傳九二、悔亡能久中也の能久と同じ。

其至矣乎といふものは、贊嘆の辭。五倫十品、各その道を失はず、かの人の君となりては仁に止まり、人の臣となりては敬に止まり、人の子となりては孝に止まり、人の父となりては慈に止まり、國人と交りては信に止まるといふ如き、天下の能事畢れりといふべく、これ中庸の至德たる所以なり。その至れるや、此の如し。今や人倫上に明かならず、小民下に親しまず、教化日に渝り、不及に失せざれば必ず之を過ぎたるに流れ、道を遠きに求め、事を難きに望む、愈よ驚して愈よ遠く、愈よ務めて愈よ難く、民の能くする少きもの、一に此に坐す。されば此の中庸を標示するこ

と、豈に急務に非ずやといふ意、亦た不言の中に在り。これを引くところの主意は、專ら借りて以て民行自ら中庸の德あるを明にするに在り、以て下文の爲に豫め其地を作らむとするのみ。讀者こゝに着眼し、藕斷えて絲連るの趣、一篇の大文字中に存するを知悉すべし。

## ◉第四章

**子曰。道之不行也。我知之矣。知者過之。愚者不及也。道之不明也。我知之。賢者過之。不肖者不及也。人莫不飲食也。鮮能知味也。**

凡そ天下の人、孝弟仁義の心あり、その中に興發して、以て其風を爲すもの、是を道行といふ。賢者は、材庸常に踰ゆるの稱なり。肖は物象の近似をいふ、故に不肖者は其材迥かに劣て、その祖先と近似する能はざるを稱するなり。智愚は內を以て言ひ、賢不肖は外を以て稱す。

人に自然行ふべきの大道あり、而かも其行はれざる甚し、吾、其然る所以を察するに、知者の過は、孟子に所謂所惡於智、爲其鑿也といふ者にして、一たび智に偏すれば、復た十分心に考察することを爲さず、自ら過越の失を致して、單に智者の稱を出づる能はず、愚者は縱ひ之を知るも、力及ばず、躬行に於て遺すところあり、これ其ともに行はれざる所以、而して知者は到底その責を逃るゝ能はざるなり。賢者は蓋し夷齊の流を謂ふなり、夷齊の賢、豈にその潔淸に過ぐるを欠らざらむや、唯だ世愈よ降り、人皆汙濁に陷るを以ての故に、其過ぎたるに任して控止せず、これ君子行恭に過ぎ用險に過ぐると同じく、美ならざるに非ざるも、すでに過ぎたるを以て、中位明かなるを得ず、不肖者の及ばざるは、復た言ふを要せず。かくの如して、世人終に中庸の德たるを知る者なきなり。然りと雖も、人豈に中庸の德に由らざるあらむや、その言行の出づるところ、常套に依擬すと雖も、但だ借りて以て外貌を粧ふのみ、漫として意を留めず。故に此に更に譬を取り、人莫不飲食也、鮮能知味也といふ。世人いたづらに、廣大精微高明の尊たるを知りて、中庸の尊たるを知らず、猶ほ人情遠方の珍味を慕ふて、水穀の貴たるを知らざるが如し。水穀建て甘醎辛苦、得て味ふべく、味を知るもの、五味に於けるや、その時宜の合ふところを知りて、以て善く之を調用すべきのみ。中道建て、禮義百行、得て觀るべし。德を知るもの、中庸に於けるや、その時宜の合ふところを知て、以て善く擇で之を用ふるを爲

す。故に人に過ぐるの知行ありと雖も、是に察せざれば、所詮日に用ふるも知らざる者にして、尋常百姓と相遠からず、中庸豈に明かにせざるべけむや。

## ◉第五章

**子曰。道其不行矣夫。**

道の行はるゝや、賢知に倚頼すべし、而かも賢知反つて中に過ぐるを以て行はず此道、かくの如く行はれざるの時に當て、圖らずも能く行ふの術あらむか、寧ろ珍として寶とせざらむや。下文舜其大知也與といふは是れなり。鄭玄の注、関無明君教之といふは、簡にして盡せりといふべし。

以上三節、實は合せて、一文となすべく、人莫不飲食也の一句はこの一節に接して、豫め料るの語なり。その中間、再び子曰を挿入したるは、語意をして彌よ明暢達ならしむる爲にしたる者にして、論語に其例多く、呼んで互證の法となすべし。かく之を一文として見れば、三節より成り、人莫不飲食也より以下を合して一節と爲すべし。即ち首に世教すでに衰へ、民行を興さざるをいひ、次に中庸の得難きをいひ、末に道、人と離れず、而かも人自ら察せざるをいふ、子思孔子の語を類聚し、以て世を勉めしむ、實に丁寧懇切を推べきに非ずや、

## ◉第六章

**子曰。舜其大知也與。舜好問。而好察邇言。隱惡而揚善。執其兩端。用其中於民。其斯以爲舜乎。**

舜は有虞氏、聖德あり、帝堯に代て天子となる。事は、書の帝典に詳かなり。心能く物に通ずる、之を知といふ。前に知者の二字を出す、これは獨り知を以て其身を率ゆるものにして、美は則ち美なりと雖も、聖知と比すべきに非ず、且つ舜は固より此の如くならず、故に此に大字を加へて、之を判別せしむ。邇は近なり、物と物とを遠近といひ、身と物とを遠邇といふ、而して衆庶日に用ふる所の言、其義卑近にして通じ易きものを邇言といふなり。隱は之を屏藏して見せしめざるなり。揚は其伏せるを發出して、以て衆の見易きに致すなり。大戴禮に鄙夫鄙婦相會于墻陰、可謂密矣、明日則或揚其言矣とあり。此に謂ふところ、揚善の揚は、即ち亦た其幽に在る者を以て、改めて之を顯處に出すの稱なり。惡といひ善といふ、要するに、邇言の善惡なり。按ずるに、書の今文皐陶謨に、庶頑讒說若不在時、候以明之、撻以記之、書用識

哉、欲二并生一而害二仁者一とあるは、此に謂ふところ隱惡の義なるべく、工以納言、時而颺之とあるは、此に謂ふところ揚善の意に外ならざるべし。執とは、之を行動するところに操持するなり。端とは、物の體、人目を受くるところの初、中の因て立つところの兩端、兩端ありて後、始めて其中を生ずるに非ざるなり。舜は、其德前に言ふ如き數條の者ありしを以て、重華の名に加ふに舜の稱を以てせしなり。又按ずるに、此に好問より揚善にいたるまでは、其旨前の鮮能知味といへるに反應し、執其兩端の二句は、前の君子時中といへると相應ず、章法頗る縝密なり。

智者之に過ぐることすでに前に之を言へり。乃ち是れ、小智の故にして、舜の大智の如きはすでに明かに道の道たる所以を知るを以て、斷じて此の如くならず。蓋し道の天下衆庶に於けるや、其中を以て之を行ふべきの資あらざることなし、然れども、獨りその志す所の陋とその事とする所の鄙とを以ての故に、道の道たるべきもの、之を用ふるも其用を失へり。乃ち是れ虎質にして羊皮、龍德にして蛇服す、笑ふべきに非ずや、舜は之に異なり、道自ら之を己が心に取れば、私智或は其決を亂すことあらむを懼れ、問を好で以て人言を採れり。言に遠邇の別あり、その遠き者は衆庶に遠く、邇き者は衆庶に邇し。是を以て、すでに、その邇言を得、以てその



龍德虎質を蛇質羊皮の中に發す。今夫れ衆庶の同するところの者は、道の存するところなり。然れども、衆庶の同するところ、又惡に同するあり、善に同するあり、唯だ道の行はるゝところは、善に非ざれば繼かず。是に於てか、その察し得たるところの邇言に於て、その惡なるものを隱して以て之を棄去し、その善なるものを揚げて以て之を顯出す。之を顯出する所以の者は、以て、その兩端に執るところの規則と爲さむとするなり。蓋し物之を兩端に執れば、其道兩つながら全くして、偏勝の弊なし。故に、兩端を執るは、道その善の方規を得る所以なり。そも兩端を執るもの、彼此皆善なるものを以て兩端を爲す。譬へば、大學に稱するところ絜矩の道の如し、上下左右前後、並に皆兩端あるものなり。若し之を實にして言へば、父子相求め、君臣相求め、兄弟相求むる、之を兩端と爲す。これ兩端の各善なるものにして、若し彼の一に偏すれば、此の一、或は將に其宜しきを得ざらんとす。是が故に其れ必ず其父に宜しくして、又其子に宜しかるべく、其君に宜しくして又其臣に宜しかるべく、其兄に宜しくして又其弟に宜しかるべし。權あること、實に此の如く、必ず常に物の兩端を執つて、其中を用ふ。その故、他なし、天地の物、常に匹耦を成す、人に於ても亦た然り。其父を以てすれば其子と耦し、其君を以てすれば其臣と耦し、其

兄を以てすれば其弟と耦す、是が故に、その耦するところに從ひ、改めて之が兩端を執り、之を叩いて以て、その兩情の協和する所を竭くすべし。かくの如く、その兩端を執て、兩つながら其情を失ふなきもの、之を其中と爲す。其中を用ふれば、兩情必ず協和するを得むのみ。舜の天下億兆の民に對するや、必ず常に斯中を用ひて、以て其政を爲す、故に、「用其中於民」といひしなり。而して舜が舜の字を以て其稱となすに至りし所以のもの、其義正にこの行誼と相合ふが故のみ。是を以て夫子の意、或は斯に取つて爾か言ひしならむ。然れども、この名稱の義、事、開物に關し、旨頗る幽微、今姑らく省闕せむ。鄭、玄、舜の言、充なりといへり、或は然らむ。今舜の爲すところに從ひ、兩端の善を執らむか、必ず中を用ふるを得む、これ道行はれざるの時に方りて道を行ふの術あるなり。こゝに於てか知るべし、上文に引きし孔子の言は、ともに是れ中を示さむが爲に、發せし者なるを。若し道眞に行はれず、之を救ふの術なくむば、子思此書を著はす、果して何の益かあらむ。鄭、玄、兩端を解して過與不及と云ひ、朱子之を承けて衆論不同の極致となし、更に進んで「量度以て中を取り、然る後に之を用ふれば、その擇審にして行至れるなり」といへり。所說兩端に關しては、如上の言とやゝ背馳すと雖も、兎にも角にも、重きを評量(即ち權)に歸せし一點に於ては、取るべきものたるを失はず。

## ◉第七章

子曰。人皆曰予知。驅而納諸罟獲陷阱之中。而莫之知辟也。人皆曰予知。擇乎中庸。而不能期月守也。

人は智愚賢不肖を總括して謂ふ。人皆曰予智、僅々五字、殆んど天下の人情を說き盡したり。元惡至愚、己の惡を知ること、蓋し之ありと雖も、未だ自ら以て愚と爲すものは、あらざるなり。驅は策を揚げ、馬を威し、之をして行かしむるの名、故に、凡そ物あり後より相迫り之をして前に行かしむるもの、並に皆稱して驅といふなり。罟、擭、章泰占曰く、罟擭は二物、罟は網なり、尙書の傳に謂ふ、擭は是れ獸を捕ふるの機檻、陷阱これ一物、周禮の注に、地を穿つて阱を爲し、以て獸を禦ぐ、超踰すれば陷る、故に之を陷阱といふとあり」と。これ卽ち前の戒愼恐懷と照應するもの、決して輕々看過すべからず。辟は避と通ず、擇は衆物の中に於て、揀んで以て、その善優なる者を取るの稱なり。その之を擇ぶに方り、準を取るところの者は、卽ち舜が兩端を執るといひし者是なり。期は猶ほ待といふが如し、匝一月を以て期と爲すもの

は、之を期一年の者に比するに、甚だ短くして守り易きなり。守の字は卽ち下文の固執、卽ち至誠固成するところの本なり。

こゝに夫子の語を引きしは、衆人の自ら稱して知といふところの者、恃むに足らざるの甚しきを言ふに由て、更に重きを前章に歸せしめ、又衆人の擇ぶところの中庸なる者、動もすれば守を失し易きに道ひ及び、以て後章の端を發せむとするなり。今夫れ智は天下の神明より出づ、然れども人率ね之を知らざるが故に、己の私智を恃み、謂へらく、この身の爲に利便を謀る、智あり以て用ふるに足れり、と。その神明鑒臨の處に於て、復た忌憚すること無し。かくの如くして、天は必ず其材に因て之を厚うし、遂に驅て禍害不測の中に入らしむ。而して人の其間に處するや、復たその不可を察し、之を避くることを知らざるなり。是を以て、偶ま一二中庸に擇ぶを知ることありと雖も、之を要するに、自らその材能を喜び、人と賢を競ふの爲たるに過きず。故に、之に久くして自ら體慾に勝つこと能はず、その中庸に擇んで、善を人に取らむとする、笑ふべきのみ。その智にして又深からざれば、その初の擇ぶところ、譬へば獼猴の人爲に傚ふが如く、期月すら猶ほ且つ能はず、況んや堅く守て之を其德に成すことをや。下文言ふところ、顏子の業の如き、衆人に超ゆること固より萬々なりと謂ふべし。

全章の大意、己を舍てゝ人に取り、以てその中行を成し、一たび之を知るに及んでは、又固く執て之を守らむことを勸むるに在り。按ずるに、此は暗々の中、上文舜の問を好みし所以を明にするものなり。

## ◉第八章

**子曰。回之爲人也。擇乎中庸。得一善。則拳拳服膺。而弗失之矣。**

回は孔子の弟子、顏淵の名。一善は人の言行に就て、一善を得たるをいふ。一は微少の辭。微少なるもの猶ほ之を失はず、その極大の處を失はざること、自ら知るべし。拳は力、之を重ぬるは力行の貌。曲承强制して去らざるをいふ。服は詩の板に我言維服とあるものにして、躬行以て函るゝの稱。膺は胸なり、胸中自ら服行を作すの義、猶ほ物を持し之を手にすといふが如し。失はその之を行ふべきに失したるをいふ。これ前言期月不能守の旨と反應す。

これ夫子、顏回の人と爲りを論せし言に因て、中庸を守るの法を見はせしなり。顏

子は亞聖なり、故に常に其義の善なるものを中庸に擇び、苟も得るところあれば、區々一善と雖も、必ず奉持して、之を心胸の間に着け、能く之を守て失はず、遂に能く盛德を成就するに至る。一善固より微なり、然れども積て已まざれば、大を作すに足れり。その積んで又積むに至りては、廣大を爲し、天下の智算を以てするも量る能はざる者あらむとす。按ずるに、論語に曾子曰、以能問於不能、以多問於寡、有若無、實若虛、犯而不校、昔者吾友從事於斯矣、とあるは、或は顏子が中庸に擇ぶの行事を指せしなるべく、又同書に多聞闕疑、愼言其餘、則寡、尤、多見闕殆、愼行其餘、則寡、悔、とあるは、この一節の注脚に充つべきものにして、聖門修身の業、中庸の道を道破して、加ふる蔑き者といふべきに似たり。

## ◉第九章

**子曰、天下國家可均也、爵祿可辭也、白刃可蹈也、中庸不可能也。**

均は、元と造瓦の具、董仲舒曰く、泥之在均、惟甄者之所爲、と。故に我が欲する所に隨ふ義なれども、普通には更に一轉して、彼を視て此を等くするの稱となすべし。論語に有國有家者、不患寡而患不均、とあるは、分田制祿の均等、過不及なきを謂ひしなり。爵は、公侯伯子男、或は單に位と見るも可なり。祿は、その家世を蓄養するものをいふ。蹈は、足を以て往て之を其上に置くことなり。按ずるに、中庸は、前段に述べし舜の執りしところ、顏子の守りしところを兼ねて、之を稱せしもの、重ねて之を賞嘆し、こゝに以て一段の收束を爲さむとするなり。

天下國家を均うし、財賦の事を制するは、唯だ才者にして之を能くせむのみ。爵祿を辭するは、唯だ廉介の者にして之を能くせむのみ。白刃を踏むは唯だ勇者にして之を能くせむのみ。三者は天下の難事なり然れども其中自ら別つべき者あり。凡そ天下の人事、靜進退の三に出でず、故に此三者を以て之を言ふなり。天下を均くするは是れ靜、以て物を治むるの德。爵祿を辭するは是れ退、以て己を潔うするの德。白刃を蹈むは是れ進、以て難を避けざるの德、皆君子たるに闕くべからざる者なり。この三難事、猶ほ爲すべくして、中庸能くすべからざるものは、他の故あるに非ず。天下を均うし禮樂を用ひ、賞罰以て治むるは、要するに一時の爲、卽ち期月にして已むも可なるものなるに反して、中庸は後段にも云ふ如く、動かずして敬、言はずして信、賞せずして民勸め、怒らずして民鉄鉞より威なる者、要するに終身

の爲なればなり。一時の爲は難に似て、實は易、終身の爲は易に似て、實は難、故に不可能といひしなり。この段、中庸を輕視する者の爲に發し、上章擇守の義を承け、その失し易きを明かにし、以て學者の善行、或は唯だ驕矜に出づるを戒むるに意あり。而して白刃可蹈の一句、下節を起し、子路強を問ふに於て、尤も親切となす。

## ◉第十章

子路問強。子曰。南方之強與。北方之強與。抑而強與。寬柔以教。不報無道。南方之強也。君子居之。衽金革。死而不厭。北方之強也。而強者居之。故君子和而不流。強哉矯。中立而不倚。強哉矯。國有道。不變塞焉。強哉矯。國無道。至死不變。強哉矯。

子路は、孔子の弟子仲由の字なり。性勇を好む、故にこゝに強を問ひしなり。南方・北方・魯は南陲に非ず、また北邊に非ず、これその指示の別ち易きところに就いて、汎言せしなり。抑は前の語を更めて、別に指定するところあるの辭。而は、その遡きに在るところを指定するの辭、故に亦た用ひて爾汝の義と爲す。これは南北の中間に在り、孔子子路の居るところにして、時に當さに用ふべき強をいふなり。南方の強、北方の強、蓋し古しへ必ずこの語あるなり。而は、強として別言する處あるは、子路に誨ゆるの辭なり。寬柔は、體貌するところ無きの稱。教は道を喩して以て之を待つなり。君子の躬行、之を國人に教ふるを以て以て其志となす。故に以教といふなり。朱註、寬柔以教を解し、含容巽順、以て人の及ばざるを誨ゆといひしは、頗る簡切なり。報は、物の至るに因て以て之を効すなり。衽は周禮天官、席となし、離騷衣となす、皆通ず。金は、戈兵の屬、革は、甲冑の屬、言ふは戰死すと雖も、厭はざるなり。流は、行に從て遷るの稱。矯、朱註に強の貌、詩に矯矯虎臣といふもの是なりといへり。按ずるに、矯は漢書に復古化之といひ、字書に正曲とあり、矯揉の矯と同義、蓋し直者をして曲ならしむるを揉といひ、曲者をして直ならしむるを矯といふなり。故に矯は、正直にして枉曲の爲に亂されざるを期するの意、卽ち發強剛毅の態、詩に虎臣の態となすは、卽ち此故のみ。矯哉強は、その矯に見ることありて、其強を擧ぐるなり。立は自ら率ゆるの義。倚は久しく立つ能はずして、その邊側に依傍するの稱。塞は通の反、易の象傳に不出戸庭知通塞とあり、蓋し物、我が路に充遏するの稱。鄭、玄の注、或爲色といひしは、簡なれども來歷の確たる者無ければ取るに足らず。變は體渝て物存するの稱なり。

強も亦た勇なり。知は是れ學問の資、仁は是れ力行の資、勇は是れ仁の輔。中庸を守る、強に非ざれば不可なり。故に舜の大知、顏回の力行に次で、君子の強を論じ、以て學者を勉めしめむとす。子路勇を好む、故に今強を問へり。孔子乃ち、強の三者を擧げ、その孰れなるかを問ひ、更に下段の數語を發せしなり。君子の人に接するや、專ら寬柔を以てし、小人加ふるに無道を以てするも、毫も相校せず、仍ほ之を待つに禮義を以てす。南方の地、風氣柔弱、故に含忍の力、人に勝つを以て強と爲し、之を呼んで君子と爲すなり。寬柔固より美德と雖も、此に止まり、剛毅を以て之を濟せざれば、偏して全からず、無道我を遇する人に對して、古しへ直を以て怒に報ずるの道あり、今や之に報せずして、その恥辱を忍咽し、父祖を染汙するを思はず、豈に聖門の取るところならむや。若し夫れ、甲を被り戈を揚げて相擊ち、因て金革に衽し、死して厭はざるもの、北方の强に非ずや。そも北方の地、風氣剛强、戎狄に近く、士多く勇を尙ぶ、故に古來强を稱するもの、北方を以て貴と爲す。然れども、時に無道の甚しきものあるを免れず、こゝに按ずるに、君子居之の上には、而の字なく、强者居之の上には而の字あり、前に北方と南方と而强とを列記せしと雖も、子路の强は實に北方の强に包括さるべきものにして、一字を下して、その意を暗示せしなり。

文法の簡にして精なる、此の如きものあり。且つ夫れ子路の惡、北鄙殺伐の聲あり、しこと、家語を見て併證すべく、その初、雄雞を冠し、豨豚を佩び、孔子を陵暴せしこと、史記列傳に見えたり。南北二方の强、かくの如く異なりと雖も、ともに一方に偏せしものにして、取るに足らず、聖門期するところは、實に君子の强者に在り。和、神人の如く、賢愚を擇ぶべく、物と好會して喜樂す。然れども、彼の爲に己が守るところを奪はれず、これ南方二方の强を兼ねしものに非ずや。次に君子の百行、皆中德の在るところに由り、卓然自立して他の爲に動かされず、これ亦た南北兩用して、强の强を爲す者に非ずや。前に執兩端用其中於民といひしも、亦た此に外ならず。次に國に道あり、當さに仕ふべしと雖も、或は塞に遇ふて通ずるを得ざるとき、君子之が爲にその言行を改めず。次に又、國に道なく、已れ或は他の忌むところとなり、害に陷り死に至ると雖も、之が爲に、その言行を變せず。この二者は、前に出でたる中立而不倚の實例を見るべきものにして、前者は孟子の達而不離道、兼善天下にして、後者は窮不失義、獨善其身に外ならず、ともに矯々たる君子强者の事なり。凡そ、中庸を守らむと欲するものは、務めて外慕外情を廢すべく、かくて能く其內を成すを待たむのみ、此に不流といひ、中立といひ、不倚といひ、不變といふもの、畢

竟中正の行をいふものと見るべし。中庸の能くすべからざるや、獨り人欲の私に勝つが故のみならず、擇で守る能はざるに由るなり。之を成するものあらば、君子の强、他にその比を見ざる者となさむのみ。孔子之を子路に告ぐる所以のものは、その血氣の剛を抑へ、之に進むるに德義の勇を以てせむとしたるなり。その意頗る親切を極む。

知仁勇の三者は、聖門に入るの達德なり。故に篇首に於て先づ之を揭げんと欲し、大舜、顏回、子路の事を以て之を明にしたること、前の如し。舜は知なり、顏淵は仁なり、子路は勇なり。三者その一を廢せば、以て道に造り德を爲すこと能はず。子思、此書を作るの微旨、こゝに於てか見るべく、而かも共に中庸に命せし名なることを忘るべからず。程子が始めに一理をいひ、中ごろ散じて萬事となるといひしは、端的之を指せしもの、文義絕えて散漫ならず、たとへば、枝幹紛出、その本づくところ、同一根株に在るが如し。

## ◉第十一章

子曰。素隱行怪。後世有述焉。吾弗爲之矣。君子遵道而行。半塗而廢。吾弗能已矣。君子依乎中庸。遯世不見知而不悔。唯聖者能之。

素は傃と通ず、一に𦍒に作る。漢書藝文志に曰く、索隱行怪と、蓋し此に本づく。然れども、素は亦た質、外采に入るの義あり、素白の素、繪畫の質をいふが如し。古しへ多く繪事を以て喩となす。禮記に白受采といひ、論語に繪事後素といふ如き是なり。繪畫の設布あり、帛あり、一ならずと雖も、その質二ならず。猶ほ人の分るゝところ、富貴貧賤、必ず二なきが如し。繪の彩色、青黃黑赤の別あり、又間色雜彩の設ありて一ならず。人の行、孝弟忠信、怪行奇僻の差あり、又貴賤貧富、夷狄患難の別ありて、同じからず。恰恰相類するが如し。故に素は行と倣すべく、鄭玄が讀爲攻といひしも、頗る相似たり。前の如き假借を爲さゞるも、義自ら通ずべきなり。隱は、物阻して深きなり。怪はその物象を視、之を待つに變更を以てするなり。列子に記するところ、西極の國、化人あり、來りて水火に入り、金石を貫き、山川を反へし、城邑を移すの類、その他、人の常に聞見せざるところ、百方同じからずと雖も、皆是れなり。この四字を釋して「深く隱僻の理を求め、過ぎて詭異の行を爲す」といへる、朱子の言、亦た可なり。述は述作の述、後世必ず其說を推廣して、以て之を傳ふるあらむをいふなり。

## 第十一章

蓋し孔子の時、黄老の學、既に其漸あり、故に爾か云ひしならむのみ。遵は、身を以て其路東西の向ふところに任せ、以て從行するの稱なり。途は、此より彼に造たるとき、由るところなり。廢は、彼の體逮ばずして極むるなり。史記に荆軻廢といひ、春申君死而荀卿廢とあるが如く、全く無用となるの意。鄭、玄が猶能止といひしは、頗る中れり。故に半途而廢は、中道而罷に比して、辭氣迥かに異なる者あり。君子の中庸に依るや、力足らざれば、中道にして罷む。然れども終に道を離れず。素隱行怪の屬は、是に異なり、その初、道を聞くと雖も半途にして廢す、終に道と相背くなり。依は其所に從て、毫も離違せざるをいふ。遯は人の至るところを避けて、獨り以て處るなり。悔は、來る所あらむとするが爲に、往日の妄爲を追念するなり。聖者は、天德に達し、天命を致し、能く之を行ふものなり。

これより以下の數章、前に掲げし、舜問を好む以下の數章と接應を爲さむとする者にして、兼ねて天人合一の旨に及び、聖人に非ざれば、到底至る能はざるを辨證せむとす。今、下文の爲に地を作らむとして、先づ少しく之を言ひ、合せて前に謂ふところ、小人期月守る能はざるの由るところを論せむとするなり。隱を素するものは、修習するに隱昧不測の事を以てし、神異玄妙を語ることあり。怪を行ふものは、世に示すに非常俗を驚すの迹を以てし、時に倫を毀り身を捨つるのことを爲す。蓋し彼れ民を視て、至愚無智の者となし、己獨り見るところを出して、之を欺罔せむと欲す。然れども、世を瞞し名を盜むに足るの跡あるを以て、後世或は之を稱述するものあり。要するに知の過ぎたるものにして、善に擇ばず、行の過ぎたるものにして、其中を用ひず、當さに强なるべからずして强なる者、聖人は斷じて爲さず。東坡の荀卿論に、夫子以爲後世必有不足行其說者矣、必有竊其說而爲不義者矣、是故其言平易正直而不敢爲非常可喜之論、要在於不可易也といひしは、蓋し此より脫化せしものにして、兼ねて注脚に充つべきに似たり。君子は則ち然らず、唯だ天を畏れ、天を敬するを以て本と爲なし、天下衆庶と、その由るところを同うせむと欲す、故に敢て放言高論せず、唯だ邇言を察するを爲す、至誠息むことなし、故に自ら止む能はず。たとひ之を如何にするも、本と行ふところを捨てざるなり。君子の百行、すでに中庸を以て主となす、世に知られず、或はまた嗤ふ者ありと雖も、初より求むるあるが爲に之を行はざるが故に、決して悔念する所あらず。これ知、天道に明かなる者に非ざれば、能はざる所以なり。中庸を行ふて世を遯るゝ者、古今を歷觀するに、其人極めて少し。吳の泰伯、民得て稱するなしといへる、或は是か。易

に龍德而隱といひ、その文言に遯世无悶といひ、論語微子篇に列するところ、亦た是なり。今夫れ、世を遯れ以て身を全うし、父母の心を安んじ、祖先の後を絶たざるは、孝道にして、時に止む能はざるなり。秦漢以來、治日恒に少く、亂世必ず多し、故に隱遯は一道たり、萬代の長久を經て、廣孝人を救ふ、奚ぞ翅だ、一戎衣の功のみならむ。然らば、聖の名を與ふる、何ぞ過稱と爲さむ。歷代の史、隱逸を傳ふるもの、亦た其故なしと爲さず。この章は、中庸を守るの至れるを明にしたる者なり。

## ◉第十二章

君子之道。費而隱。夫婦之愚。可以與知焉。及其至也。雖聖人。亦有所不知焉。夫婦之不肖。可以能行焉。及其至也。雖聖人亦有所不能焉。

君子は、本と德の君子たるに足るものをいふ。故に但だその道象を立て、以て之を稱するなり。君子之道は、卽ち亦た君子の德象、以て遵ひ行ふの道、藏めて詩三百篇の文中に在るもの是なり。これ乃ち其德全く君子たるに足る人の心中に行はる、を拈出して之を謂ふのみ。費は說文に散財用也とあるより見れば道の廣きをいふ。隱は闇闇然たれども日に章なるの意、夫婦は匹夫匹婦といふが如し。夫婦の間は、卽ち中庸の立つところ、今、君子の道端を夫婦に造すことを言はむと欲するが故に、此言を爲す。愚は其知を以て言ひ、不肖は其行を以て言ふこと、前に述べたる如し。

君子の道、平正從容、知り易く、行ひ易く、萬古不易の常道なり。處として在らざるはなく、時として然らざるはなし、而して本と名稱の言ふべきなく、形迹の尋ぬべきなく、民生日に用ひて自ら之を知らず。然れども固より人に遠からず。愚夫婦と雖も、一たび性に率へば至らざること無く、容易に與り知るべく、且つ時に、能く之を行ふべし。世間に孝子友弟義奴節婦、その鄉閭に旌せらるゝ者あるは、卽ち是なり。而して其道たるや、天地に橫溢し、萬物に普周し、行はれざるところ無く、其至るや聖人と雖も、亦た知らざるところあり、獨り之を知るといはず、之を行ふに於ても、亦た同じ。天地運化して百物生成する如き、亦た其中に與り存す。聖人の上に在るや、乃ち之に從ひ、博く施して衆を濟ひ、己を修めて以て百姓を安んず。至誠一片、なほ病むところあり。今夫れ殷周の天下を御する、豈に萬年の治平を欲せざらむや、然り而して百年を待たずして綱を解き、五七百年に過ぎずして亡びしもの、聖人

なほ其及ばざりしを嗟するを見るべし。

**天地之大也。人猶有所憾。故君子語大。天下莫能載焉。語小。天下莫能破焉。詩云。鳶飛戾天。魚躍于淵。言其上下察也。**

天は蒼然として上に在るものを稱す、故に地に隨て分稱すべく、吳天楚天と云ふが如き是なり。かの渾圓地を包む者を汎稱して言を爲すも亦此意なり。君子、こゝに猶ほ「於君子之道」の如く、略拆して言ふなり。憾は物の至る、吾が期限するところに盈たざるをいふなり。語は說と同じ。天下は普天の下。破は體物の抵觸を受けて折裂するをいふ。詩は、大雅旱麓の篇、鳶は鴟の類、戾は至、その奥を極むるの稱。察は著體思して之を深くするなり。

仰ぎ瞻るを天と爲し、俯して據るを地となす、人の想像するところ、時に或は俯仰の外に溢れむとす。故を以て、覆載生成の偏及び寒暑災祥の其正を得ざるもの、或は又貧富貴賤、吉凶壽夭、寔に命同じからざる如き、人の常に憾むところなり。今夫れ、君子の道は、乃ち人事の極にして、其道は、實に天地の間、神物の情に本づき、事情、人心に託在するが爲に生ず。夫れ心は道の存するところ、廣大無邊、譬ふるに辭なし。故に之が大の極を言へば、天地の大と雖も能く載する莫き者ありて其中に存し、之が小の極を言へば、精微すでに窮まり、復た分割を受くるなく、遂に破り難し。一言すれば往くとして在らざる無きなり。此の如くして、俯仰見るところの外、及び俯仰の見るに及ばざるもの、併せて道に在り、之を要するに、其旨一致に歸す。程子が之を放てば六合に彌し、之を卷けば密に退藏すといひしも、亦た此意而して之を知るは、實に學問思辨の力にあること、今復た贅せず。引くところの詩意、斷章取義、略ぼ下の如くなるべし。曰く、仰いで鳶の戾るところを見れば、天の高明以て知るべく、俯して魚の躍るところを見れば、地の博厚以て知るべし、と。かくの如くして、人に勸むるに、上下昭著、盡さざる無かるべきを以てし、舜の邇言を侮らず、由て以て天地の至情存するところを察せしに傲はしめむとす。夫子大廟に入つて事ごとに問ひ、又吾は老農に如かず、老圃に如かずと云ひし如き、身之を行ひしを知るに足るべし。程子曰く、この節、子思喫緊人たるの處、活潑潑地、讀者それ思を致せ、と。信に然り。

**君子之道。造端乎夫婦。及其至也。察乎天地。**

造は作、建なり。始之なり。端は事の本始、物我に當るの首始を謂ふなり。

この四句は、前の數節の旨を總べ、君子の道用察の獲るところに外ならざるを叙

す。獨り其れ一章の收束たるのみならず、この書一篇の大旨、中庸天人を通ずるの道たるを統言せるなり。蓋し君子の道は、人心に本づき、その內部の奧底を窺ひ見れば、性と命とあり、その相求むるを以て、情と爲す。小人に在りては、男女好色の情となり、その外に一歩を進むるとき、倫理交際相親愛するの道となる。而してその相親愛するの道、最も知り易きものは、夫婦に若くは無し。故に詩三百篇は、士たるもの、君子德性を學ぶの第一敎科にして、その書の排置、實に君子淑女を求むるを以て其始と爲し、以て性命の情を喩す。これ、端を夫婦に起せし者にあらずや。而して雅頌言ふところ、文王在上といひ、天維顯思といひ、允猶翕阿といふ如きは、卽ち天地に察するものなり。凡そ、孔門の君子を言ふものは、皆詩に本づきて、之を述べしに外ならず。そも道は入り易く、行ひ易く、高に過き且つ求め難きの事あるに非ずと雖も、其極に至るに及では、天地の間に著察して、粲然明白之を掩蔽せむと欲すと雖も、遂に得べからざるなり。

この一章、子思の言、首章「道離るべからず」といひし旨意を申明し、人道の至極するところ、遂に天道に達するを述ぶ、理義頗る深遠、その下八章、また孔子の言を雜引し、以て重ねて之を明にすること、前の如し。

## ◉第十三章

子曰。道不遠人。人之爲道而遠人。不可以爲道。詩云。伐柯伐柯。其則不遠。執柯以伐柯。睨而視之。猶以爲遠。故君子以人治人。改而止。

遠は邇の反、兩個の爲の字、猶ほ謂と云ふが如し。詩は豳風伐柯の篇、柯は斧柄、重ねて伐柯といふものは、其上を虛と爲し、其下を實と爲す、蓋し柯を伐るを事とするに方て、今復た柯を伐るなり。柯を伐るものゝ、傚うて、その長短の法を取るところの者を則といふ。睨は邪視、人の字は己と對す、改は新に從て作るの稱、この遠の字は亦た卽ち爲道而遠人の遠。

前章、道の天地と合ふを以て言をなせり。故に、學者の或は過高に馳せむことを恐れ、更に此言を舉げ、豫め其弊を防がむとす。夫れ道は端を夫婦に起す、故に決して人に遠からず、然り而して、その人に遠きものは、素隱行怪の類を以て道となす者にして、奇怪の敎、高遠の說、自ら惑へるのみ。その爲すところ、以て道と爲すべからざるなり。於陵陳仲子の如き、恰も此種の人。仲尼の時、此等の人なかりしと雖も、其

世後るゝや、乃ち此等の人を生ず。聖心の優れたるや、百世と雖も知るべきのみ。三桓の子孫微なれば、孟子、乃ち益成括の死を知る。聖賢に在りて、常事のみ。未だ奇とするに足らず。故に說くところ、百世の後に至りて、なほ世と相遠はず、一に人の情に本づいて、道德の制を立つ。伐柯の詩は、恰も之が爲に作りし如き者あるを以て、こゝに引抄し、且つ解說す。詩意乃ち曰く、人すでに手中に斧柯を執る、その則を取るは、直に切近の處に在るべし。故に睨してその初伐の柯に視るも、猶ほ迂遠たるを免れず、と。君子の人を治むるや、其人を以て其人を治むるのみ。其人の知るに及ぶべきところを以て、その知るところに責め、其人の能く行ふべきところを以て、その行ふところに責む。其法人に在りて我に在らざる所以、豈に彼此遠近の言ふべきあらむや。君子の道を修むる、己に在りて太だ嚴、人に在りては特に寬、人にして改め且つ新にすれば、亦た言はず、更に加ふる所なきなり。改は卽ち新に就くの謂、新に就くは、卽ち大學日新の意のみ。此章は、道の本づくところ人に在り、必ずしも他に求めず、直に之を推して天下に達すべきを明かにしたるなり。又按ずるに、前に、道人に遠からずといひしは、固より人に遠ざかるを欲せざるが故のみ、作者之を言ふの旨、學を廢し直に己の情を以て物宜を圖るを專要となす所以に非ず、恐るゝところは、學者徒に學に泥んで、其義の活用すべきを知らず、學も亦た竟に無益に歸せむかに在り、故にこゝに活用の法を示せしのみ。

**忠恕違道不遠。施諸己而不願。亦勿施於人。**

忠は、人に與ふるにその中實を以てし彼を視ること猶ほ自ら己を視るが如くするの名なり。恕は己の情に準じ、以て之を彼の情に致すなり。違は去なり、適すべきところに乖謬するをいふ。左傳に違穀七里とあるが如し。道は前に數ば擧げし君子之道。施は物を其上に致着するの稱。願は心に念ふて其象を欲するなり。亦の上、假りに己の字を添ふれば、意義愈よ彰著ならむ。

忠恕の道たるや、人を視ること己が身の如くし、己の情以て之を人に度るにあり。即ち知る、己の情と其人の情と、是を兩端となし、己の情の安んずる所に據りて、以て之を人に施す者にして、亦た實に其中を用ふる者なるを。すでに、忠恕といふ、中庸を離れず。その行、偶ま道に背馳することありと雖も、相遠からざるなり。論語に、忠恕而已矣といへるも、亦た此意。之を己に施して、願はしからざるとき、己も亦た之を人に施さゞるは、忠恕の方なり。蓋し彼我を以て情を易へざれば、道斯に自ら行はれむのみ。張子、「己を愛するの心を以て、人を愛せば、仁を盡す」といひしもの此

段の意を盡したりと謂ふべし。

君子之道四。丘未能一焉。所求乎子。以事父。未能也。所求乎臣。以事君。未能也。所求乎弟。以事兄。未能也。所求乎朋友。先施之。未能也。庸德之行。庸言之謹。有所不足。不敢不勉。有餘不敢盡。言顧行。行顧言。君子胡不慥慥爾。

求は猶ほ責の如し。未は斷を後日に俟つの辭。故に未能といひしは、即時を語るに非ず、後日を量度し、縱ひ之あらしむるも、その求むところを充さずといふなり。この四事、蓋し實に有りしことに非ず、假りに設けて以て、人に敎へ、人に令し、規矩を其心に設けしめむとするのみ。按ずるに、孔子少にして孤、子あるの後父に事ふるに遽ばず。その兄ありしは、論語に見えたるも、その弟ありしは未だ聞かざるところなり。その臣なかりしは、子路に答ふるの言に見るべく、魯に仕へて相たりしとき、必ず之ありしならむと雖も、明文の徵すべきものあらず。獨り朋友は、鄉黨篇の徵すべきあるのみ。故に此四者は斷じて、假設と爲すべきなり。庸は中庸の庸、謹は準繩以て緣り、敢て之を過ごさゞるなり。二句對偶、又下を以て上を推すべし。勉は之を身に致して違はざるなり。慥慥は實を守り、言行相應ずるの貌。

君子の道は、乃ち詩三百敎ふるところの道、父或は子に過求し、その力を竭し己に事へむことを以てす、これその庸言を用ふること、其子に過ぎ易くして、身父に事ふる或は足らざることあるなり。君臣兄弟、皆この過求の者多し、夫子務めてその僞過なからしめむを欲し、自ら能はざるを謙するなり。君と臣、父と子、兄と弟、己と朋友、これ兩端のもの、以て事へ、以て施すは、概して是れ忠恕、宜しく中を其際に用ふべきなり。荀子に君子有三恕、有君不能事、有臣而求其使、非恕也、有親不能報、有子而求其孝、非恕也、有兄不能敬、有弟而求其聽命、非恕也、士明於此三恕、則可以端身矣といひしは、こゝより出でしものたるを疑はず。すでに忠恕を用ふ、宜しく言行相副ふを以て之を成すべく、その恒あるや、始めて以て己の德となすを得べし。これを以て、以下更に言行相顧るの事をいはむとす。そも兩端といへば、常に己を以てその一端と爲す、故に先づ、己が身の位分その宜しきところを定めて、其事に從はざれば、その事皆虛妄無實に歸せむ。足らざる所あり、敢て勉めずむばあらず。是れ行言を顧るの謂にして、庸德の行なり。餘あるも、敢て盡さず、是れ言行を顧るの謂にして、庸言の强なり。按ずるに、庸德は君父に事へ、及び先づ之を施すことにして、庸言は臣子弟友に求むることなり。君子唯だ其道に違はむことを恐れ、言行苟もせず、

これを以て戒慎恐懼、日に慥慥爾たらざること無きなり。凡そ學者、道に志ざすと雖も、苟くも忠恕の力を藉らざれば、一歩も進退する能はず、忠恕の用、大なりといふべく、居然人に遠からざるを以て道となすを知るべし。張子が「人を責むる心を以て、己を責むれば道を盡す」といひしは、卽ち是なり。

## ◉第十四章

君子素其位而行。不願乎其外。

素は儀、鄭玄は嚮といひ、朱註は猶見在也といへり。絲帛未だ采染を受けざるの前を素といふ。故にその固有の處に居て、其命を受けむと欲するの義。位は富貴貧賤等、皆之を汎稱す。

前章、言行相顧むべきを言ひしが、そは必ず其外を顧みざるか爲に出づるを以て先づこの一節を置き、以下二節、君子の求むるところ、小人と同じからざるを明かにす。君子はその居るところの位を以て分となし、其命を受け、絶えて其外を願ふこと無し。今一々例を擧げて、之を證せむ。富貴を素するは、舜の天子たる如き是なり、袗衣を被り、琴を鼓す、他に種々の貴行ありと雖も、皆その素地とするところ、天子の位を越えず。貧賤を素するは、顏回の祿位を得ざる如き是なり、その爲すところ、陋巷に居り、簞食瓢飲、ともに貧賤の行ふところに出でず。夷狄を素するは、古公亶父の狄地に居る如き是なり、その行ふところ、其陶に隨ひ、陶穴に復し、未だ家室あらず、一たび西水の滸に率ひ、岐下に至るに及び、その土風の宇あるに胥ひ、初めて宇あり、亦た國俗に從ふのみ。患難に素するは、三仁殷紂の下に居る如き是なり、微子之を去り、箕子之が奴となり、比干諫めて死す、常人の堪へ難きところなりと雖も、三仁に在りては、自ら足れりとする所なり。かくの如くして、自ら素するものは、その己に在るものを得て、他に求むるの意なし。君子の道、至れるかな。

素富貴。行乎富貴。素貧賤。行乎貧賤。素夷狄。行乎夷狄。素患難。行乎患難。君子無入而不自得焉。在上位。不陵下。在下位。不援上。正己而不求於人。則無怨。上不怨天。下不尤人。故君子居易以俟命。小人行險以徼幸。子曰。射有似乎君子。失諸正鵠。反求諸其身。

自得は、自ら以て其所を得たると爲すなり。陵は、冒掩して、之を下にするの稱。援は、要して之を引致し、牽持するなり。正は、面すべきところに側せざるなり。求は、之を

希ふて討むるの稱なり。求於人は、前に謂ふところ、子臣に求むるもの是なり。尤は、之を謂ふて異常となすなり。怨は、屈受に遇ふて生するなり。徼は其至るところを遂へ要するなり。幸は、意はずして慶を得るの稱。正鵠、詩の齊風に、終日射侯、不出正兮とあり。布に畫くを正といひ、皮に棲ますを鵠といふ、皆侯の中、射の的なり。

君子、言は行を顧み、行は言を顧み、その發するところ、敢て踰越せず、善く其正を淑慎す。富貴貧賤、夷狄患難は其目にして、その例、すでに前に擧げたる如く、入るとして其所を得ざるなし。易の大傳に樂天知命とあるは、即ち是なり。上位に在て下を陵がず、理を枉げて己に屈從せしむることなきなり。下位に在て上を援かず、蚤緣迎合することなきなり。かくの如くして、自ら其行を整へ、以て位分の宜しきに當るを得。すでに自ら安んじ、自ら足れりと爲す、故に人の己を譽め己を利せむこと求めず、縱ひ之なきも秋毫以て怨と爲さず。遇と不遇と、ともに天命にして奈何ともし難きを知るを以ての故に、不遇と雖も、上、天を怨みず、下、人を尤めず。孟子に人之所以異於禽獸者幾希、民去之、君子存之、君子之學、所以存之也、存之所以事天也とあるは、正に之を指すものなり。蓋し君子の道、人を以て己に期し、己を以て人に期せず、而して人の己に期するものは、位より先なるは無し、故に位を素して以て基を立て、善を擇び以て命に順ふ。易に易簡而天下之理得之といふもの、亦た是のみ。行ふが如し。小人は、天あるを知らず、人巧以て富貴安康を致すべしと謂ふが故に、敢て險危の事を行ひ、以て毋妄の天幸を求む。その事、全く相反す。君子善を擇んで、以て命に順ふ、必ず天祐を受くべし。而かも、その受くる能はざるものは、或は之を不順に失せし行爲あるに因らずむばあらず。故に、こゝに重ねて喩すに、射の道を以てせり。射を爲すもの、若し中らざれば、姿勢態度、正しからざるの致すところと爲し、これを其身に求む。孟子に、愛人不親反其仁、治人不治反其智、禮人不答反其敬、行有不得者皆反求諸己、其身正而天下歸之、詩云、永言配命、自求多福とあるものは、即ち此意にして、專ら上に在るもの、爲に發せしなり。次に士窮不失義、達不離道、故民不失望焉、古之人得志、澤加於民、不得志、修身見於世、窮則獨善其身、達則兼善天下とあるも、亦た之に同じく、特に下に在るもの、爲に發せしなり。孔子正鵠の喩、上下に達す、而かも孟子、兩次の說、發揮甚だ詳なりといふべし。

以上子思の言、全章の意は、論語の不怨天、不尤人、下學而上達、知我者其天乎と同じく要するに、中庸の極致なり。

## ◉第十五章

君子之道。辟如行遠必自邇。辟如登高必自卑。詩曰。妻子好合。如鼓琴瑟。兄弟既翕。和樂且耽。宜爾室家。樂爾妻帑。子曰。父母其順乎。

君子之道は、中庸の行なり。辟は譬と同じ。自は從なり。詩は小雅。棠棣の篇。鼓は人力發聲の統名。瑟琴の解は禮記の注疏に見ゆ。瑟琴其形稍異にして、其音應ずるの義に取る。順は逆の反。逆は平常と反して心に悅ばざるの意なるが故に、順は悅の義に外ならず。翕は合聚を謂ふ。耽は、その同宴するところに厭かざるの意、湛と同じく、樂の甚しきなり。室家は家人、帑は子孫なり。

上文、君子の命を俟ち、小人の徼幸するを並言す。但し其情たるや、俱に同じきを以て、其道或は相類する者あるの嫌なき能はず。故に此に詩三百の敎示するところ、君子の道は迥かに異にして、小人乖戾の比にあらざるを明かにするなり。道の人に行るゝは、邇より遠に行くが如く、命を天に受くるは、高に登るが如し。卑邇は素位の庸行、故にその身をして遠に行き、高に登らしめむとするもの、必ずこの卑邇よりせざるべからず。君子の道、小を積て大となし、序に循て進む。卑邇は德の本始、高遠は德の極致。衆人は本始に止り、君子は極致に期す。若し夫れ、人倫を外にして、別に高妙を說くものあらば、斷じて異端の學、聖人の道に非ざるべきなり。その次に詩を引くものは、蓋し言ふ、汝宜しく室家翕合を成すの方を圖るべきなり、と。今夫れ、妻子兄弟は、己が身に親邇なるものなり、故に人は、唯だ當にその中行を執て、和順をこの親邇の間に求むべきなり。而して之を爲すには、先づ父母を敬し、その己に求むるの心を體すべし。その心、兄弟妻子に行はるれば、怨咎生せず、是に於てか、夫子の言、如上の詩に就いて、其道の然るべきところを推廣したるに取る。凡そ古人詩を學ぶの法、每篇必ず之をその前篇の意に本づいて、次第に承比し、以て其義を成す。その之を命じて詩といひしは、一に承比の義あるに由り、その稱して三百篇といふものは、重ずるところ、編列排置の間に在るなり。この棠棣の一篇の如き、之を其前の皇皇者華の篇に承け、皇皇者華は、更に之を其前の四牡の篇に承く。而して四牡の篇に、將父將母の句あり、是を以て夫子前段の義を推發したるなり。凡そ詩經載するところ、二南より魯頌に至るまで、その編列の義、並に是法を以て推すとき、善く原始の意義を領會するを得むのみ。朱子、父母其順

乎を解し、「人能く妻子に和し、兄弟に宜しきこと、此の如くなれば、父母其れ之を安樂せむ」といへり。これ因を父母に推すに非ずして、果を父母に歸せしめむとせしなり。頗る前と合はず、或は又、父母尚ほ在るとき、子は其家及び帑あるを得ずといひ、父母を以て已死の考妣と爲すものあり、これ或は然るならむと雖も、議論旁徑に入りしものにして、必ずしも深く穿鑿するを要せざるなり。而して全章の意は、孟子に堯舜之道孝弟而已矣とあるもの、即ち是のみ。

## ◉第十六章

子曰。鬼神之爲德。其盛矣。視之而弗見。聽之而弗聞。體物而不可遺。使天下之人齊明盛服以承祭祀。洋洋乎如在其上。如在其左右。詩曰。神之格思。不可度思。矧可射思。夫微之顯。誠之不可揜。如此夫。

鬼の言たるや、歸なり。神の言たるや、信なり。夫れ信舒なる者は、必ず歸屈し、歸屈なるものは必ず信舒す、屈信相感ずるもの、これ和なり。和は萬物の成るところ、故に神は萬物の生ずるところ、易の說卦に曰く、帝出乎震、齊乎巽、相見乎離、致役乎坤、說言乎兌、戰乎乾、勞乎坎、成言乎艮、と。帝は即ち神なり、故に其下に曰く、神也者妙萬物而爲言者也、と。これ神の名目、その萬物に妙なるところよりして生ずるなり。程子「鬼神は天地の功用にして造化の迹なり」といひ、張子「鬼神は二氣なり」といひ、朱子「二氣を以て言へば、鬼は陰の靈なり、神は陽の靈なり、一氣を以て言へば、至て伸ぶるものを神となし、反て歸するものを鬼となす、其實一物なり」といひ、各自の言說、高遠を競ふと雖も、要するに余が前言の外に在らず。一言以て之を掩へば、幽渺不測、宇宙の元氣のみ。盛は物充盈して器に隆なるをいふ。體物は萬物を以て、其體とするところと爲し、相離れざるなり。可の字、こゝにて所と同じ。齊は齋と同じく、明は猶ほ潔といふが如し。易繫辭傳の注に洗心曰齋明とあり。盛服は、その衣裳、盛禮の服するところを服するをいふ。承は奉。洋洋は大の貌、兼ねて流動充滿の意あり。詩は大雅抑の篇。格は來、更に詳言すれば、物の相抵觸して感動することを是なり。度の音鐸、心能く制する義。また心能く之が抵至すべきの度を量るを度といふ。射は夷益の切、舊說以て厭斁の義となす、然れども大雅思齊の篇に、無射亦保といひ、古之人無斁とあるを見れば、射斁の二字特用、射は斁の義に非ざること、明かなり。又按ずるに、射も亦た自ら其當を指して取るの義あり、九月の律、無射と名づくるが

如き、亦た其次更に應鐘の律、九數の外に溢れ出づるを以ての故に、其當を指して、取るべき無きの義となせるなり。こゝに謂ふところの無射、此義に從ふを是と爲すべきなり。「思」は聲の助、亦た之を思ふこと此の如くならしむるの意ありとするも妨けず。「誠」の字、下文多く、誠を言ふが爲に、原を伏す。

すでに總說中に述べしが如く、この章以下、本と中庸の本文に非ず、或は是れ他書の脫簡、今考ふべからず。こゝに舊說を捃摭し、解說を爲すこと、略ぼ下の如し。父母の心は原と鬼神の心なり、故に此に其本を推究して之を言ひ、總べてその全體を明かにし、兼て前に云ふところ、莫顯乎微の義と相繳應するを爲す、魚は水中に在て水を見ること能はず、人は氣中に在て氣を見ること能はず、此義を以て之を推すに、之を視れども見えず、之を聽けども聞えざるもの、豈に其德たる盛なるを以ての故に非ずや。鬼神は天地を以て其體と爲す、凡そ其間一切有するところの物、皆その體に非ざるは無し。生長收藏、道に非ざるは莫く、雪霜風雨、敎に非ざるは莫きなり。故に之を物より遺去除棄すること能はず。天下の人、各その祭るべきところを祭り、洗心體服、以て之に奉せしむれば、鬼神は洋々乎として、東西南北、及び衆寡內外の隔制なく、之を思へば其上に在るが如く、その左右に在るが如し。こゝに上下と左右とをいふ、內外或は限あるに嫌あり、故に更に詩を引て、その隱微の中、來格度るべからざるの義を明にせむとす。物の格ると未だ格らざると、すでに度るべからず、矧んや、之を射て取るべき物と謂ふを得むや。鬼神すでに、上下內外左右四方に充溢して、在らざる所なく、微機動くところ、其れ已に傍にあるなり。君子の心は、所謂微より顯なるは莫くして誠なるもの、故に鬼神の發見、掩ふべからず。こゝに於てか、愈よ恐懼修省し、以て德に入る。その至るに及んでや、又見えずして彰はれ、動かずして變じ、爲すなくして成る。至誠神の如しといふもの、即ち是なり。强いて解せば、首章愼獨の義を擴充し、始めて誠を言ひ、次章聖人の德、必ず其本を起すもの。古しへの注家、之を知らず、專ら陰陽合散の理をいふものと爲すに至りては、謬更に甚しと謂ふべし。

## ◉第十七章

子曰。舜其大孝也與。德爲聖人。尊爲天子。富有四海之內。宗廟饗之。子孫保之。故大德必得其位。必得其祿。必得其名。必得其壽。故天之生物。必因其材而篤焉。故栽者培之傾者覆。

之詩曰。嘉樂君子。憲憲令德。宜民宜人。受祿于天。保佑命之。自天申之。故德者必受命。

德は聖人となり、尊は天子となり、富は四海の内を合す、故に大と曰ふなり、宗廟之を饗け、子孫之を保つ、故に孝といふなり、德爲聖人は、その學智進んで聖人の域に至りしなり、尊は庶人より登陛して天子となりしをいふなり、宗廟は有虞氏の宗廟をいふ、祭法にいふ、有虞氏、黃帝を禘して嚳を郊し、顓頊を祖として堯を宗とす、と、饗は彼れ此の致すところを納受するを謂ふ、子孫、朱注に曰ふ、虞思陳胡公の屬をいふ、と、保は安、我に於て之を全うして失はざるをいふ、蓋し、その尊位を失ふなく、尙ほ三洛の一たるを以て之を言ふなり、位は、人に長として民を愛するの位祿は福祿天下を奄有するをいふ、名は聖人の稱、壽は天之に年を假すに非ざれば、決して得べからず、此に壽を言ふものは、宗廟之を饗するの効を擧げしもの、舜の年百有餘歲、以て其證と爲すべし、凡そ人の壽命、之を受くるや、正あり、變あり、一例を以て之を律し難し、顏回の賢を以てして、不幸短命なりき、この章謂ふところ、專ら其正なる者に就て言ふのみ、材は質、その須つところと相適すべきもの、篤は厚、力督して其方を易へざるの稱、栽は植、建て、其實を期するなり、培は滋、根上に土を加ふるなり、傾は仄、跂て轉側するなり、覆は蓋、その相對するところを內にして、之を合するなり、詩は大雅、生民の什、假樂の篇、今の毛詩、嘉、假に作り、憲、顯に作る、而して嘉顯を優れりと爲す、嘉は承けて之を悅び以て非常となすなり、顯は動くところ常にその軌度に於てするなり、令は善、宜は物各その適を得るの稱、佑は縱ひ彼にして乖くところあるも、己れ之を扶持して違はしめざるなり、申は發舒して接するなり、受命は天の大任を降したるをいふ、舜の畎畝の中に擧げられ、傅說の版築の間に擧げられ、膠鬲の魚鹽の中に擧げられ、管夷吾の囚に擧げられ、孫叔敖の海に擧げられ、百里奚の市に擧げられし如きは、ともに命を受け兼ねて志を得たるものなり、

この章は、上の鬼神の章を受け、父母の感悅するところは、即ち鬼神の感悅するところにして、鬼神の感悅するところは、即ち天下の感悅するところなるを叙す、舜すでに孝順、克く其親の心を體し、その恆正なるものに由て、之を天に推本し、己は至恭を致し、又以て之を天下の心に達せり、その初、父頑に母嚚、弟象傲れるも、克く和ぐるに孝を以てし、烝烝として乂めて、姦に至らしめず、その晏天父母に號泣するに至りては、能く瞽瞍の心を感せしむ、その一たび登庸せらるゝや、堯に薦むる

に八元八凱を以てし、其他問を好み察を好みし如き、一として天下の心を體するに非ざるは、無し。是が故に、所謂大知なるものは、之を原くに、皆之を大孝に發するもののみ。すでに天下の知るところを盡すが故に、德は進んで聖人たり。天下其仁に歸服するが故に、尊は天子となり富は四海の內を有せり。其祭るや、亦た鬼神の饗くるところを以て之に事へしが故に、宗廟之を饗けぬ。天下の推すところを以て、その安享を取るが、故に子孫之を保せり。大德以下は、夫子の語に因て、更に之を證言するなり。夫子の爾か云ひし者は、他の故あるに非ず。凡そ大德なるものは、必ず其位を得、必ず其祿を得、必ず其壽を得。その必ず得る所以のものは、凡そ天の物を生ずるや、必ず物材の就るべき所に因て、篤くして之を遣るに由る。今草木を栽する者を見るに、天風雨を以て之を培ひ、根株搖動することあれば、又風雨を以て之を覆ふ。是れ其證となすべきのみ。舜には聖人の賢あり、故に天は四福を以て之を培ひ、中庸の德を以て之を覆ひしなり。其次に詩を引きしは、君子受命の際、天人相與かるの情狀を發せしなり。君子の道を行ふや、自得せざるなく、常に嘉樂す。道を以て己に期するが故に、令德恆ありて廢せず、行久しく德熟すれば、民順ひ人和す。かくの如くして、祿を天に受けたるを知り、之を奉じて以て命と爲す。然る後、天更に之に命ずるに、その眞命を以てす。大德の者、その生るゝや、固より徒爾ならざるなり。

この章、舜の大孝を擧げ、以て天道善に福するの義を明にす。舊說、受命を釋し、天命を受けて天子となるの義となす。これ蓋し周末方士、纖緯を作るもの、相傳ふるの說、適ま以て小人覬覦の心を開くに足る。僭妄不稽、これより大なるは莫し。朱子、また其謬を傳へて、辨正する能はず。況んや彼の散たる者をや。夫れ聖人の德行は、恭敬を以て第一義となす。至尊九五の位を期する如きは、禮に非ずして、僭の最も甚しきものなり。故に受命は、單に人に長として民を安んずるの位に登ることにして、公卿大夫を指すと知るべし。或は侯家の相となし、或は王室の輔となす、ともに可なり。唯だ決して天子となすべからず。孟子に曰く、莫之爲而爲者天也、莫之致而至者命也、匹夫而有天下者、德必若舜禹、而又有天子薦之者、故仲尼不有天下、繼世而有天下、天之所廢、必若桀紂者也、故益伊尹周公不有天下也、と。この章と對比して、意義を發揮する、最も明確となす。學者、之を審にせざるべからず。

## ◉第十八章

子曰。無憂者。其唯文王乎。以王季爲父。以武王爲子。父作之。子述之。

憂は、その通ずべからざるを知て猶ほ之を念ふなり。文王は周の文王、王季は大王の子、文王の父、武王は文王の子なり。大王王季、王業を基始し、文王之を繼ぎ、益す其德を修め、武王に至るに及んで、竟に兵を興して殷紂を伐ち、天下を取る。作は創、その猷を作すの義、述は增廣の意。

すでに舜をいひ、又武王の孝を明かにせむと欲し、先づ之を文王の憂なきに本づかしむ。その文王を言ふは、在天の靈の意を忖度して言ふのみ。父子の句、人道當さに然るべきの宜を明かにし、推言の由て出づるところを見せしむ。論語に孟武伯孝を問ひ子、父母唯其疾之憂を以て答となす。凡そ人の父母たるもの、命ずる所あらむと欲し、子その命を疾むを以て、憂の最も甚しきものと爲す。文王、すでに王季の作すところを述ぶ、その武王に於ける、繼述を欲せしや、昭々たり。而して武王は實に之が繼述を疾まず、文王の憂なきや、知るべし。

武王纘大王王季文王之緒。壹戎衣而有天下。身不失天下之顯名。尊爲天子。富有四海之內。宗廟饗之。子孫保之。

纘は繼、或は續。書に大王肇基王迹といひ、詩に至于大王、實始翦商とあり。緒は絲緒の緒、續成すべき端をいふ。一は孟子に武王一怒といへると同じく、その多からざるを贊するなり。戎衣は周禮司服職に、凡兵事韋弁服とあるもの是なり。鄭玄曰く、韎韋を以て弁と爲し、また衣裳と爲す、と。要するに、甲冑の屬。壹戎衣は武成の文に、一著戎衣以伐紂とあるが如し。而して鄭玄の此に注するや、曰く、戎は兵なり、衣讀で殷の如し、聲の誤なり。齊人殷を言ふ、聲衣の如し。虞夏商周、氏なるもの多し。今の姓衣なるものあり。殷の冑か。壹戎殷とは、一たび兵を用ひて、殷を伐つなり、と。毛奇齡、之を承けて曰く、壹戎衣は、即ち康誥の殪戎殷にして、大殷を滅すといふことなり。壹は殪、殷は衣聲の轉なり、と。然れども、康誥の殪戎殷、奚ぞ却て壹戎衣の誤にあらざるを知らむ。其文明明、文王を語るものにして、武王を說くものに非ず。故に是は崇を伐つを指すならむのみ。殷を殪すといふは頗る當らず。而して武王を說くものは、君奭の篇に之あり。曰く、後暨武王、誕將天威、咸劉其敵、と。前に文王を擧げ、後に武王を擧げ、その功業を分ち論ずるところ、大に見るべし。若し說者の言の如くすれば、一書中、未だ數卷を問せずして、矛盾を見るもの、豈に笑ふべきに非ざらむや。

周の武王、その父祖大王王季の餘緒を續續して、益す其德を修め、一たび戎衣を着け、兵を起し、牧野に戰て、紂を敗り、遂に八百年の基業を確立せしめき。他人に在りては、必ず亂賊の名を蒙らむ。唯だ武王は、天に應じ民に順ひ、之を爲せしが故に、人之に名を與へ、聖人といふ。かくの如くして、天下の顯名を失はず、尊きこと天子となり、富は四海の內を有し、宗廟之を饗け、子孫之を保つこと、亦た舜の事業と同じ。之を舜に比するに、其跡異なりと雖も、大命を受くるに至ては、一のみ。

**武王末受命。周公成文武之德。追王大王王季。上祀先公。以天子之禮。斯禮也。達乎諸侯大夫及士庶人。父爲大夫。子爲士。葬以大夫。祭以士。父爲士。子爲大夫。葬以士。祭以大夫。期之喪。達乎大夫。三年之喪。達乎天子。父母之喪。無貴賤一也。**

末は末年、猶ほ老といふが如し。成文武之德は、下文謂ふところ、達孝これなり。追王の事、按ずるに、禮記の大傳に曰く、牧之野、武王之大事也、既事而退、柴於上帝、祈於社、設奠於牧室、遂率天下諸侯、執豆籩、逡奔走、追大王亶父王季歷文王昌、不以卑臨尊也、と。今この書は、之を周公に屬す、已に自ら同じからず。史記周本紀に曰く、文王改元、追尊古公爲大王、公季爲王季、と。此亦た一說たり。然れども、詩書の言を以て、之を考ふるに、禮樂の制は、周公より創む。而して今の周詩は、卽ち周樂、其中乃ち大王實始翦商等の語あり。これ周公に至り、始めて能く周の基業の始まるところを推本し、卒に此事あるものに似たり。追王の事、その義實に此に本づく、故に斷じて、周公之を定めし者となすべし。先公は、后稷の子不窋、不窋の子鞠、鞠の子公劉、これより慶節、皇僕差弗、毀隃公非辟方、高圉、佳牟、亞圉、雲都、大公、組紺、諸盩、等由て來る所遠し、然る後、古公亶父に至る。稷より亶父に至るまで、蓋し二十餘世。朱子曰く、上、先公を祀るに天子の禮を以てしたるは、又、大王王季の意を推して、以て無窮に及ぶなり。禮法を制爲し、以て天下に及ぼし、葬るに死者の爵を用ひ、祭るに生者の祿を以てす。喪服期より以下、諸侯は絕、大夫は降、而して父母の喪は、上下之を同うす、己を推して以て人に及ぼすなり、と。按ずるに、大王は始めて商を翦するもの、王業の基づくところにして、王季文王、これが緒を續ぎ、武王遂に因て天下を有つ。これ以て、追王せざるを得ず。且つ之に由て、之を推本すれば、先公亦た皆天子の禮を以てせざるを得ず。凡そ孝の道たるや、父未だ其美を盡さずと雖も、子因て承け以て之が美をなせば、其美の成るところを以て、之を其父に推すべし。喪祭の禮の天下に於けるや、之を譬ふるに、猶ほ樹の如きか。その天子に在る、猶ほ根株の如きなり。その諸侯に

在る、猶ほ幹の如きなり。その大夫に在る、猶ほ枝の如きなり。その士庶人に在る、猶ほ葉の如きなり。周公其祖を以て天に配す、猶ほ根株の土に著くが如きなり。三年の喪は、貴賤となく、一なり。蓋し父母は、生の本譬へば又樹の如く、その枝葉の青青、必ず受くるところあり、之を受くる所あれば、必ず報ゐざる無し。是を以て喪して之を報ゐ、祭して之を存し、然る後、祖業能く繼いで、枝葉枯槁せず。天子諸侯に至て、正旁ともに絶、大夫旁を降て正仍ほ絶えざるの義、亦た根本一にして、枝葉衆なるに象るなり。葬儀祭禮の事、三禮の書に見えたるところ、頗る繁冗なるを以て、此には唯だ其略を擧げしのみ。

武王殷を伐て天下を奄有す、然れども、末年未だ禮樂を制するに及ばずして崩ず。周公是に因て、其孝を纘成し、以て追王上祀の禮を爲し、遂に其義を以て天下に達し、文武の孝を全うせり。父、大夫たり、子、士たれば、葬るに大夫を以てし、祀るに士を以てす。父、士たり、子、大夫たれば、葬るに士を以てし、祭るに大夫を以てす。蓋し武王周公の禮、その父祖先世に於ける、並に皆王禮を以て之を改葬せず、但だ之を祭るに、天子の禮を以てせしのみ。是を以て葬るは、皆本身の爵位に從ひ、祭るは乃ち皆その祭者、爵位の宜しきところを以てするなり。喪禮の意も、亦た葬禮の意の如し。

各因て以て、その分宜を失ふこと無からしむ。之を要するに、皆以て素位の行を敎ふるもの、蓋し諸侯に在りては諸侯に行ひ、天子に在りては天子に行ふを以てなり。期の喪は、大夫に達し、三年の喪は天子に達す。天子は、その躬、萬機を總ぶ是を以て、三年の喪を存す。然る所以のものは、他なし、父母の喪は、人、終身至重の道存するを以ての故に、貴賤となく、之をして一途に由らしむるなり。此亦た喪禮の等級あることを明かにするもの、並に皆その父母の喪を以て本と爲し、その餘は其本に因て、之を展及す。期喪は尙ほ或は及ばざるべし、三年の喪は貴賤となく、之を行はざるを得ず、蓋し亦たかの素位の行、その基を立つるところなるが故なり、全章の意、文武周公の事を擧げて、天道善に福するの驗を明かにす、實に中庸と相關せざるなり。

## ◉第十九章

**子曰。武王周公。其達孝矣乎。夫孝者善繼人之志。善述人之事者也。**

繼は代て之を達成するなり。志は心の之くところなり。按ずるに、達孝の旨、前の鬼

神の章に本づく。蓋し天下の人、各その祖先を祭る、而して、その鬼神に於けるは、則ち一なり。武王周公、その孝を以て、之を禮制に寓し、敷へて以て之を天下に行ふ、その孝思の假るところ、周の祖先の靈に止まらずして、直に滿天下の鬼神に假る。是れ亦た周公禮を制するの本旨、自ら存するところ、故に其達孝矣乎といふ。以下の文、孝を釋し、父祖を稱せずして、人を稱す。蓋し亦た之を律するに、天下人情の常を以てしたるが故なり。

武王末に命を受け、周公その業を續き成す、この故に實は周公の制するところと雖も、亦た武王の志なり。故に此に武王周公を並稱するなり。武王周公、その祖を推して、之を天に本づけ、その志を繼いで、其事を述べ、乃ち喪祭の禮を作り天下をして共に此に從はしむ。その由て行ふところ、乃ち亦た天下の人をして各以てその父祖の志を繼ぎ、その父祖の事を述べしむる所以なり。これその孝を天下に達するもの、達孝といふ、即ち是のみ。

**春秋修其祖廟。陳其宗器。設其裳衣。薦其時食。**

祭儀に曰く、祭は數を欲せず、數なれば煩、煩なれば敬せず。祭は疎を欲せず、疎なれば怠り、怠れば忘る、これが故に、君子はこれを天道に合はせ、春は禘、秋は嘗、霜露すでに降つて、君子之を履めば、必ず悽愴の心あり、其寒の謂に非ざるなり。春雨露すでに濡ふて、君子之を履めば、必ず怵惕の心あり、將に之を見むとするが如し。樂以て來を迎へ、哀以て往を送る、故に禘は樂ありて、嘗には樂なし。と。朱熹曰く、祖廟天子は七、諸侯は五、大夫は三、適士は二、官師は一、と。毛奇齡曰く、宗器は卽ち宗廟の器。尊罍琖斝盞盛籩豆の類の如し。裳衣は先祖の遺衣服、然れども亦た兩項あり、一は尸に授け、一は之を座上に設けて以て魂衣となす、と。又曰く、時食は豆籩庶羞膴鮑胙腊麵蕡蔆芡の類の如き、各時物を以て之に實つるを得るもの、所謂時饗とは是なり。

これより以下、細かに祭禮の制を叙して、以てこの達孝の義を見はさむとし、こゝに先づ大概を總說す、每歲春秋、その祖廟に詣り、蟲鼠の糞を掃ひ、その牆屋を補葺し、その宗廟世守の祭器を陳列し、その祖先置くところの裳衣を設け、又その祖先用ふるところの時食を薦進するなり。

**宗廟之禮。所以序昭穆也。序爵所以辨貴賤也。序事所以辨賢也。旅酬下爲上。所以逮賤也。燕毛所以序齒也。**

毛奇齡曰く、宗廟之禮は、大饗を以て言ふ、故に宗族俱に至る、禮諸文に冠たりと雖

も、而かも宗廟の重ずるところは、專ら宗を合するにあり、故に序昭穆といふなり。昭穆同じからず、生人の昭穆あり、工史世を書す、傳に稱するところ、某を大王の昭となし、某を王季の穆となすもの是なり。死者の昭穆あり、宗祝廟次を序す、禮に稱するところ、室の祭は六尸南北向し、堂の祭は六尸東西向すといふもの、是なり。これ祇だ生人に屬して死者に及ばず、死者の昭穆、廟制一定、再序を庸ふるとなく唯だ生人は天子諸侯、自ら一宗族となり、人敢て君親を以て親と爲さゞるを以ての故に、大宗を分て氏となし、小宗を分て族となし、渙散已に極る。大饗、宗を合するに非ざれば、別に序法なし、故に祭統に云ふ、惟だ太廟に事あれば、群昭群穆咸なあり、其倫を失はず、殖祭の如きは、此なしと。按ずるに、魯語に曰く、先王制諸侯、使五年四王一相朝也、終則講於會、以正班爵之義、帥長幼之序、訓上下之則、制財用之節、と。これは會期の禮なりと雖も、亦た略ぼ燕毛旅酬の意を帶ぶ、蓋し昭穆を序する者は、專ら宗族を待つの禮にして、序爵は異姓を兼總するなり。書に虞賓在位といひ、詩に有客といひ、魯語に天子祀上帝、諸侯會之受命焉、諸侯祀先王先公、卿大夫佐之受事焉といふを見れば、異姓にも助祭するものあり、宗廟の中、亦た之ありしや必せり。一命は鄉里に齒し、再命は父族に齒し、三命して齒せず三命齒せざるものは、必ず

別にその班爵を以て行列となすなり。其嚴なるや、かくの如く、亦た人を得るを要す。事には難易あり、其難きもの賢者に非ざれば執る能はず、故に執事の次第賢否自ら辨明す、これを辨賢といふ。旅酬は儀禮に見ゆ、旅は衆酬は酒の衆人に浹洽するをいふ。賓の弟子、兄弟の子、各觶を其長に舉げ、衆にして相酬ゆるなり。蓋し宗廟の中、事あるを以て榮と爲す、故に賤者に逮及するは、亦た以て其數を申べしむる所以なり。燕禮、士の旅食を門西に尊し、士に辨獻するの後に及んで、主人旅食の尊に就いて之を獻ず。旅食は拜せず爵を受け、坐して祭り、立て飲む。蓋し旅食の士、尤も賤くして、大夫士とその飲酒を同うすべき者に非ざるが故に、主人公の爲に、特に就いて之を獻じて後、歡その下賤に逮ぶを得、之を下爲上所以逮賤也といふ。燕毛、毛奇齡曰く、燕毛は從來禮文なし、故に世皆臆斷に憑て解說す、今之を考ふるに、これ祭畢つて爵を賜ふの禮、祭統十倫の第九倫なり。爵を獻じ、爵を加へ、爵を致し、爵を酬ゐ、爵なきの後に在りて、又賜爵を行ひ、以て長幼を序する者、呼んで毛といふは、毛髮を以て長幼を分つが故なり。周禮司儀に、王燕則諸侯毛といふもの是なり、と。この段、紊說紛々、覺えず冗長に失せしと雖も、讀者必ずしも深く穿鑿するを要せず、禮法の由て來るところ、その精神の何者たるかを領知すれば足れり。

その修陳設薦せしところの廟中に於て、衆子孫を會合し、各その敬を先祖に致す。會合の際、之に席するに、その昭穆を以てするは、乃ち宗廟に在て專要とするところの大禮に係る。又異姓諸侯の會祀するあれば、之を序するに、その爵位の貴賤を以てし、群有司を待つには、その職事の輕重を以てし、賢者は重に任し、劣者は之に次ぐ。旅食の士は、群有司より賤し、故に別に主人を設け、公の爲に特に就いて之を獻ず。その最後の燕は、昭穆貴賤、各毛髮を以て長幼を席す。天下に達尊三あり、爵一、齒一、德一。貴賤を詳するは爵なり、賢を重するは德なり、燕毛は齒なり。而して昭穆を序するは、人倫の親疎を別つものにして、三者の外にあり、而かも三者の始たり、聖人禮を制するかくの如くして、其れ至れるかな。

**踐其位。行其禮。奏其樂。敬其所尊。愛其所親。事死如事生。事亡如事存。孝之至也。**

魯語に曰く、有司曰、夫宗廟之有昭穆也、以次世之長幼而等胄之親疏也、夫祀昭孝也各致齊敬於其皇祖、昭孝之至也、故工史書世、宗祝書昭穆、猶恐其踰也、と。此に據て考ふるに、凡そ宗廟の禮たるや、族宗大に會聚し、各其世の長幼を昭かにして、之が昭穆を序し、敢て其位を踰えず、而して諸侯大夫、自ら其制に循ひ、或は祭を五世に致し、或は三世に致す。故に踐其位行其禮といふ。踐とは、行ふて其迹を爲すなり。奏樂は、祭儀に據るに、唯だ春禘にのみ之あり、而して秋嘗には用ひず。此れ蓋しその大略をいふなり。又按ずるに、始めて死せしを死といひ、すでに葬れば亡といふ死生は、己が祖先を以て言ふ、蓋しその神氣を以て主となすなり。尊親の二字は、下文尊賢親親の義を起す。

昭穆子孫、並に皆この祖の位を踐み、その祖の禮を行ふ。たとへば文王昭なれば、その子孫魯衛の諸公、魯は周公の坐位を踐み、衛は康叔の坐位を踐むが如し。この間、或は其爵に從て、遠及近及の差ありと雖も、その祖の禮たるは、一なり。故に踐其位行其禮といふ。その樂を奏すといふものは、今亦た先代用ふるところの樂を奏するなり。その尊ぶところを敬すといふは、前代の功臣、先君尊爵を賜ふところの者にして、今その先を祭り、幷せて以て配享するもの、祭その先に及ぶの謂なり。愛其所親とは、班してその親疏を次するの謂。尊賢親親、一に祖宗の義を以てするは、所謂死亡に事ふる、生存に事ふる如きもの、是なり。こゝ一節は、上文兩節を結び、皆繼志述事の意に外ならず。

**郊社之禮。所以事上帝也。宗廟之禮。所以祀乎其先也。明乎**

## 郊社之禮禘嘗之義治國其如示諸掌乎。

司馬法に百里を遠郊と爲すとあり、近郊は五十里、此地に於て天を祭る、故に名づけて郊といひ唯だ天子之を行ふ。魯の郊禘は禮に非ず、孔子しば〳〵之を言へり。社は示に從ひ、土に從ふ、土神を祭るの處、樹を立てゝ以て其處を表す、社は一なれども雖も、その郊と配して以て上帝を祭るものは、唯だ天子之あるのみ。上帝は天を指す、こゝに上帝といひて地神を言はざるものは、本の末に達するを示すに外ならず。郊に南北四郊の異あり、之を總べて皆上帝を祭り、先王生ずるところの帝となすなり。社に王宮國中田間の異あり、要するに土祇の祭、郊祭の中、必ず兼ねて祭地あるが故に、包舉して之を言ふのみ。禘嘗、古しへに大禘の禘、吉禘の禘、時禘の禘あり。而してこゝに謂ふところは、前に已に春秋の二字あるを以て、時禘なることを知るべし。傳に曰く、禮不王不禘と、王者その先の自ら出づるところを禘し、其祖を以て之に配するなり。祭法に曰く、周人禘嚳而郊后稷に、周人を以て之を言へば、その祖は后稷、その祖の出づるところは帝嚳たり、故に帝嚳を大廟に祭り、后稷を以て之に配するなり。嘗は秋祭なり、四時皆祭り、禘必ず春に於てす、故に特に禘嘗を列舉せしなり。祭統に曰く、祭莫重乎禘嘗、約禘陽義也、嘗烝陰義也、禘則發爵賞服、嘗則出田邑、發秋政、故曰禘嘗之義大矣、治國之本也、不可不知也、と。禮には必ず義あり、之を對舉するは互文、祭の禮義を明にするは君なり。仲尼燕居に曰く、郊社之義、所以仁鬼神也、嘗禘之義、所以仁昭穆也、明乎郊社之義、嘗禘之禮、治國其如示諸掌而已乎、と。この節と同意、而して郊祀を舉げしは、上にいへる追王上祀の義を結ばむが爲にして、宗廟禘嘗は、上にいへる春秋祖廟を修するの言を結ぶなり。治國の二字、下文政の字を生ず、即ち亦た禮樂刑政を以て一致となし、說き來る者のみ。又按ずるに論語に知禘說者之天下、如示諸掌とあり、而して此には郊社禘嘗を合せて之を言ふ。其義同じからざるに似たれども、先を祀ると上帝に事ふるとは、その義一致に歸し、之を祀るに孝を以てしたるは、天下國家の其治を得る所以、かつて背馳せず、而して禘の名、實は兼ねて其祖を以て帝に配するの義あり、故に特に禘の名を舉げ、兼ねてその上帝に及ぼすの意を見るべく、論語只だ禘を稱するもの、其故なきに非ざるを知るべし。

郊社の禮には、先王上帝に事ふる所以の義存するあり、宗廟の禮には、先王其先を祀る所以の義存するあり、これが故に、學者もし能くこの郊社の禮、その祖を以て上帝に配し、宗廟の中、禘嘗その春秋を以て、その祭祀を修むるの義を知らば、其智

天下の道に於て、幽明相通じ、概して一物となすに至るを得べし、而して天下、貴賤大小となく、その祭るところ祖先の靈、子孫の心、死生相通じ、概して一鬼神となれば、天下に於て唯だ孝順の道、以て之を治むべく、庶物因て其所を得て、必ず、安定するを知るべし。かくの如くして、天下の事、博大多變と雖も、亦た見易きなり、視諸掌は、その全體を包擧して、以て盡くその至微を知るを得るに喩へたるなり。

說者或は曰く、中庸の本旨、戒愼恐懼に始まり、治國に終る、紀綱備れりといふべし。そも子思の所謂道なるものは、君子己を修め人を治むるの道にして、物を絕ち世に高きの道に非ざるなり。子思の所謂學なるものは、君子己を修め民を治むるの學にして、靜坐澄心の學に非ず、故に學を講じて君道を推本するを知らず、身を持して民の父母たるに意なきものは、小人の儒と謂ふべきのみ。陳三山、修其祖廟以下の句を以て漢儒の雜說となしてより、學者或は之を主張し、更に又鬼神之爲德以下を以て、他書の脫簡と爲すに至る。これ子思の旨を達せずして、妄りに疑難を生せしもの、嗤ふべきのみ。特に知らず大孝は是れ舜の中庸、達孝は是れ武王周公の中庸、その人倫の至なること一のみ。子思聖人の中庸を明かにし、學者に示すに愨率を以てせむと欲す、故に孔子の訓言を引き撰んで或は精に過ぎ、語て或は詳に過ぎむとす、豈に中庸の義に於て干涉なしといふを得むや、と。その言、取るべきもの無きに非ず。然れども、中庸の不完の書たるは、何人も直に認むべきところ、大舜文武を說くは可なり、唯だ文義の接續に於て、頗る闕如たるものあり、筆致相似ざる者、亦た之なきに非ず、余は徒らに古に遵ふの愚を爲す能はざるなり。

## ◉第二十章

**哀公問政。子曰。文武之政。布在方策。其人存則其政擧。其人亡則其政息。人道敏政。地道敏樹。夫政也者蒲盧也。**

哀公は魯の君、名は蔣。政は事の規制する所ある者、夫の民の宜しく止るべきところを以て、之をその衆庶に承くるの名なり。故に文武之政は、周公制するところの六典、現に周禮に存するもの、蓋し其目なり。方は版、策は簡。人道地道は、人地と道との間、意に屈折あるをいふ。敏は、怠らずして之を達成するの稱。蒲盧は、沈括、以て蒲葦となり、朱子亦た之れを取る、非なり。按ずるに、夏小正にいふ、十月玄雉入于淮爲蜃、と。その傳にいふ、蜃は蒲盧なり。また爾雅にいふ、螺蠃、蒲盧、卽今細腰蜂也、と。細腰蜂は似我蜂、一に土蜂といふ。詩に曰く、螟蛉有子、螺蠃負之、と。螟蛉は桑蟲、蒲盧、桑蟲

の子を取り、去て變化せしめ、以て己の子と爲す、蒲盧は並に化成の物を稱するの名、鄭、玄の注、政の百姓に於ける、蒲盧の桑蟲に於ける如く然り、といふは、頗る當れり、家語に、子云、天道敏生、地道敏樹、人道敏政、夫政者、蒲盧也、待化而成、と、益す其然るを見るべし、今姑らく舊注家の說に從ひ、此章の解を爲さむか、こゝに謂ふところ、人道の道の字は、仁義を稱し、仁義は、上に云ひし郊社禘嘗の義、親を愛し、尊を敬するもの是れなり、人道敏政は、卽ち微之顯、誠之不可揜の證に外ならず、

この章以下、孔子が達道達德九經の語を擧ぐ、故に作者之に本づいて、更に學問の方を論じ、孔子を贊して述者の聖となし、聊か後學の標的たらしむ、若し中庸を首尾全きものとして、試に一言すれば、これより前は、理論を主とし、これより後は實行を說く、此に於て、哀公問政の一章、その關鎖たり、政を爲すは、人にあり、必ずしも法に關せず、文武二王行ふところの政、布いて方策に在り、百世の下、猶ほ考へ知るべし、而して其人存すれば其政擧行し、其人亡ぶれば其政歇息す、然る所以のものは、君子の身、その道を修むれば、政の民に行はるゝところ、自ら敏行を得むたとへば地の其氣を得るや、陰陽和通、地上の樹木、自ら敏生するが如し、政は樹、と對生すべきもの、夫の政事の原、その意、かの樹に似たるものあるが故のみ、政は蒲盧なり、

方策に存する文武の政事、亦た其人の善惡に因て、相變ずるを免れざるを云ふ、

**故爲政在人。取人以身。修身以道。修道以仁。仁者人也。親親爲大。義者宜也。尊賢爲大。親親之殺。尊賢之等。禮所生也**

爲政在人の人は、卽ち其人存の人、賢者をいふ、家語に、爲政在於得人、とあり、語意尤も備れり、仁は自ら其身の或は違ふところを克攝し、之を其人に德する處に止むるの名なり、凡そ天下含靈の類、禽獸の如きは、羽毛爪牙あり、能く飛び能く走り、以て自ら其食を得、唯だ人は獨り自ら生ずる能はず、必ずその互に相輔養するところに待つことあり、以て生ずるものなり、もし輔養の業に居ること能はざれば、必ず擯棄凍餒して死せむのみ、上は天子より下は庶人に至るまで、互に相輔養するを以て、務と爲し、以て其生を爲す、故に勉强努力、以て其務に居るものを仁となし、その務むるところ、卽ち義なり、易の說卦に曰く、立人之道曰仁義、と、繫辭傳に曰く、百姓日用而不知、と、論語に曰く、民之於仁也、甚於水火、と、孟子に曰く、仁人心、義人路也、と、又曰く、仁、人之安宅也、義、人之正路也、と、いづれも相輔養するの義を以てせしものなり、こゝに謂ふところ仁者人也、義者宜也といへると、全く同じ、親親の義、前に出でたる兄弟既翕、和樂且耽の意と相照應す、親親之殺、尊賢之等、卽ち中庸の在るとこ

ころ親親之殺は、喪服に之を見るべく、尊賢之等は、序爵に之を見るべし。こゝに殺は去聲に讀むを可とす。呂氏曰く、親親の中、父子は首足なり、夫婦は判合なり昆弟は四體なり、その情、殺なかるべからざるなり。尊賢の中、師あり、友あり、我に事ふる者あり、その待つや、等なき能はざるなり。是に因て、等殺の別、節文の由て生ずるところ、禮の謂なり、故に親親之殺、尊賢之等、禮所生也といふなり、と。按ずるに仁義禮三者は、道の大統、故に孔子達道の先に於て、之を言ふ

政は蒲盧なり、其人に因て相變ず。故に政を爲さむと欲する者、その要、人を擇で之に任するに在り。而して政を爲すに協ひたる人を取らむとするや、必ず己の身の德行を以てし、德善なれば賢者進み、不善なれば不賢者進む、是が故に、身を修むるには道を以てす、若し道を以て修めざれば、務めて修むと雖も、遂に鄉愿に歸するを免れず。今夫れ、道苟くも之を學ぶもの、皆達するを得べく、之を修むるには、必ず仁を以てす、仁は人なり、己を舍き人を愛するを以て事となすなり。仁ならざれば、是れ人を愛せざるなり。故に人の人に於けるや、愛すべからざる所なし、彼の墨者の愛に差等なしと雖も、亦た施すこと親より始む。親を親むは、仁の本いて立つところ、之を大なりと爲す。義は宜なるが故に、不義なれば、宜に違ふなり、凡そ物皆擇で其宜に處るべし。但し賢不肖は、人と己との由て分るところ、其宜しき　於けるや、最も切近と爲す、故に賢を尊ぶは義の至要にして、亦た以て大と爲すべし。先王この仁義親親尊賢に於て、頗る其心を用ふ。蓋し親を親とせむと欲せば、親疎遠近、其別を設くるところ無かるべからず、是を以て殺あり、賢を尊ばむと欲すれば、大小上下、その遇を差すること無かるべからず、是を以て等あり。知るべし、親親之殺、尊賢之等は、乃ち實に先王禮法の由て生ずるところ、亦た以て其心を用ふるの精を見るべき者なるを。

**在下位。不獲乎上。民不可得而治矣。故君子不可以不修身。思修身。不可以不事親。思事親。不可以不知人。思知人。不可以不知天。**

在下位の句、鄭、玄曰く、此句下に在り、誤て重ねて此に在り、と。古來の注者、多く之に從ふ。或は強いて曲解する者ありと雖も、要するに物事を爲さず。故の字、上文政在人より來る。思は思ふて之を求むるなり。人を知り、天を知るの旨、前に出でし鬼神の章旨と相接應す。

君子は、人の上となり、以て其政を行ふ者なり。凡そ政、人に因て變じ、人を取るに身

を以てすべきの義、すでに上文言ふところの如し。故に君子は先づ身を修めざるべからず。身を修むるの仁、親を親とするを大なりと爲す。故に身を修めむと欲せば、以て親に事へざるべからず。而して親の善は、之に順ふべく、その不善は諫めて之を止めしむべし。その善と不善とを知らむと欲せば、人心の本づくところを知らざるべからず。人心の本づくところを知らむと欲せば、天より大なるは無く、先づ天を知らざるべからず。知天は、人道の由て本づくところ、下に誠者天之道といへる所以なり。

**天下之達道五。所以行之者三。曰。君臣也。父子也。夫婦也。昆弟也。朋友之交也。五者天下之達道也。知仁勇三者。天下之達德也。所以行之者一也。**

達道達德の達は、前に出でし達孝の達と同じく、相承けて武王周公必ず其の孝を達せむと欲せし深旨を述ぶるものなり。達道五、書に謂ふところの五典、孟子に謂ふところ父子有親、君臣有義、夫婦有別、長幼有序、朋友有信、卽ち是なり。按ずるに、五倫の配するところのもの、君臣は紀、父子は實、夫婦は禮、昆弟は用、朋友の交は道なり。達道達德、相合ふ所以は他なし。達道の宜、之を度るに中庸を以てし、之を載するに三德を以てするなり。又篇首に和者天下之達道といひ、こゝに又五倫を以て達道といふ。解する者は曰く、これ他の故あるに非ず、五倫その宜しきに協へば、卽ち是れ和、故に並び稱して達道といふを得るなりと。

上文、修身以仁といふ、之を如何にせば可なる。性に率ふて行ふ、之を道といふ、その行又歸を同うし、途を殊にす、或は君臣に於てし、或は父子に於てし、或は夫婦に於てし、或は昆弟に於てし、或は朋友に於てす。凡そ人の性、皆この五者の間に從事すること無きを得ず。この道の天下に在るや、古今となく、華夷となく、民生固よりこの德性に由り、皆違ふと能はず。天下の達道、若し目を擧くれば、五倫のみ。この五倫を行ふもの、人心に根柢あるに本づく、天下の達德、知仁勇、是なり。道といひ、德といふ、試に喩を以てせば、物運輸すべきの分あるとき、其運輸すべきは、其物の道にして、運輸は舟車に非ざれば能はず、舟車は德なり、故に五倫は物にして、知仁勇は舟車なり。然れども、總て之を論ずるに、道は天に統べて、德は民に存す。二者相待ち、人自ら趨て之を行はざるを得ざるなり。故に姑らく德に就いて、其類を辨ずれば、この三者の別あり、而して五者の道、並に皆之を行ふに、この三者を以てす、その根源に於て、始めより異なる所なし。故に所以行之者一也といふ。大抵天人合一なるを

知れば、天下に達道及び達德あるを知るべく、この章、兼ねて人を知り天を知る所以の條目を擧げしなり。

**或生而知之。或學而知之。或困而知之。及其知之一也。或安而行之。或利而行之。或勉强而行之。及其成功一也。**

知の字、前の「知天知人」の知と相貫き、彼は其大を包み、此は兼て其細を統ぶ。行の字は、前の「所以行之」の行を受け、その細を統ぶるの旨、並に同じ。困は任を受くる、其分に過ぐる者なり。安はその置くところに從て、違忤の意なきものなり。利とはその値ふところ、我が行くところに適順するなり。勉は事に當て、敢て去らざるの稱。功は事業已が緒に發して、彼に著建する者の稱なり。

前に論ずるところ、知は是れ心の用、仁勇は體氣の用、故に併せて一となし、又以て之を行に屬して言ふなり。夫れ達道にして達德なり、是を以て必ず生れながらにして、之を知るもの無き能はず、孔子の兒たるや、嬉戲するに常に俎豆を陳し、禮容を設け、その學を好むや倦まず、これ上等の天資なり。かくの如くして知るものは則を作り、人をして學ばしむ、是に於てか、又學んで知るものあり、孟子の學は、三遷斷機の教に成る、是も亦た中人以上の資なり。或は又、その智、事に逢ひて通する能はず、少時人の勸勉するを聽かず、壯歲以後、困辱するところありて、始めて學に志ざすものあり、これ中人以下の資なり。生知、學知、困知、頗る差別あるに似たれども、その一たび之を知るに及んでは、一なり。道を知ること、かくの如くして、之を行ふは如何。人、智仁勇の三德を稟けて生る、利鈍の別なき能はず。安じて之を行ふは性の自然を得たるものなり。次に行、此に由れば必ず利達を得べしとて之を行ふ者あり、體氣欲せずと雖も、之に由らざるべからざるを知り、勉强して之を行ふものあり。然れども、その功を成すに及んでは、一のみ。この章、三知三行を論じ、皆之を一致に歸せしむる、その意、蓋し學者をして、天稟の差別に拘はり、その知行するところに疑難を挾むこと無からしめむが爲のみ。

**子曰。好學近乎知。力行近乎仁。知恥近乎勇。**

子曰の二字、朱子以て衍文となす。取るべし。其說下に載す。近は遠からざるの意。恥は、心、物の爲に鄙斥されしを思憚するなり。

德の物たるや、默して存すべく、言ふて喻し難きものあり、故に夫子姑らくその近似する者を擧げ、以て其方を喻すなり。知は道に知るものなり、今己の知を行ふに非ずして、學を好む、故に知に近しと爲す。仁は己に克て禮に復するものなり、今己

の安に從ふに非ずして、力行す、故に仁に近しと爲す。勇は自ら勵むところあるなり、今自ら便を取るに非ずして、恥を知る、故に勇に近しと爲す。近しとは、成德の人を以て、之を律するなり。今夫れ三德に資し、以て學に進む、猶ほ目ありて見、耳ありて聞くか如く、德器を成就するに於て、何の難きかあらむ。

**知斯三者。則知所以修身。知所以修身。則知所以治人。知所以治人。則知所以治天下國家矣。**

すでに、三者の天下の達德たると、その近き者に就いて、勉めて之を行ふとを知れば、乃ち此に止まるを知るを得べく、天下國家を治むるの道、亦た此に外ならず。蓋し、古しへの人、自ら其身を修め、人をして皆效ふて其身を修めしむ。天下國家、かくの如くして、其治を致すべし。然る所以の者は、何ぞや。身を修むる道の存するところは、天下達道の行はるゝところにして、天下の民其性を遂ぐる所以の道なるが故のみ。

**凡爲天下國家。有九經。曰。修身也。尊賢也。親親也。敬大臣也。體群臣也。子庶民也。來百工也。柔遠人也。懷諸侯也。**

經は猶ほ機絲の經の如く、織らむと欲するもの、必ず先づ之を事とするが故に、凡の大本、亦た呼んで經といふ、故に又常なり。敬は彼が相受の心測り難きを以て、心を用ひ、その或は出づる所に當るを得むと欲するの謂なり。體は、之を視ること猶ほ己が身體の如く、由て其心を察するなり。子は、父母其子を愛するが如くするなり。柔は、強制せず、以て之を待つなり。懷は之をして己を忘れざらしむるなり。

この一節、上の天下國家を治むる者に本づいて、更に其詳を發す。天下國家の本、身にあること、復た贅せず。故に修身を以て、九經の本と爲す。身を修むるに道を以てす。賢を尊び、賓師と爲すに非ざれば、不可なり。故に次いで、尊賢をいふ。賢を尊び、道を辨ず、然る後に親を親むを得べく、家道治て後に朝廷に及ぶ、故に大臣を敬するは、卽ち賢を尊ぶの意の如く、群臣を禮するは、猶ほ親を親とするの意の如くなるべし。朝廷すでに治て後に、其國に及ぶ。庶民を子とし、百工を來たし、粤の鏄、燕の函、之を得ること難きに非ず。すでに其國に由て、以て天下に及ぶ、故に遠人を柔し、諸侯を懷け、賓旅を忘れしむること、無かるべし。九經の序、大凡かくの如し。

**修身則道立。尊賢則不惑。親親則諸父昆弟不怨。敬大臣則不眩。體群臣則士之報禮重。子庶民則百姓勸。來百工則財用足。柔遠人則四方歸之。懷諸侯則天下畏之。**

道立の立は、易の文言、修辭立其誠の立の如し。朱注に曰く、道已に成りて、民の表たるをいふ、所謂「皇建其有極」といふもの、是なり、と。惑は、執るところ相反いて、自ら辨ずる能はざる稱。眩は、目、物の爲に亂さるゝをいふ。毛奇齡いふ、財は財具をいひ、用は器物を謂ふなり、と。

これ九經の效を言ひ、其一の闕くべからざるを明かにす。身を修めて、すでに至る、始めて以て人に行はるゝを得べし。賢を尊び、嚴師友ありて、學へば、立心恒あり、惑亂するところ無かるべし。諸父昆弟は、天倫なり。天倫親まざれば、彼その依るところを得ずして必ず怨む。怨めば相助けず。昆弟相助けざれば、枝族分乖して、本根露出せむ。家を治むるもの、先づ親を親とせざるべからず。大臣は國均の在るところ、之を敬すれば、大綱從て立ち、條理從て晰。小臣祗んで事に服し、煬蔽の患なかるべし。若し然らざれば、國均輕く移り、嬖臣政を擾り、民の耳目、爲に眩亂せむ。群臣を使ふに、禮を以てすれば、士、その報ゆるところに輕忽たらず。能く其身を殺さむ。孟子に、臣視君若腹心とあるは、是なり。庶民を見ること、赤子の如くすれば、彼亦爲に其勤を盡し、以て其職業を執るに至らむ。更に百工を來せば、國中五材の器用、遍足するを得べく、遠人を柔ぐれば、その德惠の厚きを慕ひ、四方必ず之に歸せむ。諸侯を懷づくれば、その與屬の國多きを以て、兵力大に盛に、天下必ず之を畏れむ。

齊明盛服。非禮不動。所以修身也。去讒遠色。賤貨而貴德。所以勸賢也。尊其位。重其祿。同其好惡。所以勸親親也。官盛任使。所以勸大臣也。忠信重祿。所以勸士也。時使薄斂。所以勸百性也。日省月試。既稟稱事。所以勸百工也。送往迎來。嘉善而矜不能。所以柔遠人也。繼絕世。舉廢國。治亂持危。朝聘以時。厚往而薄來。所以懷諸侯也。凡爲天下國家。有九經。所以行之一也。

齊明盛服は、前の鬼神の章と、其意相發す。修身の道多しと雖も、その心身最も肅然たる者を擧くれば、祭祀を承くるものに若くは無し。故に此を擧げて、以て其則と爲す。讒は辭說を執り、人をして相仳離せしむるを謂ふ。重其祿、毛奇齡曰く、同姓の官と爲らざる者を指す、周制、公卿大夫皆諸父昆弟之を爲し、異姓は偶然のみ。故に賢と大臣群臣と卽ち是れ同姓なり、何ぞ復た親を親とするの一等、尊敬の外に在るものあらむ。冢宰の職、八統を以て、王に詔げ、萬民を馭す。一に曰く、親を親とす、と。これ正しく、王族と庶姓九族との官たらざる者を概するなり。周公太師となり、召

公太師となり、康叔聃季、司寇司空となりし如き、是れ賢、是れ大臣、而して五叔官なき成叔武、毛叔鄭の如き類、仍ほ祿位を與へて、官守なく、此亦た倅貳と致仕大夫卿士との外にあり。その位を攝する者は、祿を以てし、必ず等あり。位は祿の等、その尊と曰ひ、重といふは、その位祿の甚だ卑薄ならざる者に就いて之に賜與し、必ずしも公卿大夫の公采ある如くならしめざるなり。周制、祿仕田あり、禮運に「天子田あり、以てその子孫を處らしむ」と。故に、地官都鄙別に「王子弟の食邑あり」といへり。向きに王の子弟をして、官守あらしめば、但だ卿大夫の食采邑に依て、すでに足れり。焉んぞ別に食邑を置くを得む。これを以て、舊儒、禮の注、皆曰く、此れ但だ位祿を置き、以て之を貴富にして、官守を與へず、一に中庸云ふ、ところの如し、と。位を尊び、祿を重くするは、漢唐他の禮の注を見るに、皆明文あり、豈に止だ鄭孔の注疏のみならむや。その好惡を同うするものは、猶ほその喜戚といふが如きなり。左傳昭公二十五年に曰く、生好物也、死惡物也、好物樂、惡物哀也、と。これに據て、その好惡を同うすといふは、公族の家、慶あれば、君之が爲に宴樂し、或は餼を致す。喪あれば、君之が爲に或は朝を廢し、或は樂懸を徹する類なり。官は分疏の一司を謂ふ。周禮春官夏官の屬の如き、これなり。陳自曾曰く、周官、官ごとに、大小卿二人、皆屬するに六十官を以てす。下大夫上中旅下士の如きの類、故に六官にして三百六十屬あり、各官府に至りては、正長を建て、下又各佐貳般輔の衆あり、總べて任使なり。忠信は上之に接するに、その忠信の道を以てするなり。重祿は君臣その祿の賜奪するところを重んずるなり。蓋し、君、己が一時の好惡に任せて、之を賜奪することなきなり。時使は、庸役の農時を妨げざるを謂ふなり、と。文輝曰く、周禮均人豐年には旬に三日を用ひ、中年には二日、年なきは一日。王制民の力を用ふ歳に三日を過ぎず、之を時使といふ。凡そ賦法什一を過ぐるなし。什中一を取るを謂ふなり。然れども、藉法を以て、之を計るや、一百十畝を以て十畝を藉すれば、什の外一を取る。故に王制に云ふ、古しへ藉して稅せず、と。春秋傳に、穀出づると藉を過ぎざる、之を薄斂と謂ふとあり。省は、先づその出でむと欲するところを檢定するなり。試は之を其位に納れて、以てその才實を驗するなり。既は讀んで槩となすべし。禾は米なり、廩人之を給す、卽ち稍食、是なり、と。毛奇齡いふ、その稍と稱するものは、稍稍之を與へて、頓に發せざるなり。嘉とはその殊常たるを念ふて、以て好く之を遇するなり。矜は之を待つに、強督せざるを以てなり、と。又曰く、往を送りて來を迎ふ、章句に符節を以て往を送るに屬し、委積を以て來を迎ふるに屬すと謂へとも、亦た是に非ず。遠人往來を

考ふるに、凡そ符節委積、倶に送迎あり。夏官、懐方氏、遠方の民を來たすを掌り、遠節以て之を送迎す。故に蕃國諸侯、至るを告ぐる毎に、皆人をして往迎せしめ、去れば之を送る。若し商賈行旅は、關を守るに、内外の送あり。内者をして外より入り、外者をして内より出でしむるなり。但し節各同じからず。門關符節を用ひ、貨賄璽節を用ひ、行旅旌節を用ふ。此は祇だ蕃國商賈の事、行旅賓客に及ばず、而して小註、秋官環人賓客を送迎するを掌り、以て之に當つ」といふは、又誤るのみ。委積の如きも、亦た往來あり。禮の注、來より去に至る、皆之を道に設くといふ者、是なり。故に懐方氏、委積を治め、往來に續食せしむ。地官、遺人三十里に宿あり、宿に委あり、五十里に市あり、市に積あり、皆以て往來の用を給す。第だ賓客は商賈行旅に同じからず、稍人の如し、稍聚を以て賓客を待てば、專ら是れ賓客、旬聚を以て、羈旅を待てば、專ら是れ商賈行旅。故に委積に掌客するに、牢米薪芻あり。賓客の禮、遠人と干するなきのみと。繼絶世は周武王の殷に克つや、その吳國に於ける、仲雍の曾孫周章をして泰伯の後を繼がしめ、別に周章の弟仲干虞をして仲雍の祀を奉せしめたるが如し。舉廢國は、蔡叔度殷を以て叛いて、誅に伏し、既に蔡を廢しけるが、その子胡能く父の行を改めしを以て、周公胡を舉げて魯の卿士となし、成王に告げ、復た蔡に封せ

が如し。朝聘以時。唐虞は四年に一たび朝し、夏商は五年に一たび朝し、周は六年に一たび朝す。大抵唐虞は地隔ければ朝すること數、三代地漸く廣ければ、朝すること漸く疏なるのみ。聘之以時、經に明文なし。厚往薄來は、周體に朝聘有往來禮、十二年中天子一巡諸侯、諸侯兩朝天子、天子六問于諸侯、諸侯六聘于天子、謂之往來とあるが如し。厚薄は齊語に諸侯之使、垂橐而入、梱載而歸といふもの、卽ち是なり。

これ、九經の必ず用ふべき所以の旨を明にしたるなり。凡そ修身の能く其道を立つる者は、唯だ其敬に由る。敬は當に大祭を承くる如きを以て能事と爲すべし。而して、身、その服行するところの禮憲を視るや、當さに齊明盛服、以て上帝の祭を承くる如くなるべく、非禮の事に於て、敢て動かさゝる所以、亦た知るべし。民性上を惡て、又小人多し。其君たるもの、或は實に、賢を忌む。是が故に、賢者動もすれば、讒言を被りて、離間せらる。君たるものは、須く先づ讒者を去るを思ふべし。又人の好むところ、必ず一偏に辟して、兩を兼ぬる能はず。これを以て、色を好むるものは、必ず賢者を惡む。故に君たるものは、須く色を遠くべし。又賢の賢たる所以は、その德義を以てす。もし貨利を貴へば、德義廢す。去讒遠色、賤貨の三は、賢を勸むる所以に外ならざること、知るべし。君は位尊くして、祿重し。然れども、君の其親に於けるや、其位

を賤うし、其祿を輕くするときは、其身に相邇からず、又その親族の好惡するところに於て、獨り相異なるを以てし、相同じきを以てせざれば、是れ亦た其心に相邇からず若し其位を尊くし、其祿を重くし、その好惡を同うすれば、內外皆相親邇するものにして、民をして各その親を親とするを勸めしむるに足る。之を官に置き、その官に因て、その任使を盛にすれば、供給內に備はつて、威重內外に彰はる。故に大臣を勸むる所以なりといふ。君の士に祿する、その忠信なるものを擇び、之が祿を重くすれば士皆忠信を以て其上に事ふるに意あり、故に士を勸むる所以なりといふ。時に使へば、耕牧を妨けず、斂を薄ふすれば、農に餘食あり、故に百姓を勸むる所以なりといふ。日にその勤怠を省み、月にその能否を試み、既禀の給各その事に稱へば、工は敢て怠惰を以て其事に從はず、故に百工を勸むる所以なりといふ。遠人の我に羈屬するもの、その歸往、必ず人を著けて以て之を送り、その來入、必ず人を遣て以て之を迎ふ、これを敢て遠人を慢せずと爲す、而して遠人善あれば、特に爲に之を嘉奬し、その不能の如きは、亦た唯だ之を矜恕するのみ、かくの如くすれば遠人の情、我に於て扞格の心を生せず、故に遠人を柔くる所以なりといふ。子孫なくして、其世絕えたるものは、之が爲にその遠族を求めて、以て之を繼かしむ、その國本と道を失ふて、廢亡するもの、之が爲に振舉して、以て之を復せしめ、その國亂るゝものは、我爲に之を治め、危きものは我爲に之を持す、その他諸侯をして相互に朝聘存問するに時を以てせしめ、我往けば厚く之に賄し、彼來れば之をして薄幣を將はしむ、彼此皆以て我に倚賴せむ、故に諸侯を懷くる所以なりといふ。その下、所以行之者也といふは、皆唯だ仁を以てするの義を明にするなり。以上九經の術、之を初むるに修身を以てしたるは、其本を正うしたる者にして、之に次ぐに尊賢親親を以てしたるは、仁義の實を明かにしたるなり。孟子の王道を論ず、るや、必ず仁義を以て本となし、井田の法及び文王岐を治めし政を以て言と爲す亦た此章と同じく、蓋し共に、治國の大經、聖學の定法なり。

**凡事豫則立。不豫則廢。言前定則不跲。事前定則不困。行前定不疚。道前定則不窮。**

凡事は達道達德九經の屬をいふ。豫は素定、其定を未發の前に定むるの稱。立は修身則道立の立。跲は躓くなり。疚は、心自ら其行の遂達し難きを疾むなり。窮は不道の義。前段、爲政在人といひ、取人以身といひ、因て九經に至り、專ら上に在るの君子、己を修むるに由て、必ず人を得べく、然る後に、九經張立すべきを云へり。故に、此以

下は、更に君子の爲に取られし人、亦た誠身の道に由り、前に定むべきを述ぶ。

凡そ事、豫定すれば、その事因て行ふを得べく豫定せざれば、必ず物の爲に阻廢せむ、言語に於ても亦た然り、其辭の次序するところを定むれば、その前後跲亂せず事、前に定むれば、又窘困を致さず、行、前に定むれば、その之を行ふの時に臨で、自ら畏難の心を生せず、道、前に定まれば、その心神實に之を執るの故を以て、能く自ら變化を生じ、以て流通窮らざるを濟すべし。この一節、下文在下位の一節の爲に、地を爲すもの、上下兩位の間の連鎖にして、議論一たび闕ぢて又開く。たとへば舟の峽間を行くや窮る如くして、又通ずるに似たりと云ふべし。

**在下位不獲乎上。民不可得而治矣。獲乎上有道。不信乎朋友。不獲乎上矣。信乎朋友有道。不順乎親。不信乎朋友矣。順乎親有道。反諸身不誠。不順乎親矣。誠身有道。不明乎善。不誠乎身矣。**

獲乎上は、其上たる人をして任すべき所を獲たりと謂はしむるなり。反諸身はその言行信せられざれば、自ら之を反し、己の身の未だ至らざるところあるを思ふなり。順乎親は前に出でし父母其順乎と相應す。誠は是れ實、明善是れ體。

この章、重ねて、不豫、廢に到るの義を論じ、治民より以下、その由て之を得る○道を發し、以て誠身に歸せしむるなり。凡そ、士、下位に在て、上に獲られざれは、その志治民の位を得むと欲すと雖も得べからず、從つて民を治むるに至らざるなり。而して、之を上に薦むるものは、明友の任なり。賢を知て舉げざれば、罪之を明友に歸すべし。朋友に信なるに道あり、親に順ならざれは、朋友に信せられず、何となれば、信は以て矯爲すべからず、必ず當に之を誠に發すべきなり。而して苟くも、身に誠なる者は、必ず先づ親に順なるべし。蓋し之を遷に能せずして、能く之れを遠に致すものあらざればなり。故に之を身に反して誠ならざれば、親に順ならず、親に順ならざれば、明友に親ならずといふなり。善に明かなるは、學問思辨の功にして、すでに其性と物を成すに至れば、身に誠なるもの、驗を得べし。前に道前定者といひしは、この誠身を言ふものゝみ。凡そ此に言ふところ、善を明かにして後に、以て身を誠にし、而かる後に以て親に順、而かる後に以て朋友に信、而かる後に以て上位に獲るもの、事の當に豫めすべきもの是れのみ。故に言前に定まれば朋友に信なるを得、事前に定まれば、親に順なるを得、身に誠なれば、行、前に定まり、善に明なれば、道、前に定まるを得べきなり。

誠者天之道也。誠之者人之道也。誠者不勉而中。不思而得。從容中道。聖人也。誠之者。擇善而固執之者也。

誠は其内渝るところなくして、以て終に其實を成すの稱。固は初の所に任じて去らざるなり。中は是れ體。誠は是れ實。

これ誠の誠たるところの本質を明かにし、次に善に明かなるの實を以て、之に合ふことを得べきを明かにするなり。夫れ誠は、天の道なり。故にその自ら行ふところ、亦た一陰一陽、自然に相繼いで、已まざる可きなり。凡そ人たるものは、皆天の命ずるところの性に率ふべく、之を誠にするは、即ち人の道のみ。誠は勉強を用ひずして、其義に中し、思慮を假らずして、其宜を得。この上句、誠の誠たる所以の狀を明かにし、從容の二句は、聖人の德、此に臻るを擧げ、以て之を明かにするなり。從容は、思はずして得るなり。中道は、勉めずして中るなり故に從容として道義の當に然るべきところに中るは、聖人の地位に外ならず。世に匹夫匹婦の愚あり、之を善と謂はざるを得ざるものあり、又之を惡と謂はざるを得ざるものあり。これ乃ち人性の由て然る所以のみ。たとへば、劇を觀るが如く、その情至切の處に至れば、乃ち人皆之が爲に墮淚せざるを得ず、即ち亦た勉めずして中り、思はずして得るもの、匹夫匹婦皆その然る所以を知らずして然り、故に天之道といふ。天の道は、黙晦常なく、時に存し、時に亡す、之をして中心に貫き、合して德性を爲さしめ、以て恆に能く存せしむるは聖人なり。唯だ常人に在りては、亡多くして存鮮し、これが故に、善を擇ばざれば義に中るを得べからず、固く之を執らざれば、誠を其中に成すを得ず、而して率ね多く則を以て其宜となす、故に人之道といふ。

博學之。審問之。愼思之。明辨之。篤行之。有弗學。學之弗能弗措也。有弗問。問之弗知弗措也。有弗思。思之弗得弗措也。有弗辨。辨之弗明弗措也。有弗行。行之弗篤弗措也。人一能之。己百之。人十能之。己千之。果能此道矣。雖愚必明。雖柔必强。

博は其施すところ敷衍して外に及ぶなり。學はその敎ふる物を已に成さむと欲し、常に之に事とするなり。審は物を盡して其象に曲ぐるの稱。愼は妄に之を置かざるの稱。措は其物を以て之を彼に參するの稱。明は之を辨ずるもの、詳かに疑似を辨じて復た惑を致さゞるの謂なり。凡そ文行忠信は、孔門の敎にして、學問思辨篤行は孔門學を成すの方、誠を立つの目なり。詩書禮樂の文、紛然として繁なり、故に博と曰ふ。問は之を已に切ならしめむと欲す故に審と曰ふ。思は之を中心に得

むと欲す、故に愼と曰ふ。辨は精微を盡さむと欲す故に明と曰ふ。行は微を積み以て大を成さむと欲す、故に篤と曰ふ。愚は卽ち愚夫婦の愚、明は明乎善の明、强は强哉矯の强、明は心智に屬し、强は體に屬す

博學以下は、蓋し善を明にするを得るの法なり。本に由て、その枝葉を究め、源に由てその流委を尋ね、以て之を學ぶもの、博學の謂なり。古人の言、その旨、我に入る、細到を得難し、而して學者師に就き、叩いてその委曲に及ぶもの、審問の謂のみ。文には文の緒あり、我心には我が意緒あり、愼で之を思はざれば、古文の意緒、深く我が意に入るを得ず、是を以て愼で之を思ふなり。愼で是を思ふと雖も、猶ほ恐らくは、己が意を以て之を誣ひ、古人の意、己と同うして異なるなしと爲さむ、これを以て明に之を辨せざるべからず、明に之を辨ずと雖も、固執して實に之を踐むに非ざれば、學その智を成さゞるなり、是を以て篤く之を行ふこと、自ら避くべからず。有弗學、學之弗能、弗措也以下は、學問思辨行の五者に就いて、苟くも一たび之を事とするもの、勉强して必ず之を遂ぐべきを諭するなり。凡そ人、他の敏捷、一たびして之を能くするを見るや、以爲へらく、是れ己が材能く及ぶところに非ずと、乃ち直に之を罷めて去る。十たびして之を能くするものを見るや又己が材能く及ぶべきところに非ずと、乃ち、直に之を罷めて去る。此の如きは、未だ勉强して事に從ふ者と謂ふを得ず。人の一たびして之を能くするを見れば、己は之を百たびして必ず之を得むことを思ふべく、人の十たびして之を能くするを見れば、己は千たびして必ず之を得むことを思ふべし。果して此道を能くするに至れば、愚と雖も、必ず明を成すを得べく、柔と雖も、必ず强を成すを得べきのみ。夫れ氣質は、變ずべからず、達德涅すべからずと雖も、學問の道、其功に百倍す。故に困勉の資と雖も、猶ほ以て之を己に得るあり、況んや、中人以上に於てをや。故に前にも、及其成功一也といへり。之を刀に譬ふるに、利なる者あり、鈍なる者あり、利鈍の中又利鈍あり、刀の性その類多し、然れども未だ磨礪せざるの前、皆用ふべからず。磨礪して後、利なる者は、以て玉を切るべく、鈍なる者は以て肉を割くべし。これ刀の達德なり。而して鈍は利を使ふべからず、利は鈍を使ふべからず、但だ磨礪の功を加へば、皆その性を成さむのみ。利鈍は人の智愚强弱なり、磨礪は人の學修なり、切割は人の達德なり。刀に利鈍あり、各その性を失はず、これ知は益す知にして、愚と雖も必ず明なるべく、强は益す强にして、柔と雖も必ず强なるべきを諭するに足らずと曰はむや。

此一章は、全卷中の大文字、孔子の言を引いて、大舜文武周公の緒を繼き、其傳ふる

ところ一致を明かにす、章内誠を語る、始めて詳、而して誠は、此篇の樞紐なり、誠は成德の驗、德を爲すの本にして、德の名に非ず、論語は詳に道德を論じ、其物を指示するを以て、誠を言はず、既に之を仁と謂ひ、之を禮と謂へば、誠を言はずして、誠自ら其中に在り、中庸の書特に學問の成否を論ずるに方り、誠を主として屢ば之を述ぶ、立言の旨異なる所以なり、前儒或は此章の義を附會し、變化氣質の說を始む、殊に知らず、氣質なる者は、天地の德氣搏合して我に在る者なるを、これ變ずべき乎、生の日、軀殼の內に留り、死の日、軀殼の外に去る、何に從てか、德と氣とを判たむや、彼れ天理の性を未生の前に求め、氣質の性を有生の後に求む、これ天地の命せざるところ、聖人の未だ言はざりしところ、之を以て解を爲さは徒らに許多の安排を費すのみ、朱子曰く、孔子家語を按ずるに、亦た此章を載す、而して其文尤も詳成功一也の下、公曰子之言美矣至矣、寡人實固不足以成之也とあり、故に其下、復た子曰を以て答辭を起す、今この問辭なく、猶ほ子曰の二字あり、蓋し子思その繁文を刪り、以て篇に附す、而して刪るところ盡ざるものあり、今當さに衍文と爲すべきなり、博學之以下、家語に之なし、意ふに彼に闕文あるか、抑も此或は子思の補ふところなるか、と、此言を見れば、家語を以て正本となし、子思一に是に本づきて、孔子の語を捃摭せしものと爲すに似たり、今夫れ家語は、王肅の僞撰、取るに足らざること言を待たず、然れども、子思その祖の言を引くとすれば、必ず本づくところあり、或は家に傳ふるところ、手抄の類より取りし者にして、而して、子曰の二字は、此際意を致さゞりし謬ならむ、家語は實に子曰の二字ありしが爲に、特に公曰の言を加へしに過ぎざるべし、朱子の說、半は可にして半は否、その取るべきを取り、取るべからざるを捨つるは、學者の事のみ。

## ◉第二十一章

自誠明謂之性。自明誠謂之教。誠則明。明則誠矣。

自は由なり、天德純粹にして、其道人に行はるゝ者、終古易らず、故に誠なり、誠なるが仮に、その人心に命ずる、亦た自ら能く善を知る、故に明と曰ふなり、而して行、其善に由る者、君子乃ち善行の發を以て諸を其內に本づき、以て自ら其軌を成す、之を呼で性と謂ふなり、先王修むるところの道に遵ひ、以て之が訓を設け、明にして後誠なるを得、之を敎といふ、下にある誠則明は、上の自誠明を釋し、明則誠は上の自明誠を釋するなり。

天の道、人に行はれて、善惡の辨、自ら掩ふを得べからず。即ち亦た、性に率ふの道の在るところにして、其道乃ち天の誠に由て、人の行に發し、善惡の別、自ら章分を成すを知るべし、故に自誠明謂之性といふ。聖人その善惡の別、自ら章分を成すものに因て、修輯して以て之を立て、詩禮の敎と爲し、人をして之を學び、以て之を誠にするの方に造ることを得せしむ、故に自明誠謂之敎といふ。その心、苟くも能く誠の成るところに居れば、自ら能く明徹するを得む、その爲すところ、苟くも能くかの明徹の迹に循へば、天の道、自ら行ふの誠に至るを得む。舊注家の言に從へば、子思、上章夫子天道人道の意を承けて言を立てし者にして、此より已下十二章皆、子思の言、以て此章の意を反覆推明せしものに外ならず。而して、議論語意を觀るに、王魯齋誠明書の說、まことに謂なきに非ず。蓋し大傳・樂記の流、零章斷句、攙入せし者ならむのみ。その前諸章の正にして盡せるに若かざること、辯を俟たず。

## ◉第二十二章

唯天下至誠。爲能盡其性。能盡其性。則能盡人之性。能盡人之性。則能盡物之性。則可以贊天地之化育。可以贊天地之化育。則可以與天地參矣。

天下至誠は、聖人の德の實、天下能く加ふる蔑きを謂ふなり。堯舜の聖の如きは、學問を假らざる者にして、鄭氏所謂大至誠なるもの、是れなり。盡は、自らその心性を盡くすなり。詩に彌性とあると、略ぼ同じ。盡其性は、その修設するところ、道敎に於て、能く自ら明辨して、餘蘊なく、知仁勇三者の用を盡すをいふなり。盡人之性は、三事惟れ和し、天下の人をして敎に由て以て進み、材を達して器を成さしむるをいふなり。盡物之性は、六府惟れ修るをいふ。木の性を盡せば、以て宮室を造るべく、金の性を盡せば、以て刀を鑄るべく、牛馬の性を盡せば、羈靮を以て鼻を穿つ如き、是なり。贊は助なり。天地物を生じて其用を盡さず、聖人に命じて之を盡くす、故に聖人化育を助くるなり。與天地參は、天地と並立して、三となるを謂ふなり。

學すでに至る處に臻るもの、之を天下の至誠と謂ひ、學の進境に由りて、之が等差を分つ、故を以て斯に至の目あるなり。天下の至誠、能く其性を盡くすものは、學德すでに成熟して、その發するところ、自ら能くその率ふべき性の自然と合するもの、即ち亦た自誠明なる者なり。自ら能く明辨して以て行へば、天下の道存す、故にその人を待つや、亦た能く人の性を盡くすを得。人の性は、陰陽の運、鬼神の用に本

づく。故に人の性を盡くすを得れば、その萬物に於ける、又能く物の性を盡くすを得む。今夫れ天地は陰陽鬼神を以て其用と爲し、以て萬物を化育す、故に能く物の性を盡くせば、治化の隆を極むべし、これ以て天地の化育を贊すべきなり。すでに天地の化育を贊するを得れば、その德かの天地と相耦て、之が耦たるべきなり。伏羲神農黃帝少昊顓頊帝嚳の屬、皆天下の至誠なり。然れども、仲尼堯舜を祖述す、故に此には唯だ堯舜を以て之に充つべく、かくして子思の旨を失はざるを得む。然れども熟思するに之を盡性といふは、聊か語弊あるに似たり。何となれば、心は思ありて性は爲なし、思あるものは力を以て能くすべく、爲なきものはその自ら長ずるに任せむのみ。故に孟子心に於ては盡といひ、性に於ては養といへり。この性を以て、至善とすれば、盡にして可なれども、若し善惡なきものとすれば、養の字、意義あるに若かざるを覺えずむばあらず。

**其次致曲。曲能有誠。誠則形。形則著。著則明。明則動。動則變。變則化。唯天下至誠。爲能化。**

其次は大賢以下、その未だ至らざる者を通じて言ふなり。致は推致なり。曲は節もしくは一偏、物の隈曲をいふ。致曲は大學の格物と同じ。誠はその事物一成すべきを見て、復た渝えざるを謂ふなり。形は物内に一成して、以て之を外貌に見はすなり。著は物見るべくして、常に存するなり。明は闇からずして辨ずべく、又光彩發越の盛なるを謂ふ。變とは物同うして體渝るなり。化は異物と相感じて成る者なり。蓋し天道の行ふところの者、内は天下の人心を貫き、外は天下の庸言庸行に著はる。人心の如きは幽明二界あり、心神の主は、常にその兩界の中間に居り、内常に幽界に感じ、天道の爲に皷動せらる、即ち天命なる者なり、外は平日の記魄に據て、以て天下の條理を辨ずるもの、此を其心明界の所在と爲す。これが故に心神の用常に外に應ずるに明にして、内省に闇し、内省の極は、百事皆識らざるに歸す、而して不識の在るところは、彼の天命の行ふところの地位なり。然りと雖も、天道の物たる、本と亦た幽明に通貫して、旨を一致に歸す。故に心神の主、能く事物の宜義に於て、審思して、曲詳を一致せば、幽界天道、自ら之と相應じ、以て其際に發せむ。故に曲能有誠といふなり。

聖人の爲すところ、天下の至誠に次いで、致曲あり、その人、身未だ至誠の域に造らず、事物を行ふ毎に、擬議心を盡くして、以てその理義の曲到を致すなり。その理義の曲制を致せば、其中自ら能く誠なる者あり、その事情曲到なれば、能く有るところ

ろの誠乃ち亦た自ら形迹を心目の間に現はす。苟くもその形迹を現せば、遂に著定す。著定すれば、その明、自らその心目の間に通融す。通融すれば、彼此一となりて以て其動を爲さゞるを得ず。すでに其動を爲せば我が形氣の習、乃ち之が變を爲す、變じて已まざれば、遂に其物と化せむ。その彼此一となりてより以往は、乃ち已に至誠の域に入らむとするもの、故に與に化するを得、更にその熟するに至れば、又以て能く他を化せしむるを得む。孟子に堯舜性之也、湯武反之也とあり。蓋し湯武は曲を致して、能く化境に至るもの。これ學者の殼率なり。

## ◉第二十三章

**至誠之道。可以前知。國家將興。必有禎祥。國家將亡。必有妖孽。見乎蓍龜。動乎四體。禍福將至。善必先知之。不善必先知之。故至誠如神。**

至誠之道は、至誠の物相繼ひで行くところ、舊軌の所在を指すなり。又按ずるに、至誠といふは、人之を誠にするの極をいふ。而して今、至誠之道といふは、乃ち以て至誠に合ふべきの道、偶ま平常の人事物色に見はるゝ者を以て言ひ、こゝには、その專ら善不善を知るを以て本となす。禎祥は福の兆。妖孽は禍の萌。正義にいふ、本と有て今異なるを禎といひ、本と無くして今有るを祥といふ、と。妖は、その字、女に從ひ、天に從ふ子、天は少好の貌、少好の女、事を用ひて國を亡ぼさゞるなし。孽は庶孽の孽、孽子事を用ひて、亦た國を亡ぼさゞるもの希れなり、故に二字を合して如上の義を生せしなり。晋の何胤曰く、國本有雀、今有赤雀來、是禎也。國本無鳳、今有鳳、是祥也、と。左傳に云ふ、地反物爲妖、と。說文に云ふ、衣服歌謠草木の怪を妖と爲し、禽獸蟲蝗の怪を孽となす、と。禎祥は、武王殷を討ちしとき、白魚躍て舟に入りし如き、是なり。妖孽は、幽王のとき、西周の三川皆震ひし如き是なり。國語に伯陽父曰く、昔伊洛竭而夏亡、河竭而商亡、今周德若三代之季矣、其川源又塞、塞必竭、夫國必依山川、山崩川竭、亡之徵也、川竭山必崩、若國亡不過十年、數之歲也、夫天之所棄、不過其紀、と。之相と似たる類例、歷代の史乘に見えたるもの、頻々として多し。龜法、今亡びて傳はらず、然れども大法蓋し著と遠からず、故に、易の繫辭傳、亦た著龜を並稱す。要するに、其にト筮の事なり。四體は人の四體、動作威儀の間をいふ。文輝云ふ、晋の惠、玉を受けて惰り、楚の屈瑕趾を擧げて高く、周の成肅公賑を受けて不敬、晋の厲公步高くして視遠く、晋の郤犨衛君の享を受け、皆傲て禮なきの類な

り、と。

誠は二ならず、二ならざる者は、必ず充實、以て其極を盡くす。たとへば寒暑の如し、太陽北よりして南に轉ずるや、必ず冬至に至らざれば止まず、その太陽南に在りて、天寒く日短きは、乃ち夏至の時にありて知るべきなり、その寒に在りて、暑を知る、此と相反す。ともに、是れ前知。大凡そ二ならずして充實するものは、皆前知すべきなり。故を以て、至誠の道、亦た以て前知すべきの妙用あり。天下國家に在るものに就て、之を言ふ、その將に興らむとするや、必ず禎祥あり、その將に亡びむとするや、必ず妖孽あり。或は又その兆、蓍龜に見はれ、或は又その機、四體に動く。蓋し誠の道は本と天地鬼神とその物を同うし、その體萬物を統合し、その機未來を通攝するが故に、その感通發動、自ら已むを得ずして然るなり。これが故に、人の心偶ま至誠の道に至れば、必ず先づその未來の禍福を知る、至誠の能く前知する所以の道、人情測るを得るところに非ざる者あり。かくの如くして、その智神の如しと謂ふべし、孟子に至誠而不動者未之有也とあるは、即ち亦た此意のみ。全章の意、略ぼ此の如しと雖も、禎祥妖孽を說くは、聖門の書たるに於て、聊か背馳するの嫌なきこと能はず。

## ◉第二十四章

**誠者自成也。而道自道也。**

自成は譬へば果實の自ら熟する如く、自道は譬へば草蔓自ら繞るが如し。その自ら成し、自ら道する地位は、乃ち是れ人の心性なること、辨を俟たず。

これ上に至誠如神と言ふに由て、遂に之を明かにするなり。言ふ、その誠、その道、皆彼自ら其物を成し、自ら其道を道とするを以ての故に、他の利害得失、その間に與ることを得ざるべきなり、と。詩に天生烝民、有物有則といへるは、即ち此義にして、物成て道乃ち存するを知るに足るべし。

**誠者物之終始。不誠無物。是故君子誠之爲貴。**

物は誠の混合するところの物なり、不誠の誠は、人の用を言ふ者となすべし。

上に言ふところ、自ら成し、自ら道するは、蓋し物之をして然かくならしむるなり、終始は、人に於てするところの終始を言ふなり。然れども、人は其物を知るを得べからず、其物に維持するを得るところの者は、唯だ其誠を以てす。故に誠ならざれば、之を維持するところ無し。而して物は乃ち其中に無し、これが故に、君子その物

を存せむと欲して、物知るべからざれば、唯だ之を誠にし、自然に發見するを俟つべきのみ、故に之を呼んで貴と爲せしなり。

**誠者非自成己而已也。所以成物也。成己仁也。成物知也。性之德也。合外內之道也。**

成己は修身をいふ、卽ち上文の自成なり。成物は立敎をいふ、卽ち上文の自道なり。力行以て身を修む、故に仁といふ。博學以て道を修む、故に知といふ。仁は幽界に屬する故に內、知は明界に屬する故に外なり。

君子の之を誠にするは、其事或は唯だ己を成すに類するものあり。然れども、其實決して此に止まらず。蓋し亦た物を成さむと欲す、故に之を誠にするを貴となせり。知るところ、敢て勉めずむばあらず、任ずるところ、敢て載せずむばあらず、これを以て必ず功あり、これ仁者の行なり。之を成己仁也といふ。知るものは、物の明に因て以て辨じ、之を定むるものなり。是が故に、以て勉むべき所と爲し、以て載すべき所と爲すは、物之をして然かくあらしむるなり。因て勉め、因て載す、卽ち所謂物を成す者にして、こゝに成物知也といへり。誠を己に悟れば之を仁といひ、物に悟れば之を知と謂ふ、合して之を言へば誠のみ。而して物の性、中に動く者は、民の性なり。今乃ち行ふて之を爲す者は、その性の動くところの者を以て、德を爲すや、內に於ては以て己を成し、外に於ては物を成す、故に合外內之道といへり。外內の合するや其誠の感ずるところ、其物の宜しく動くべき者を以てす、而してその事日に新なる者なるが故に、君子の此に從て動くものは、その擧措決して時宜を失はず、之を呼んで時措之宜といふ。卽ち卷首に出でたる君子而時中の意に外ならざるなり。

## ◉第二十五章

**故至誠無息。不息則久。久則徵。徵則悠遠。悠遠則博厚。博厚則高明。博厚所以載物也。高明所以覆物也。悠久所以成物也。博厚配地。高明配天。悠久無疆如此者。不見而章。不動而變。無爲而成。**

息は體息の息、間斷を謂ふなり。久は時の永長、その事すでに成て仍ほ往くなり。徵は形狀の見るべきものあり、外に驗あるをいふなり。悠は物の流行して息まざるの稱、卽ち無限なり。遠は見るところの遙長なり。博は定まる無くして廣きなり。厚

は充實重多なり。高明は高大にして、光明あるの義。載覆は解を要せず。配はその與に異なるものを以て、伉偶を爲すの稱なり。見は示の如きなり。章は文その異を得て、益す明かなるの稱。不動而變は、民に及ぼすところを指す。

君子その之を誠にするの務、能く之を其至るべきところに極むれば、其物乃ち直に天地の誠と合す、之を至誠といふ。今夫れ、天の道は息むこと無し、是を以て至誠亦た息むこと無し。かの君子能く之に徧し、その不息を以てすれば、その道能く久しく行はるを得む、この章文意、亦た其至誠の道に於て流行するところ、天明地德と相配すべき者を設けて、以て之を喩すなり。蓋し至誠の道、能く久しく行はるれば、天の明己に在るもの、乃ち之を地德の能く載するところの跡あるに通鑒して、之をその多歷に徵す。すでに徵あり、その息むこと無きを視れば、その道行はるゝ跡、乃ち悠遠となす。悠遠なれば、載行するところの地德、亦之に從ひ、以てその能く博厚なるを見る。地德既に博厚を見るに至れば、天明亦た之に從て自らその高明を識る。博厚なるものは下に位す、故に所以覆物也といふ。高明を識る者は上に位す、故に所以覆物也といふ。その悠遠久行するものは、乃ち物を其中に熟す、故に所以成物也といふなり。君子能く己の心に自識するところに於て、務めて之を奉ずれば、その高明乃ち天に配し、博厚乃ち地に配して、道の悠久なるもの、亦た無彊を致し、道と配合するに至らむ。その能く此の如きに至るものは、其化の人に行はるゝもの、復た己が作爲運用を須ゐず。蓋し天は必ず日月の彰著なるあり、以て自其章を下民に示す、これが故に、見えずして章なり。道は必ず四時の代運あり、以て自ら其化を民物に行ひ、民物以て變せざるを得ず、これが故に動かずして變ずるなり。地必ず久載永保、以て物實を其中に熟さしむるものあり、而して物實以て成らざるを得ず、これが故に無爲にして成るなり。この三言は、蓋し先づ下文述ぶるところの總綱を標するなり。

**天地之道。可一言而盡也。其爲物不貳。則其生物不測。**

可一言而盡は、なほ誠といふに過きず。不貳は終始爽渝せざるの稱、測は之を深者に度るの稱、爲物の物は上を承けて、又暗に誠をいひ、生物の物は萬物を指す。

上文すでに君子の道、天地と相抗偶すべき者を明かにす。故に遂に天地之道を以て之を言ふなり。博厚といひ、高明といひ、悠遠といひ、相異なるに似たれども、その實は一のみ、故に今一言を擧げて之を盡さむと欲す。不貳すでに之を盡せり。天は一を得て以て清く、地は一を得て以て寧し、天地の道、人之を承くるに不貳を以て

すれば、その物を生ずる、實に測られず、これを以て人唯だ貳ならざれば、心の生ずるところ、亦た其意未だ嘗て與に期せざりしところの効あるを得るなり。

**天地之道。博也。厚也。高也。明也。悠也。久也。**

これ更に前に言ふところ天地の道、その物たるや不貳なるに因て、物を生ずる不測なるの故を明にせむと欲し、重ねてこの六を擧げ、以て其義を見せしむるなり。博也厚也は、猶ほ博之也厚之也と言ふが如し。下の高明悠久、その旨、並に同じ、天地の道、博厚高明悠久、亦た其有に因て以て之を重累するに過ぎざるなり、或は言ふ、この節、恐らくは上文悠久無彊の下に在るべし、と、蓋し博厚配地三句の義を解するもの、此の如くすれば、上下相承け、最も順妥となすべきに似たればなり。

**今夫天斯昭昭之多。及其無窮也。日月星辰繫焉。萬物覆焉。今夫地一撮土之多。及其廣厚。載華嶽而不重。振河海而不洩。萬物載焉。今夫山一卷石之多。及其廣大。草木生之。禽獸居之。寶藏興焉。今夫水一勺之多。及其不測。黿鼉蛟龍魚鼈生焉。貨財殖焉。**

昭昭は耿耿といふ如く、明なり。星辰の辰は、衆星の、相合する所を擧げ以て、定むるの名。春秋傳に日月所會謂之辰、言次舍也とあり。繫は屬する所ありて、相交するなり。撮は增韻に、蹙聚而稍取之也とあり。華嶽は二山の名、四書賸言を見るに、河南の華と河西の嶽とを謂ふとあり。毛奇齡曰く、華嶽の二山は、河海と文をなす、と、按ずるに、周官職方氏に、鎭河南豫州、其山鎭曰華山、河西雍州、其山鎭曰嶽とあり、爾雅に、五山、河南華、河西嶽とあり、以て見るべし。振は詩の小雅、振旅闐々の振と同じ、箋に振は止とあり。振河海は其水を止むるを謂ふなり。卷は區、寶は增韻に符璽とあり、禮の聘義に圭璋璧琮、凡四器者、唯其所寶藏、藏以待用也、とあり、寶は必ず藏すべし、故に寶藏といふ。興は唯興之日、從新國之法の興と同じく、猶ほ出といふ如し。勺は說文に挹取とあり、黿は介蟲の元、龍は鱗蟲の長、鼉は黿の屬、蛟は龍の屬、鼉は魚鱗龍足にして、黿と族を爲す、陸機云ふ、蜥蜴に似て長さ丈餘、其甲鎧の如し、と、貨はその遷徙貿易を以て言ふなり。殖は財に因て財を生ずるの稱、寶藏貨財は互文を爲す者と見るべし。

これ天地山海の大、亦た無貳の多きを以て、物を生ずるの不測なるを得るを明かにするなり。天は唯だ人目に當るところ、昭々たる者多きなり、その窮なきに及びてや、日月星辰繫り、又萬物を覆ふ。地は一撮土の多きものなり、その廣厚なるに及

びてや、華嶽二山を載せて重しとせず、河海を振收して洩さず、萬物之を以て載せらる、山も亦た一卷石の多きものなり、その廣大なるに及びてや、草木之に生じ、禽獸之に居り、人の寶藏するところの物、亦た興る水は一勺の多き者なり、その不測に及びてや、黿鼉蛟龍魚鼈生じ、貨財殖す。不貳不息以て盛大を致すこと此の如し。人の道、亦た何ぞ然らざらむや。

**詩云。維天之命。於穆不已。蓋曰天之所以爲天也。於乎不顯。文王之德之純。蓋曰文王之所以爲文也。純亦不已。**

詩は周頌。維天之命の篇、天はその轉生して人心に來臨すること已まざるをいふ。於は歎辭、穆は深遠幽冥、探り難きの意、不顯は豈の字を上に添へて讀むべく、所詮必顯といふが如し。純は雜ならざるの意。按ずるに、この穆の字は、上の昭の字と反對する字、今相反する者を擧げて、更に其義を明かにす、不已は卽ち不貳、文王の德の純、亦た德の至誠を成すを證するなり、蓋曰は「是を言ふもの其意蓋し」云々といふの義にして、上を解する者なり。

こゝに引くところの詩、前なるは謂ふ、汝衆其れ之を上天の命と謂もへ、其物たるや穆乎たりと雖も、その來て人心に施すところの者は已まず、と、その之を言ふの旨、蓋し曰ふ、天の天たる所以は、唯だ此の如きを以ての故に、之を天と謂ふのみと、次は謂ふ、その爾る者に於て、豈に之を顯揚せざることありと謂ふを得むや、文王之を德にしたるは常に自ら之を純にしたるを以てなり、と、その之を言ふの旨、蓋しいふ、文王の文たる所以、唯だその是の如きを以ての故に、之を文王と謂ふのみ、而して所謂純なるものは、卽ち天命の已まざると、その致、一なり、と。こゝに二詩を引くは、人その至德を凝らせば、以て天と其道を合することを得べきを明かにしたるものにして、文王を以て其證となすなり。或は曰ふ、純亦不已といふは、古しへ注家の言誤て正文に入りしものなり、と。之を文章の上より見るも、之あるが爲に、齊整を欠くこと無しとせず、說者の言、取るべきに似たり。

この一章、天地の道、至誠息むなきを以て、重ねて聖人の盛德大業、亦た復た此の如きを明かにし、以て學者に殼率を示すなり。孔子嘗て堯の德を贊し、巍巍蕩蕩、民能く名づくる無しといへり。聖人の德固より一言にして盡くすべからず、況んや天地をや。故に中庸の書、誠の字を表出し、之れを至德凝結の義となし、以て天地を形容し、聖人を形容す、その不勉而中、不思而得といひ、物之終始といひ、如神といひ、無息といひ、悠久といひ、不貳といひ、不已といひ、純といふは、皆以上の義に因て、許多

の義訓を發せしのみ。誠の字、その義頗る廣しといふべし。

## ◉第二十六章

**大哉。聖人之道。洋洋乎發育萬物。峻極于天。優優大哉。禮儀三百。威儀三千。待其人而後行。故曰。苟不至德。至道不凝焉。**

聖人之道は詩書禮樂を指す。洋洋は詩の河水洋洋と同じく、流行して止まざるの貌。發育は、或は發し或は育するの義。萬物は德の物を指す。詩の大雅崧高篇に曰ふ、崧高維嶽、峻極于天、この詩の意、本と崧嶽の高を以て、德の高峻に比し、以て言ふものの、こゝに直に其辭を引き、聖人の德、頗る高きに喩ふ。優優は迫らざる貌。禮儀は經禮、威儀は曲禮。凝は結成の貌。故の字、上の言ふところに就いて之を釋す。

これ、下、問學を道はむが爲に、地を作るなり。大哉聖人の道は、先づ道たるの全體大用に就いて、以て之を嘆美するなり。古しへの聖人作るところの詩書禮樂の中に寓するところの道、天下に行はれ、之を學ぶものゝ心内、その狀、江河の洋々然たるが如し。而してその文義の、之を業とする者の心に於けるや、人に隨ひ時に應じ、或は鼓動して以てその德物を發し、或は勸誘して以てその德物を育す。故に發育萬物といふなり。而して、その德物の崇積して以て成るところの者、崧嶽の高きに似たるものあり。故に峻極于天といふなり。優優大哉は、乃ち其人の意、之を嘆美するを待つなり。禮儀三千以下は、特に其一を引いて、以て聖人立教の旨を明かにす。三百三千、多に過ぎたり。然れども、未だ嘗て特に義解を立てず、人をして學んで自得し、以て其德を成さしむ。所謂優々これなり。待其人の一句は、上の兩節を總結す。故曰以下は、蓋し古語、幷に之を引いて、その義解を立てざる故を釋するなり。凡そ學、之を苦思せざれば、聞くありと雖も、必ず用ふる所なきは、何ぞや。能く之を苦思するは、乃ち又純として已まざるの質ある者なり。苦思する能はざる者は、その德質なし。卽ち所謂其人に非ざる者なり。是を以て、聖人の教、急迫ならずして、其道皆人をして之を思ふて後に、禮義の教の如くならしむ。亦た其人に非ざれば、道虛しく行はれざるを知ればなり。而して苟不至德、至道不凝焉といふは、人先づ務めてその至誠をなすに非ざれば、學ぶと雖も、亦た其用を得るの旨少く、その要するところを以て前に言ひし至誠に歸せむと欲するに外ならず。至德は、暗に孔子を指していふ者ならむのみ。

**故君子尊德性而道問學。致廣大而盡精微。極高明而道中**

庸。溫故而知新。敦厚以崇禮。

己れ彼を總ぶるを以て、之を奉ずる之を尊といふ、論語に崇德といひ、孟子に有貴於己者といふ、皆同じ。或は邊の訛といふ。德性は上に謂ふところ。性の德。道問學は之を發育するの道。問學に賴るをいふなり。致廣大は、上に謂ふところ察于天地及び知人知天の旨と應ず。盡精微は上に謂ふところ致曲と應ず。極高明は乃ち上の博厚高明と應じ、道中庸は上に謂ふところの中庸と應ず。溫は內に其物を含んで去らざるなり。敦は其中含むところに因て、外愈よ其厚を加ふるなり。崇はその增高を厭はざるの稱なり。

これ、首篇より此に至るまで、大哉聖人之道の全義を總括し、以て其要を明かにするなり。君子、すでに、その德性の尊ふべきを知り、以て天の命と爲すと雖も、其實、學、禮樂に通ずるに非ざれば、自らその是非を擇ぶなし、これ必ず問學に道すべき所以なり。之を尊て其本に通じ、之を學で其曲に致すは、所謂致廣大而盡精微の者のみ。貳ならずして行を積み、以て已まざれば、高明を致し、曲を致して動けば、其知直に物と變ず。是に於て、乃ち高明を極むるを得。その行事、仍ほ中庸に道するを得む。中庸は元と匹夫匹婦と雖も、與に知るところ。然れども、其實は鬼神の德にして、時機の宜しきもの、學精微を盡くすに非ざれば、能く常に道すべからず。故にその次第、最後に居る、溫故は高明を極むるの實なり、知新は中庸に道するの用なり。蓋し庸德己に化すれば、故を溫ねて新を知り、以て古義を推し、今事の可否を決すべし。德厚を尊んで、息まざれば、敦厚自ら成らむ。中庸の其善を取るところ、一に聖人の禮に存す。禮を崇ぶ、亦た宜なり。朱子曰く、この五句、大小相資し、首尾相應ず、聖賢入德の方を示すもの、此より詳なるは無く、學者宜しく心を盡すべし、と。

是故居上不驕。爲下不倍。國有道。其言足以興。國無道。其默足以容。詩曰。既明且哲。以保其身。其此之謂與。

倍は背と同じ。興は興起して、位に在るをいふなり。詩は大雅。烝民の篇。哲は其物の宜しきを辨じ、之に通達するの德なり。

これ中庸及び崇禮の效を言ふ。凡そ上に居るもの、常に其下を見ること、與に晤對を爲すに足らざるもの、如くす、これ驕なり。而して君子には之なし。人の下なるもの、動もすれば、其身と謀て、その君父を遺すに至る、これ倍なり。而して君子には之なし。蓋し君子中庸に道し、禮を崇ぶ、乃ち可なく、不可なく、唯だ義に是れ與に比し、その宜を失はず、是を以て國に道あれば、その言以て其身を興すに足り、國に道

あれば、その獸以て其身を容るゝに足る。凡そこの四者、並に之をその中庸に道する所に於て得、故に是故の二字を以て文を起したるなり。後に詩を引くの旨、蓋し云ふ、君子中を以て其心と爲す、是れ庸を以てその由て用ふる所となせばなり。故に明哲、明哲なるが故に、その時宜を失はず、故に善く其身を保つ。然れども明哲は、世俗の謂ふところ、明哲巧に智計を用ひて、其身を保つ者に非ざること、辯を俟たず。宋儒に至りて、謬て、此節を說き、禍を後世に貽す、その愚、嗤ふべし。揚雄曰く、明哲煌煌、旁燭無彊、遜于不虞、以保天命、と。これ偶ま以て本文の解說に充つべし

## ◉第二十七章

子曰。愚而好自用。賤而好自專。生乎今之世。反古之道。如此者。烖及其身者也。

愚の解前に見ゆ、自用は自ら己の知能を用ふるを謂ふなり。自專は自ら己の施舍を專にするをいふなり。今之世は、蓋し晩周の世を指す。如此は如此言の略。烖は、古しへの災の字、天禍なり。

すでに高明を極むと雖も、中庸に道し、且つ禮を崇ぶに非ざれば、不可なり。かの自用自專を好むものは、天下の道、皆固より以て行ふ所あるに由るべきを知らざるなり。今の世に在りて、古しへの道に遵ふを知らざれば、即ち天に反し、又先聖に反するもの、上に居れば驕り、下に居れば倍く、明ならず、哲ならず、禍必ず其身に及ばむ。必ずしも、子孫に及ぶを待たず。蓋し、その惡、尤も深く、禍尤も速なるをいふなり。春秋の世、列國文武の政を變亂す、故に孔子爾か言ひしものならむか。その旨亦た深いかな。

非天子。不議禮。不制度。不考文。今天下車同軌。書同文。行同倫。雖有其位。苟無其德。不敢作禮樂。雖有其德。苟無其位。亦不敢作禮樂焉。

議は謀て之を定むるなり。禮は三百三千の統名、制は彼が來るところの形を裁し、我が器と合はしむるなり。度は丈尺、考は發動するところを視て、以て其器を察するなり。文は義を含んで、以て象に著はるゝもの、こゝには字音と形とを指す。故に、議禮は、上下、內外、大小、純强弱、會通するところを議するをいひ、制度は車旗服色の等制を定むるをいひ、考文は上古の世、國おの〳〵その文字を行ひ、その象を立て義を取るもの、或は正しく、或は正しからざるを以て、聖人その正を興して、之を行

ひ、その不正を毀つて之を發し、正不正、皆之をその象類に觀るをいふなり。軌は轍迹の度、兩輪相距つこと八尺を以て度となす。書同文は前に出でし考文と同じ。倫は彼の位するところ、此の位するところと相依り、合して以て位列をなすもの、父子君臣夫婦朋友長幼、これなり。苟無德以下は下に引くところ、夫子從周の語あるが爲に、發し、先づ其地を爲さむとするなり。前文愚而好自用と、この節の苟無其德とは、並に是れ映帶の語、賤而好自專と雖有其德とは又相對す、讀者當さに自ら之を詳にすべきなり。

これ亦た崇禮の意を承けて言ふなり。凡そ禮を議し、度を制し文を考ふるの事は、これ亦た賤にして自專を好むものと、相比すべきに似たりと雖も、殊に知らず、天子天の命を受けて、以て其任に當りし者なるを。これが故に、古しへより、天子に非ざるものは、之を爲さず。蓋し亦た天子の則あり、天下すでに車軌を同うし、書文を同うし、行倫を同うす。特に之を爲すを要せざればなり。今、晩周の世、天下なほ車軌を同うし、書文を同うし、行倫を同うす、即ち亦た特に之を爲すを要せざるの時なり。然りと雖も、天下新に定て其朝に王たるものあらば、之を爲す、必ずしも不可と爲さず、唯だ來王の舊を承くるものは、仍ほ之を爲すべかず。故に其位ありと雖も、其德なければ、敢て禮樂を作らず、其德ありと雖も、唯だ來王を致すべくして、苟くも位なければ、敢て復た禮樂を作らず。これ亦た、君子の愼むべきところなり。

**子曰。吾說夏禮。杞不足徵也。吾學殷禮。有宋存焉。吾學周禮。今用之。吾從周。**

說は之を發し、人をして其象に通せしむる義、下の學の字と互文を爲す。徵は引なり、證なり。杞は夏の後、宋は殷の後、周の時、並に侯國たり、而して二國各その先世の禮樂を用ゆ。存は亡びずして猶ほ在るを明にする辭。不足徵といひ、有存焉といひ、また互文。按ずるに、この語、論語に載するところと少しく同じからざる者あり、夫子の語、世に行はるゝずでに久しきを以て、言を引くもの、特に詞を殊にして、然りし者なるべし。

此に重ねて、夫子の語を引く所以の者は、君子の敢て禮樂を作らざる義を明かにし、以て下文の三重を起さむが爲のみ。吾夏禮を說かむと欲す、然れども古を去ること已に遠く、流風遺俗の存するもの、幾もあらず。故に己れ能く言ふと雖も、杞人の存するところ、その證となすに足らざるなり。宋、亦た然り。故に君子は、他の禮樂を知ると雖も、その善且つ尊にして徵あるものに非ざれば、敢て之を言はず。

全章暗に世の學者を戒むるの意あり、かの素隱行怪の徒、義農黄老の言に托し、以て先王の道を變亂して、而して、君子その風を聞いて之を悅ぶ。これ愚にして自ら用ふるを好み、賤にして自ら專にするを好むものなり。故に子思、孔子の言を類記し、以て明哲保身の道を示せしのみ。

## ◉二十八章

王天下有三重焉。其寡過矣乎。上焉者雖善無徵。無徵不信。不信民弗從。下焉者雖善不尊。不尊不信。不信民弗從。

寡はその當るところ多く見ざるの稱、重は貴重。上焉下焉は、三者の外に出づるをいふ。尊は前の位の字と相應ず。

これ夫子の言に因て、徵の尙ぶところを明かにするなり。三重は善・徵・尊、この三重の義を總べて、之を言へば、その旨、過寡きに歸せむ。これより上なる者は、徵なしと爲す。獨智論を立て、その言過高、その道隱怪、これ夫子杞の禮を說かざる所以なり。かくの如きものは、民の行に於て、相符する所なし。故に徵なしといふ。これより下なるものは、混衆生和、猥卑賤近、俗と抗仰を爲すの類、これ夫子殷の禮を言はざるの由なり。かくの如きもの、民之を視るも尊ばず、尊ばざるが故に、徵なし。ともに是れ民信せず、又從はざるもの、以て王たるを得ず、爲さゞるの勝れるに若かざるなり。三重、鄭氏以て三王の禮となし、呂氏、議禮制度・考文の事と爲す、然れども、解說迂濶に失するの嫌あり、故に取らざるなり。

故君子之道。本諸身。徵諸庶民。考諸三王而不繆。建諸天地而不悖。質諸鬼神而無疑。百世以俟聖人而不惑。質諸鬼神而無疑。知天也。百世以俟聖人以不惑。知人也。

君子は復た暗に孔子を指す。本諸身は、之を己に試むるなり。徵諸庶民は、之を民に施し、信從の驗あるなり。繆は出づるところ、理に違ふをいふ。建は立、彼に根するの稱。悖は法當に來るべくして、その情反て往くをいふ。質は正、正實を取るの義。疑は心兩端に惑ふて、決せざるの稱なり。俟は彼此の行て至るを待つなり。惑の字、解前に出づ。本諸身は、前の忠恕に應じ、徵諸庶民は前の庸言庸行と應じ、考諸三王は、前の達孝及び吾說夏禮と應じ、建諸天地は前の宗廟饗之子孫保之と應じ、質諸鬼神は前の鬼神及び父母其順乎と應じ、知天知人は前の知天知人と應ず。又按ずるに本諸身は善・徵諸庶民の徵及び考建は皆徵・質諸鬼神及び俟聖人而不惑は皆尊な

り、三重の義、こゝに初めて詳說を得、君子の道、至らざる無く、盡さゞる無きを明かにす。古人、その智直に天と通じ、以て天の道を制するを稱して、聖といへり。こゝに知天といひ、知人といひしは、此故にして、君子は即ち聖人に外ならず。

この章の意、上文君子尊德性より以下を總結す。君子の道はじめに之を己に本づく、己の欲せざるところ、偶ま誤て以て人に施すことあれば、或は之を正鵠に失したると同じく、反つて其身に求むる如き是なり。而して、その言行、皆之を中庸に取る、即ち之を庶民に徵するなり。三代の敎ふるところ、其文或は同じからざる者あり、其實は亦た之を以てするに過きず、故に謬らざるなり。天下四方に施し、人心皆服す、故に悖らざるなり。君子もとより天人の分に明かなり、故に天を知り、人を知るといふ。かくの如くして、至れりと爲すべきのみ。

**是故君子動而世爲天下道。行而世爲天下法。言而世爲天下則。遠之則有望。近之則不厭。詩曰。在彼無惡。在此無射。庶幾夙夜。以永終譽。君子未有不如此而蚤有譽於天下者也**

之を君子といふは、君子德行の象を立てゝ、之を言ふ德行の象は、即ち萬世を貫く。故に下に動而世爲天下道、行而世爲天下法とあり。凡そ君子の易詩書を目するや、天地の間、この德行の一物を具ふれば、常に衆庶の心上に存すべきを以て、之を立して君子といひ、以て志士擬倣の標と爲す。論語一篇の中、君子をいふもの、皆固より知らざるべからざるなり。法は道の發する節に當り、その形顯然として見るべきもの。則は常に同じくして、易ふべからざるをいふ。詩は周頌振鷺の篇、射は其物を指して之を取るの義、擇付する所あるを曰ふ、義解前に見ゆ。夙夜は晝夜の如し。間斷なきをいふ。詩意乃ち謂ふ、凡そ人心皆その情を固くする者なり、若し能く彼をして之を惡む無からしむれば、此に在りても亦た斁ふなきなり、是を以て君子之を失ふことなく、以て永く他日の譽望を終へむと欲するを庶幾するなり、と。

三重の中、最も重き者は尊なり、故に此段乃ち尊をいふ。君子、知は天人に通じ德は鬼神に符す、性情の極なり。此故に、その言行動靜、一に皆萬世の法となすべく、天下心を歸す、亦た易ふべからざるなり。引くところの詩意、蓋しいふ、君子の志、亦た之を身に本づけ、之を庶民に徵す、と。君子未有以下は、永終譽の字に就いて、更に之を其初に推本して、論せしなり。凡そ此詩言ふところ、先づ譽を得て後、始めてこの意を事とする者に類す。然れども、君子是を以て譽を始め、是を以て譽を終ふ。未だ是の如くならずして、蚤く其譽ある者あらざるなり。作者の意、丁寧といふべし。

この一章、上章の義を廣めて、次章孔子を贊する爲に本を起す。高氏曰く、有るに難きものは德、得るに難きものは位、遇ふに難きものは時、故に三重となす。有するに難きところの者に於て、之を有するを言ふなり。德あれば善、愚にして自ら用ふる者に非ず、位あれば尊、賤にして自ら尊とする者に非ず。時あれば徵、今に生れて古に反するものに非ず。これが故に、其道はこれを身に本づけ、これを庶民に徵し、以て三王に考へ、以て天地に建て、以て鬼神に質し、以て百世を俟つ。世に動かせば道となり、世に言へば法となり、世に行へば則となる。遠ければ望あり、近ければ厭かず。かくの如くして益す善、夫れ何ぞ過寡き此の如くならむ、と。これ全章の意義を總括したる者と見るべく、大體の旨、全くこゝに盡く。聖人實德を崇で、虛文を貴ばず、その道、人心に順ひ、天地に合し、世變に應じて、天下萬世の法則たること、是に於てか、知るべきなり。

## ◉第二十九章

仲尼祖述堯舜。憲章文武。上律天時。下襲水土。辟如天地之無不持載。無不覆幬。辟如四時之錯行。如日月之代明。萬物並育而不相害。道並行而不相悖。小德川流。大德敦化。此天地立所以爲大也。

祖は本を其人に取るなり。述は其義を傳述するなり。本ありて後に述ぶべし。夫れ堯舜は道の本、孔子之を述べて作らず、故に祖述といふ。憲は顯と同じ。詩に顯顯令德とあり。この書之を引いて、憲憲令德といひしことあるを見るべし。章は文章の章、分別して明かなるなり。顯と章と連る、其義宜しく相類すべし、故に顯明の義、當となす。孔子詩書を序し、周易を傳へ、禮樂を正す如き、又論語諸書文武を稱贊する如き、是なり。孔子は夏殷を法とせず、始終之を文武に取る、故に此言あり。卽ち前の不敢作禮樂と相應ずる者なり。律は物を理するなり。荀子の禮論に不法則濡櫛三律而止といひ、其注、律は理髮といへり。律天時は天文時日を正くし以て、之を明にするをいふ。襲は習と通ず、熟知なり。襲水土は江海川澤土地丘陵の高下美惡を熟知するなり。二句の意、かの魯に居て逢掖し、宋に居て章甫する如き、これなり。持は載の小なるもの、載は持の大なるもの。幬は覆の小なるもの、皆上より下を蓋ふなり。錯は交錯の錯。春秋二節、寒暑相交り、過不及なく、已にして漸く長じて、全暑全寒となる、之を錯行といふ。代明、日明な

れば月闇く、月明なれば日闇きをいふ。萬物並育は、蛇龍沮に在り、犬豕里に在り、物並び育して、相害せざるなり。小德は德の小なるもの、川流は川の流るゝが如く、小と雖も達せざるなし、天地に在りては草木魚鼈、皆かくの如き者あり、人に在りては孔子委吏となりて料量平かなる如き、是なり。大德敦化は、その化を敦厚にするをいふ、孔子天下を治めずと雖も、その魯を治めしと、弟子を教育したると、その迹、ともに見るべし。按ずるに、小德は全體の分、大德は萬殊の本、並行は川流敦化の道を指して言ふものなり。

これ相次いで夫子を稱賛する語。上に言ふところ、君子胸次の間、恒にその文德を温持し、その時宜を揆つて以て之を出し、行ふや必ず此の如きを實にするなり。堯舜以前は、事殘闕多く、跡怪僻に近し、これが故に姑らく之を舍き、堯舜以後に取ること、當に然るべきところ。その中庸の德に於ける如きも、舜が問を好み、兩端を執り、其中を民に用ひしを以て、その祖述するところとなす。而して堯舜德を同うするを以て、こゝには特に祖述堯舜といへり。夏殷は唯だ言ふべくして、徵するに足らず、今は專ら周の禮を用ふ、故に憲章文武といへり。夫子の中を用ふるや、時措の宜を揆る、故に上律天時といへり。一勺水の多き、一撮土の多き、貳ならざるの効を得、故に下襲水土といへり。天地の喩は、その內廣く、庸言庸行を蓄へて、時にその擇宜を思涉するの謂にして、以て萬物並び育するの義を發するなり。四時日月の喩は、道並び行はるゝの義を發するなり。凡そ德天地と合して、以て其本に據るは、即ち其大なる者なり。降れば、別に一名をなす、孝弟忠信の如き、亦た皆小德なり。然りと雖も、小德大德、相依て以て成る。たとへば四瀆の諸川の水に因て、以て其流を成すが如し。諸川の水、實に四瀆あるに由て、以て行くを知らば、小德その大なる者に依て、以て其道を通ずること、固より然るべし。故に小德川流といふなり。而して大德は、その物の言ふべきある無く、唯だ積厚已まざるを以て、敦化を爲すを見るべきのみ。夫子の胸中、この博厚高明を以て、之を爲して已まず、天地の大なる所以のものと、以て小異あること無し。故に天地所以爲大也といひしなり

この章、專ら孔子を推尊す、其故たるや他なし、先王の道、散亂紀なきこと久しく、之を集めて大成せしものは、孔子なり。故に漸く篇末に近づくに及び、頻りに堯舜の之を作りし所以、孔子の之を述べし所以を賛し、學者に示するに彖率の大なるものを以てせむとする微意、容易に之を推知し得べし。

## ◉第三十章

唯天下至聖爲能聰明睿知足以有臨也寛裕溫厚足以有容也發强剛毅足以有執也齊莊中正足以有敬也文理密察足以別也溥博淵泉而時出之。

聰は、能く聞き難きところに聽て通ずるの稱、睿は、其智能く知り難きところに通ずるの稱、聰は耳に在るの德、明は目に在るの德、睿は心の思ふところ聖なる所以。知は心の物に屬する所なり臨は上に居て下を視、彼をして我に承けしめ、以て位するの稱、寛は解前に見ゆ、裕は物を容れて餘地あるの稱、溫厚二字、解前に見ゆ、寛裕は容貌に就いて言ひ、溫厚は顏色に就いて言ふ、容は物を納承するの地たるなり、發は中より出で、外に著はるゝもの、動作の義、動容周旋の敏捷なるをいふ、强は解前に見ゆ、剛は之を行ふて撲屈せざるなり、毅は必ず爲さむと欲するところを成すを以て、行と爲すの謂、左傳には致果爲毅とあり、執は物を行ふて之を進退するの稱、齊は大小整頓放散せざるの義、故に禮の祭統用ひて以て齋の字を解せり、莊は內物の實色、外に發見するもの、矜嚴なり、齊莊或は嚴恪に過ぎやすし、故に必ず聖德たらむとせば、中正を缺くべからず、文は文章、理は條理、密は洩さず、察は物を甄別するなり、溥は高くして、其際を見ざるなり、博は廣くして根なきなり、淵は通流の下、水積んで滙を成すもの、深くして底を知らざるの義に取る、泉は湧出飛注して、流を外になすもの、出で、盡きざるの義に取る、禮の郊特牲に曰く、臭陰達於淵泉、と、淵泉は黃泉、如上の意義より、一歩を進めしものなり、溥博は物自ら備はるをいひ、淵泉は物自ら行はるゝをいひ、之を總べて時出之といふ。

前章言ふところは、夫子內自ら愼持し、以てその大德を其中に成すの情狀なり、而して此には、夫子の德、その萬庶に於けるや、又以て之に應ずるに足るものありて、以てその時措の宜しきを制するを言ふなり、夫子は、天下の至聖なり、故にその德已に天地と其明を同くす、これが故に、其正を知れば、又必ず其變を知る、その小人の爲すところに於けるも、通鑒せざる無し、すでに通鑒するに足るときは、以て臨んで之を制するに足れり、故に足以有臨といふ、而して其正なるものは、君子の響從するところ、小人の如きは心その道の正に通せず、行動常に其變に從ふ、聖人君子、乃ちその然る所以を審かにし、常に恕して之を容る、故に足以有容といふ、然りと雖も、此の如きの君子、その心已に能くその正變の因て分るゝところを知る故

に、元と寛裕温厚にして、變ずべからず、時に以て其正を抑蔽せらるゝ無き能はず、これが故に、時ありて其正を執ること、發強剛毅なるべく、もし民にして天倫を犯亂し、大義を蕩滅し、禮の詘くべきところ、刑の施すべきところ、法の加ふべきところあれば、必ず之を正うして後に已み、敢て其惑を以て、かの典禮を枉げず、之を呼で足以有執といふ、而して、その能く發強剛毅なる所以は、敬天の故に因るものにして、身を持すること齊莊中正なれば、行、準繩の如く、心、規矩の如く、喜怒必ず常にして、唯だ義の合ふところ、乃ち鬼神とその吉凶を合し、以て明命を奉ずるに足るべし、以上の四者は、皆學の上達に由て出づるもの、而して學の上達は、天下の文德を以て其内となし、智德通融、始めて用ふるを得る者なるが故に、事物の錯會混じ易きものに遇ふと雖も、必ず善くその文理を密察し得べし、文理苟くも密察なれば、禮樂の文、義理の辨、巨細類に隨ひ、精粗分晰すべく、禮義三百威儀三千の廣、至繁極なしと雖も、浩然條達するを得、天命の如きに至りても、惑失せざるべし、故に足以有別といふ、凡そこの數者の聖人に於けるや、周密具備せざる無きが故に、溥博といひ、常に襟胸に流行せざること無きが故に、淵泉といふ、時出之は、前に謂ふところ、時措の宜、これなり、凡そ此篇前後立言の旨、内より外に及び、末より本に及び、事趣多くして、物は一途に歸す、何となれば、前章言ふところ、上律天時、下襲水土の如きは、時措の宜しきを以てするに非ざれば、その道行はるゝ所なく、小大の德、川流敦化を得ること能はざるべし、これが故に、聖人その聰明睿智、或は乃ち寛裕温柔、或は乃ち發強剛毅、或は乃ち齊莊中和等、唯だ其行必ず天下を全うすべきの道を視、天下の衆を安んずるの時宜を以て、之を發するを常とす、然る後に川流敦化、乃ち各その美を成すを得べし、前後二章、至聖の德を論じ、形容盡さゞる無し、學者細味する所なくむばあらず、或は又解を爲して曰く、聰明睿智は、これ智の威儀、寛裕温柔はこれ仁の威儀、發強剛毅はこれ勇の威儀、齊莊中和はこれ禮の威儀、文理密察はこれ義の威儀、知仁勇三者は天下の達德、禮義は人道の大綱、故にこの五者を擧げて、以て孔子の至德を贊す、と、この說必ずしも、牽强附會に非ず、配置或は如何がはしきところあるも、全體に於ては、斷じて取るべきなり。

溥博如天、淵泉如淵。見而民莫不敬。言而民莫不信。行而莫不說。是以聲名洋溢乎中國。施及蠻貊。舟車所至。人力所通。天之所覆。地之所載。日月所照。霜露所隊。凡有血氣者。莫不尊親。故曰配天。

見は龍見の見の如し、民は人、說は悅と通ず、聲は名の遠く聞ゆるをいふ、洋は解前に見ゆ、溢は盈、施は詩の施于中谷の施と同じ、毛傳の注、移といへり、蠻は玉篇、南夷の名とあり、貊は貉と同じ、說文、北方の豸種とあり、これ南北を以て、東西を包みしなり、隊は墜と同じ。

溥博なるもの、周備の狀、その涯際を見ざること天の如く、淵泉なるもの、之を察して其極を測らざること淵の如し、故にその物以て著見して民敬せざるなく、其言以て出て、民信せざるなく、其行以て著はれて民說ばざるなしといふ、要するに皆時措の宜、乃ち性の德、外內を合するの道のみ、これを以て、その聲譽、中國より遠く四夷に及び、血氣あるもの、皆之を尊親す、之を尊親するは、以て天之類となすが故にして、分明以て天に配したるなり、これ孔子の高明を極めたるを言ふものにして、前に出でし高明配天を承け、兼ねて其意を收束せしものなり。

## 第三十一章

唯天下至誠、爲能經綸天下之大經、立天下之大本、知天地之化育、夫焉有所倚、肫肫其仁、淵淵其淵、浩浩其天。

經綸皆絲を治むるを以て喻と爲す、經は理して以て之を合するなり、綸は易彌綸の綸と同じく、次序を立てゝ散亂せしめざるの義、天下之大經、前に云ふところ、九經の類、或は云ふ、大經は五品の人倫なりと、經綸の首、禮を制し、以て五品を理す、虞書に謂ふところ、愼徽これなり、大本は大經の由て生ずるところ、中庸即ち是なり、立は名數を設爲することにして、孟子に謂ふところ謹庠序敎、申之以孝弟之義の如き、蓋し其一なり、肫、廣韻に腊之全者とあり、即ち全備無缺の貌、淵淵は靜深の貌、浩浩は廣大の貌。

前に至聖を稱して、此に至誠を擧ぐる所以、至聖はその天德を達し、民則を作るを以て之を稱し、その旨、猶ほ人智を離れず、至誠の如きは、乃ち其心直に天道と合ふものなればなり、至誠なるものは、其心常に天下の大經を失はず、常に之を中に存し、日に相接するところ、事物の義、之が條理を分ち、以てその大經を綸屬す、故に經綸天下之大經といふなり、その經綸の適宜を得る所以のものは、天下の大本大中を立つるを以て、其要となせばなり、故に立天下之大本といふ、次に其中の常に立つを得る所以のものは、天地萬物を化育する所以の德を通知するを以て、其基と爲す、故に知天地之化育といふなり、而して、その大本の立つところ、別に倚仗する

所ある者ならむや、亦た唯だ仁に事とするの心、肫肫巳まざるもの、物に應ずる所以にして、深く衆義を含むの智、淵淵として測られざるもの、中實と爲す所以なればなり。之に加ふるに、その天を敬するの至德、天と合して浩々たるもの其底をなすあり。故を以て、溥博にして其行を易へず、其物を貳にせざるを得るなり。

**苟不固聰明聖知達天德者。其孰能知之。**

固は猶ほ實の如し。達は所謂下學而上達の義。

聰明聖智、天德に達する者にして、始めて能く、肫肫淵淵浩浩たるを得、倚るところあるを待たず、能く大經を經綸し、大本を立て化育を成すべきを知る。苟くも此の如くならざるもの、斷じて能はざるなり。これ亦た孔子を指す者にして、前の仲尼祖述憲章一段の旨を激結す。孔子かつて堯を稱して曰く、惟天爲大、唯堯則之、と。孔子の堯に於ける、堯の天に於ける、豈に異なるものあらむや。この章の初に出でたる天下至誠、便宜上、堯と爲すを可とせむ。子思さきに至誠至聖を論じ、詳細盡さゞる無く、自ら聖に居るものと誤想さるゝ嫌なき能はず、これを以て特に此言を置き、その義、孔子より發して、僅に之を傳述したるものにして、固より聖に比せず、又怪詭高遠の言を爲して自ら喜ぶ者に非ざるを言ひ、紛々たる世論を避く、用意周匝といふべし。

## ◉第三十二章

**詩曰。衣錦尚絅。惡其文之著也。故君子之道。闇然而日章。小人之道。的然而日亡。君子之道淡而不厭。簡而文。溫而理。知遠之近。知風之自。知微之顯。可與入德矣**

衣錦の句は詩衞の碩人、鄭の丰の兩處に出でたれども、共に衣錦衣裝衣に作る。裝絅同じ、禪衣なり。玉篇にいふ衣に裏なきなり、と。古の婦人、途を行く、必ずその衣上に加ふるに衣の裏なきものを以てし、以てその衣文太だ著はるゝを揜ふ。或は謂ふ、絅は茵麻を織て布となせしもの、蓋し布の尤も疎卑なる者にして、之を錦上に加ふるなり、と。而して字書に茵なく、茵あり、註に曰く、本草綱目茵に作り、俗、蔯に作る、と。蓋し絅は古字に非ず。尚は加、著は解前に見ゆ。闇は不明なり。章は漫の反。的は明、射は射的の的の如く、表見指すべきの意、淡は濃の反。簡は繁の反。ともに附飾を斷てるものをいふ。溫は蘊の如し。德は中庸を指す。

これより以下は、復た君子入德の方を申べ、至誠の中德を成すや、須らく默して之

を成し、言はずして信なるを以てすべきを明かにす。詩を引くの意は、君子其文の著はるゝを惡むを示さむが爲なり。而して、其惡む所以は他に非ず、君子の道、唯だその闇然を以て日に彰著を得、小人の道唯だその的然を以て日に亡失を致すに由る。是を以て君子の道は交際に淡なりと雖も、其道に厭はず、淡而は、その人に接するを以て、之を言ふなり。唯だ中を執て其義を論ず、簡而は、その言に發する者を以て之を言ふなり。常に其心を失はずして、其義を修理す、温而は、その已に存する者を以て之を言ふなり。その遠く天下を動かす者は、これが邇近に發するに由つて、之を得べく、その天下を風化するもの、亦た實に之より出づ。これ至微と雖も、實は乃ち至顯の地位なり、若しこの數者の然る所以を知るものあらば、與に中庸の德に入るを得べきなり。

**詩云。潛雖伏矣。亦孔之昭。故君子內省不疚。無惡於志。君子之所不可及者。其唯人之所不見乎。**

詩は小雅。正月の篇。物の至れるを避けて隱に行ふものを潛といふ。伏は迫の反。昭は物形明著にして、衆目の覩る所となるなり。疚は解前に見ゆ。無惡於志は、猶ほ心に愧づる無しと謂ふ如し。

上文すでに詩を引いて、道の外表を以て致すべからざるを明かにし、更に此詩を引いて、君子其中に事あるところの義を發するなり。詩意いふ、魚の潛行するや、高地實に伏せりと雖も、其心之を以て昭顯の地となす、と。故に君子は自らその中心を省み、時に或は慊らざる者あり、その地、誠に潛して且つ伏すと雖も固より已に微の顯たるを知るが故に、これも亦た昭著の地なり。こゝに於てか、脫然として其慮を拂ひ、洒然として其意を變じ、內省疚しからず、垢惡するところ無くして浩浩然たるべし。君子小人の異なるところ、唯だ是れのみ。この一段、明にする所以を說きて、迹を說かず、前段に比して、更に精となす。

**詩云。相在爾室。尙不愧屋漏。故君子不動而敬。不言而信。**

詩は大雅抑の篇。相は視。爾は汝。屋漏、舊解に曰ふ、室の西北隅なり、と。曾子問には、之を當室の白といへり、蓋し屋上通明の處あり、故に屋漏と名づく、こゝに中霤の神を祭れり。

詩意乃ち謂ふ、君子は隱居獨處すと雖も、君子たるの德容を失はず、以て天神の鑒臨に對すと雖も、愧怍する所なし。屋漏人あるに非ず、況んや人ある處に於てをや。是れ上に言ふところ、內省不疚、無惡於其志を承けて、更に之を發したるなり。故に、

君子の行義、固定動かざるも民之を敬し、言はざるも人之を信ずるに至る。譬へば、神に禱るが如く、未だ神の爲すところを知らずして、先づ我を欺かざるを知る如し。君子の德、其極に至れば、天地神靈と相比するに足るべき者あり。

**詩曰。奏假無言。時靡有爭。是故君子不賞而民勸。不怒而民威於鈇鉞。詩曰。不顯惟德。百辟其刑之。是故君子篤恭而天下平。**

詩は商頌。烈祖の篇。奏は進、もしくは告。詩に譣に作る、古字なり。假は至、もしくは格。時は猶ほ如是といふ如きなり。爭は各その奏假するところの先後を爭ふなり。詩の序に曰ふ、烈祖祀中宗也、と。祭るや、必ず衆人の至るあり、故に奏假といふ。衆人至れば、宜しく言あるべきが如し、而して言なきは、靜たる所以なり、平時爭心なきを以て然り。勸は解前に見ゆ。威は畏。鈇は斧、鉞は大斧、皆刑具なり。次の詩は、周頌。烈文の篇。不顯已に前に見ゆ。百辟は諸侯。篤は初よりして已まざるなり。前に不愧屋漏といふ如きは、こゝに指して篤恭となすところの者、舜が己を恭うし、南面を正うしたる如き、是れなり。

詩意乃ち謂ふ、君子の祭祀、その薦饌奏假の事たるや、素よりすでに成式あり、言辭を以てする無しと雖も、各人その成式を服行し、敢て爭あること無し。君子の行誼恒あり、下民敬信するもの、殆んど是に言ふところに類す。これが故に、君子は賞せずして民自らその必ず賞するを知り、以て勸み、怒らずして民自らその必ず罰するを知り、以て鈇鉞よりも威なり。次に引くところの詩の意は、その心の思ふところ、豈に人に顯ならずと謂ふべけむや。今實にかくの如きの德を見ば、百辟必ず其德を慕ひ、以て之に刑せむ。卽ち亦た時靡有爭の義に比して、其旨更に悠久なるもの、此を引いて以て天下平の義を喚起するなり。故に君子は必ず古人の成式を承守して、敢て違ふこと無かるべきなり。不顯惟德、百辟其刑之といふは大に玩味すべき處、不言の敎、自ら人心を感ずるをいふ者に外ならず、以て前段言ふところ遠之近、風之自、微之顯の義、貫通して此處に存するを知るに足らむ。

**詩云。予懷明德。不大聲以色。子曰。聲色之於以化民未也。詩曰。德輶如毛。毛猶有倫。上天之載。無聲無臭。至矣。**

詩は大雅。皇矣の篇。予は上帝の自稱を設爲せるなり。懷は眷念なり。明は「明之」にして、德は大學に謂ふところ明德の義。大聲は氣を盛にすることにして、氣盛なれば色怒る。聲色に小大あり、その大なる者は禮樂文章これなり。これ未だ以て民を化

すべきに非ず。今說かむとするは本なり、末の取るところに非ず。故にこゝに孔子の語を挿入し來る。次に引くところの詩は、大雅文王の篇輶、鄭箋に輕と訓せり。今夫れ、天の命ずるを性といひ、性の正しきを德性となす、德に形象なければ得て擧くべし。故に詩人毛を以て之を況す。然れども、すでに如毛といへば、猶ほ形象比すべきの跡あり、未だ盡せりと爲すべからず。上天之載、無聲無臭は、大雅文王の篇より出でしもの、德は上天の載、聲色以て人を動かすに非ず、人亦た之に倣ふて、自ら其心を愼み、以て自ら之を敬奉すべしとの意。無聲無臭、宋儒以て無極大極の妙を形容せしものと爲す。殊に知らず、詩の語は本と平々舖叙せしもの、甚だ深義なく、夫子の天何言哉、及び孟子の天不言等の語と、其意一般なるを。彼の故らに解を費すもの、辨せざるべからず。

引くところの詩意、乃ち言ふ、上帝文王に謂て、曰く、予心に能く明德を明にするの君を懷ふて止まず、而して德を明かにするは、大聲疾呼、以て顏色を變ずるの際にあらず、唯だ君子の篤恭、天下の人をして自ら其德を愼ましめ、以て治平を致すものに在り、と。蓋し聲色之を大にすと雖も、遂に以て民を化すに足らず、誰か甘じて桀紂の暴政に服するものあらむや。こゝに夫子の言を引きしは、重ねて、かの聲色を以てするものを排するのみ。次に引くところの詩意、德を己に致さむと欲す、輶輕なるが故に、必ずしも力を費さず、猶ほ毛を擧ぐるが如しといふ。蓋し人心一轉の間にして、誠に能く敎を起さば、德乃ち己が有となるべければなり。德を比して毛といふ、毛は至輕と雖も、猶ほ物の倫すべきあり、之を至當の喻と云ふを得ず。若し夫れ、文王の篇云ふところ、上天の明命、人心に載するところ、聲なく、臭なきものにして、唯だ之を獨智の地に、默會すべきのみ。不動而敬、不言而信なる者、自らその中に存す。これ形容の言に於て、復た尙ふるなく、頗る至當となすべきなり。

中庸の書を完全のものとなし、其妙を贊する學者は、多く下の如き語を以てす。曰く、この章、全篇の結なり、故に首章に謂ふところ、愼獨の義を廣め、誠者天之道、誠之者人之道、といふを以て、指歸と爲し、無聲無臭の天德たるをいふて、以て篇を終ふ。而して前には天命といひ、此には上天之載といひ、前には莫見乎隱といひ、此には人之所不見といひ、前には中和位、萬物育といひ、此には微之顯といひ、前には中和位、萬物育といひ、此には篤恭而天下平といふ。一正一反、相表裏するところ、大賢の屬辭精彩微密、罅漏ある無く、反覆丁寧、人に示すの意、至れり。初めに理論を叙し、後に實行を說く、高より卑に及び、上より下に及ぶ、一も間然すべきところ無く、程子がそ

の「味窮りなく、皆實學なり、善く讀むもの、玩索して得るあらば、終身之を用ひて盡くす能はざる者あり」といへる、頗る中れりと爲す。或は云ふ、篇中放失あり、攙入あり、と。斷じて然らず。たとへば萬派の飛流、奔注して、一壑に歸するが如く、章法頗る縝密となす。舊注家之を知らず、多岐亡羊、終に不顯惟德といふを以て玄德の義となす、これ老莊の言を以て相混じ、予懷明德と相謬るもの、その謬たるや、固より昭々たりと爲すべし。」と。然れども、かゝる照應は、その疑ふべき部分に存在し、中庸の主要なる部分と相關せざるが故に、未だ放失攙入の異說を否定するに足らず、唯だ旨意取るべきもの、姑らく之を存するも、害なきに止まるのみ。


四書新釋　中庸　畢

明治三十四年十月廿四日印刷發行
明治三十五年四月再版發行
明治三十三年十二月三版發行
明治三十六年十四月四版發行
明治三十九年四月五版發行
明治四十年二月二十日六版發行

【中庸奥付】
定價金貳拾錢
（金二錢本）

著者　久保得二
發行者　大橋新太郎　東京市日本橋區本町三丁目八番地
印刷者　吉見繁藏　東京市小石川區久堅町百〇八番地
印刷所　博文館印刷所　東京市小石川區久堅町百〇八番地


著作權所有


發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

# 東洋通史

文學士久保天隨君著

全部十二冊完成

## 第一卷

筆を三皇五帝の世に起し、東西史家の所說を捃摭し、漢族の先祖及び源流を考覈し、三代の興亡を經て、春秋の末に至る。從來太古鴻荒の雲霧に閉鎖されたる支那の太古史は、茲に正確なる解釋を得、牛犀渚を照す時、萬經盡く露はる。

## 第二卷

戰國七雄の爭鬪は、史上の鉅觀にして、龍躍り虎嘯くの概あり。降て始皇の雄圖を敘し、漢楚の角逐に至る。其間紛糾せる時日を巧に排序して、快刀亂麻を斷つの概あり。史眼炬の如く、善く幽を闡き淑を顯はす。

## 第三卷

泗上の亭長威海內に加ふる時より、新莽の簒奪を經て、光武の中興に至る。其中武帝の疆外經略を詳述する、凡そ五章、考據精確にして、罅漏なく、從來の史家內に詳にして、外に略なるの弊を襲はず、亦是れ一家所創の特見。

## 第四卷

漢氏東して、鼎威漸く輕く、繼いで三國となり、兩晉となり、赤壁の前後、天下の形勢を論述するところ、海闊て山立つの概あり。然れども、最も力を注ぎしは「四夷の形勢と日本の交通」「印度の文化と佛敎の東漸」「西域經略と羅馬の交通」の諸章にあるべきか。

## 第五卷

八王の亂、一たび釁を啓いてより、五胡の戰塵中原に滿ち、朝興暮倒、凡そ十六國、其後長江天塹をなし、忽ち朝の南北を分ち、騷亂の絕へざる三百年。この原委を詳にし、大勢の由て分るゝ處を明にす、麻姑の爪、痒きを搔くと一般。

## 第六卷

隋の煬帝の荒淫、國を喪ふより天寶末年安史の亂に及ぶ、其間太宗王治の世は、漢族繁盛の極頂にして、東洋史上一大轉回の時機に際す。この唐室衰亂の因て論ずる如き、眞に其世を尙論ずるものの、新分曲折を視るもの非か。

## 第七卷

唐の衰運黃巢一度亂を始め朱李二氏の交鬪終に三百年の社稷を覆し、やがて五代十國の世となる。滿紙皆腥血の痕、夜窓の陰風、鬼人に憑るを疑ふ。而して唐漢間の人文を論ずるや、精該簡評、要を提け、玄を釣して、盡さゞるなし。

## 第八卷

宋室一度興るや、北には遼あり、西には夏あり、國力の富强を圖るや、熙寧の新法出て、黨論紛々、然後黑水靺鞨新に金の一國を成し、汴京忽ち陷り、寒草蔓煙、五國城を鎖し、南渡遂に厄をなす。變を觀、時勢を明かにするもの、是れ千秋の殷鑑。

## 第九卷

成吉思汗一度斡難河の僻地より起り、しきりに地を拓き、四十汗國を滅ぼし、踵いて拔都の歐洲經畧、旭烈兀の波斯戡定あり、世祖忽必烈に至り、遂に四百洲を擧げ、餘威東南亞細亞の諸邦を震はしむ。東洋史の精彩正に此卷にあり。

## 第十卷

明の社稷頗る多事、安南緬甸屢々征伐を勞し、韃靼青海侵敗是れ事とす。而して倭寇に連接したる豐公の征韓及び歐人の東漸は、東洋史上の一變局たり。著者尤も意を此に致し、資材宏富、運筆精到、以て加ふる蔑きのみ。

## 第十一卷

清の太祖奢爾哈赤、滿洲の野に起り、世祖に至りて、漢族を服し、現代帝國の基を定む、康熙乾隆の至治、史上に彪炳し、國勢の隆こゝに極まる、然る後露國の東侵政井と英人の印度征服とあり、東洋の風雲これより動く。正に是れ世上有用の大史筆。

## 第十二卷

鴉片戰爭の後、清室漸く振はす。黑龍江岸版圖日に蹙まり、日清の衝突に次て北京城の攻圖ある遂に日露の關係に及び、結ふに黃禍の豫測を以てす。既往に照して、將來を卜し、この謀略を籌し、其形勢を畫す、滿紙皆熱血痕。

和裝正價五拾錢 郵稅八錢

發兌元 東京 本町 博文館

割引價 六冊 五圓 二郵稅 十冊 七圓一錢八 全部 錢宛

# 支那文學全書

全部貳拾四册　一册紙數四百餘頁

正價（一册金二十五錢〇十二册貳圓五十錢〇二十四册金四圓七十五錢〇郵税一册八錢）

第一編●四書講義（上）内藤耻叟君述
第二編●四書講義（下）内藤耻叟君述
第三編●小學、孝經、忠經講義　内藤耻叟君述
第四編●老子、吳子、孫子、列子講義　小宮山綏介君述
第五編●韓非子講義（上）小宮山綏介君述
第六編●韓非子講義（下）小宮山綏介君述
第七編●莊子講義（上）大田淳軒君述
第八編●莊子講義（下）大田淳軒君述
第九編●正文章軌範講義　石川鴻齋君述
第十編●荀子講義　城井悔庵君述
第十一編●靖獻遺言講義（貳切）
第十二編●唐詩三體詩講義　大田淳軒君述
第十三編●續文章軌範講義　石川鴻齋君述
第十四編●荀子講義（下）城井悔庵君述
第十五編●十八史畧講義（上）大田淳軒君述
第十六編●近思錄講義　内藤耻叟君述
第十七編●十八史畧講義（下）大田淳軒君述
第十八編●戰國策講義（上）平井魯堂君述
第十九編●戰國策講義（下）平井魯堂君述
第二十編●墨子、文中子講義　内藤耻叟君述
第二十一編●詩經講義　小宮山綏介君述
第二十二編●史記列傳講義（上）城井悔庵君述
第二十三編●史記列傳講義（中）城井悔庵君述
第二十四編●史記列傳講義（下）城井悔庵君述





獨逸伯林大學教授　文學博士　パウルゼン氏原著
文學博士　故蟹江義丸君　藤井健治郎君　共譯
文學士　深作安文君

# 倫理學大系

全一册洋布上綴
正價金壹圓八拾錢
郵税拾五錢

東京　博文館　發行

本書は伯林大學教授パウルゼン氏の原著倫理學系統を翻譯したるものなり。其倫理史篇は極めて簡潔に其要を擧げて、茫々三千載間に起伏せる人生間の變遷を、一目の下に瞭然たらしめ、其原理論篇は穩健摯實の見を以て、中正の主義を宣べて人生の趣旨を闡明し、其德及本義務論編は周匝萬遍の考察能く人生諸般の實際問題を究明して躬行に資して敢て遺憾なからしむ。倫理の書刊行せらるゝもの決して尠しとせずといへども、斯の如く包括的にして内容多き書は稀なり、實に良書といふべし。倫理研究に志す者及教育家は謂ふに及ばず、政治家も社會改良論者も實業家も皆本書を讀まざるべからず。否眞に人生の旨趣を領會して而して社會に處せんとするの士は必ず本書を繙かざるべからず。

文學博士　蟹江義丸君著

# 倫理學

上製金五拾五錢　郵税金十錢
並製金四十錢　郵税金八錢

現今倫理學研鑽の隆盛なる、斯學を論ずるの書饒多なりと雖、要するに近世の學派は、之を動機論派功利論派の二に分岐すべし、動機論者は重きを主觀に置きて、道德律の先天的なるを唱道し、功利論者は重きを客觀に置きて、其後天的なるを主張す。然りと雖其弊たる、前者は陳腐に流れ後者は淺薄に失し、共に正鵠を得たりと云ふ可らず、譯者此に見るあり、斯る兩學派を調和し、兼て英國倫理學界の最近思想を代表せるグリーン一派の所觀と適合せる、パウルゼン氏が著書を執つて是を譯述す。蓋し氏が書は最も公平中を得たるものなれば也、若し夫れ譯文に至つては、明快透徹、嚴にして一系を亂さず、以て太中至正の公論を窺ふべく、以て歐洲倫理學の趨勢を卜知すべく、敢て江湖の一讀を推奬す。

柏軒　松井廣吉君編

新撰 **大日本帝國史**　《第四版》

全一冊　正價金四拾錢　郵稅金拾貳錢

▲洋裝大判　紙數五百六十四頁

本書は肇を上代より起して、近代帝國歷史の盛觀たる征清役の顚末を叙し、開戰の原因、海陸の諸戰、講和、凱旋、行賞、臺灣平定に到る迄古今の興亡戰國の概勢、覇業の勃興より、政治文學、風俗、農工商業、美術等に迄說き及ぼし、綱を提け、要を擧げ、精にして密、一讀帝國史の要領を得るに於て、他に類書なきことを首肯せしむる眞史なり

文學博士　栗田寬君校閲
增田于信君著　《第廿四版》

新撰 **日本小歷史**

全一冊　正價金拾五錢　郵稅金六錢

▲洋裝大判　紙數二百餘頁

本書は我が國史に尤も精通せらるゝ所の增田于信君が上神代より征清戰役の結末明治廿八年八月廿日諸將の叙勳授爵に至るまで綱を擧け目を立て最も簡易明瞭に記述せられたるものにして特に史學の大家栗田先生の校閲を經たるものなれば史學上個強なる參考書及び公私學校教科用書として特に無比の良書なり。

東京本町　博文館發行

終